

518  
147



始



JRE 4A-25

大正十四年五月

木炭ニ關スル經濟調査

鐵道省運輸局

木炭ニ關スル經濟調査  
正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
七	表上段	窯 ホリコト 素	窯 ホリコト 素	一一二	右表二段	四、九六一	四、六一九
二一	上段	左 仲	右 仲	一一九	養 蠶	數字順次一行繰上	數字順次一行繰上
四四	末段	二、二八一	二、二八一	一一二	(備考)	中 石橋合計ニハ千噸乾燥用ヲ含ム(脱)	中 石橋合計ニハ千噸乾燥用ヲ含ム(脱)
六三	末段	一、七四四、二五五	一、七四四、二五二	一一一	左ヨリ	三 室蘭驛ノ三萬	三 室蘭驛ノ二萬
六四	三段	一、七四四、二五五	一、七四四、二五二	一三三	表九年欄	二〇	二五
七二	下表五段	一七〇	二七〇	一四八	沼津四年欄	一、一〇〇	一、〇〇〇
七三	上表四段	二、三二四	二、三一四	一五〇	左表合計欄	三三九	二三九
八二	左ヨリ	二、三二四	二、三一四	一六七	夫 賃欄	八十六萬	五百八十六萬
九七	(備考)	八 別 數 同	八 數 提 量 年	一九六	燒 夫 賃欄	含 双 子 及 總 代 ノ 文 字 ハ 左 隣 リ 三 五 〇	含 双 子 及 總 代 ノ 文 字 ハ 左 隣 リ 三 五 〇
一〇二	表上	八 別 數 同	八 數 提 量 年				

518-147



# 木炭ニ關スル經濟調査

發行所寄贈本

## 目次

第一章 總論 ..... 一頁

    第一節 炭ノ意義 ..... 一

    第二節 木炭ノ性質 ..... 二

        (イ)比重 (ロ)容積重 (ハ)發火點 (ニ)熱量 (ホ)吸水、吸濕性 (ヘ)瓦斯吸着性 (ト)脱色性 (チ)硬度 (リ)發熱溫度及其ノ保持時間 (ヌ)爆跳 (レ)組成分 (ヲ)立消

    第三節 炭化ト加熱溫度 ..... 一八

        (イ)炭化作用 (ロ)我國ノ製炭溫度

    第四節 木材炭化ト生産物 ..... 二〇

大正  
14. 5. 25  
寄贈

頁	目次	頁	目次	頁	目次	頁	目次	頁	目次	
1	第一章 總論	1	第一節 炭ノ意義	1	第二節 木炭ノ性質	2	第三節 炭化ト加熱溫度	18	第四節 木材炭化ト生産物	20
2	第二章 炭ノ生産	2	第一節 炭ノ生産ノ概況	2	第二節 炭ノ生産ノ設備	3	第三節 炭ノ生産ノ技術	4	第四節 炭ノ生産ノ經濟	5
3	第三章 炭ノ消費	3	第一節 炭ノ消費ノ概況	3	第二節 炭ノ消費ノ設備	4	第三節 炭ノ消費ノ技術	5	第四節 炭ノ消費ノ經濟	6
4	第四章 炭ノ輸出	4	第一節 炭ノ輸出ノ概況	4	第二節 炭ノ輸出ノ設備	5	第三節 炭ノ輸出ノ技術	6	第四節 炭ノ輸出ノ經濟	7
5	第五章 炭ノ輸入	5	第一節 炭ノ輸入ノ概況	5	第二節 炭ノ輸入ノ設備	6	第三節 炭ノ輸入ノ技術	7	第四節 炭ノ輸入ノ經濟	8
6	第六章 炭ノ貯藏	6	第一節 炭ノ貯藏ノ概況	6	第二節 炭ノ貯藏ノ設備	7	第三節 炭ノ貯藏ノ技術	8	第四節 炭ノ貯藏ノ經濟	9
7	第七章 炭ノ運送	7	第一節 炭ノ運送ノ概況	7	第二節 炭ノ運送ノ設備	8	第三節 炭ノ運送ノ技術	9	第四節 炭ノ運送ノ經濟	10
8	第八章 炭ノ加工	8	第一節 炭ノ加工ノ概況	8	第二節 炭ノ加工ノ設備	9	第三節 炭ノ加工ノ技術	10	第四節 炭ノ加工ノ經濟	11
9	第九章 炭ノ利用	9	第一節 炭ノ利用ノ概況	9	第二節 炭ノ利用ノ設備	10	第三節 炭ノ利用ノ技術	11	第四節 炭ノ利用ノ經濟	12
10	第十章 炭ノ展望	10	第一節 炭ノ展望ノ概況	10	第二節 炭ノ展望ノ設備	11	第三節 炭ノ展望ノ技術	12	第四節 炭ノ展望ノ經濟	13

第五節 各種製炭方法ト木炭ノ種類……………三

第一、生産方法……………三

- 一 無蓋製炭法
- 二 堆積製炭法
- 三 築窯製炭法
- (イ) 窯内消火法 (ロ) 窯外消火法
- 四 木材乾燥
- (イ) 「レトルト」乾燥法 (ロ) 窯内乾燥法 (ハ) 特種乾燥法

第二、木炭ノ種類……………三〇

- 一 製法ニ依ル區別
- (イ) 白炭 (ロ) 黒炭 (ハ) 松炭(鎮治炭) (ニ) 乾餾炭
- 二 形状ニ依ル區別
- (イ) 丸炭 (ロ) 割炭 (ハ) 粉炭 (ニ) 枝炭
- 三 樹種ニ依ル區別

第六節 木炭ノ用途……………三二

第一、家庭用……………三三

- 一 採暖用
- 二 厨房用
- 三 濾過用
- 四 吸收用
- 五 炭團製造用

第二、農業用……………三三

- 一 蠶室保温用
- 二 繭乾燥用
- 三 絲取用
- 四 製茶用

第三、工業用……………三三

- 一 冶金用
- 二 鐵工業
- 三 「カーバイド」工業
- 四 吸入瓦斯「エンヂン」用
- 五 一般工場燃料
- 六 漆器研磨用

- 七 化粧品製造用
- 八 火藥製造用
- 九 金屬熔接用

四

第七節 木炭品質ノ鑑定……………三六

- (イ) 肉眼鑑定 (ロ) 臭味鑑定 (ハ) 音響鑑定 (ニ) 觸感鑑定 (ホ) 鉛柄鑑定
- (ヘ) 試用鑑定 (下) 重量鑑定

第八節 實收炭量、俵裝並積載數量……………三九

- 一 燒成ニ依ル實收炭量
- 二 俵裝
- 三 積載數量

第九節 木材炭化ノ沿革……………四三

- (イ) 炭化沿革ノ一般 (ロ) 我國ノ製炭沿革 (ハ) 明治ヨリ大正時代 (ニ) 我國ノ木材乾餾

△第十節 我國三著名炭……………四六

- 一 備長炭
- 二 佐倉炭

第二章 生産……………五〇

三 池田炭

第一節 全國木炭生産額……………五四

第二節 府縣別木炭生産額……………五五

- 一 府縣別木炭生産額
- 二 北海道木炭生産狀況

第三節 炭種別生産額……………五八

- 一 全國炭種別生産額
- 二 各府縣炭種別生産額

第四節 殖民地木炭生産狀況……………五九

- 一 樺太
- 二 臺灣
- 三 朝鮮

第五節 支那木炭輸入ト本邦木炭……………六九

五

△第六節

驛附近ニ於ケル木炭倉庫

.....七

- 一 支那炭輸入狀勢
- 二 支那溫州ニ於ケル木炭生産事情
- 一 東京鐵道局管内
- 二 名古屋鐵道局管内
- 三 神戸鐵道局管内
- 四 門司鐵道局管内
- 五 仙臺鐵道局管内
- 六 札幌鐵道局管内

本邦林野産物中ニ於ケル木炭ノ生産的地位.....七

第三章 消費

.....八

△第一節

本邦木炭消費量

.....八

第二節

府縣用途別木炭消費量

.....八

第三節

炭種別消費數量

.....八

- 一 家庭用
- 二 産業用
- 三 公共設備用

△第四節

六大都市ノ木炭入荷状態

.....九

○第五節

東京市木炭消費量

.....九

(イ)累年消費量 (ロ)一日平均消費量 (ハ)季節卜消費關係

▽第六節

木炭累年輸出入額

.....九

(イ)木炭輸出狀況 (ロ)木炭輸入狀況

第七節

推定木炭累年消費量

.....九

○第八節

木炭需給關係

.....一〇〇



第四章 運輸

.....一〇一

第一、鐵道

第一節 鐵道累年木炭輸送數量、延噸哩並運賃……………101

第二節 木炭一噸平均輸送哩及一噸平均運賃並一噸平均一哩運賃……………103

第三節 木炭ノ鐵道貨物トシテノ地位……………104

第四節 鐵道發着別數量並用途……………110

一 大正十一年中ノ鐵道局別木炭一千噸以上ノ發着局別各驛到着木炭數量及用途

二 府縣別木炭發着數量

第五節 木炭積卸、其ノ他費用……………113

一 東京鐵道局管内

二 名古屋鐵道局管内

三 神戶鐵道局管内

四 門司鐵道局管内

第二、船舶

第一節 主要港灣別木炭發着數量……………114

一 發送

二 到着

第二節 主要港灣ニ於ケル木炭積卸諸費用……………116

- 一 東京鐵道局管内
- 二 名古屋鐵道局管内
- 三 神戶鐵道局管内
- 四 門司鐵道局管内
- 五 仙臺鐵道局管内
- 六 札幌鐵道局管内

第三節 三陸及紀州方面ノ木炭移出狀況……………117

一 岩手炭移出狀況



第五章 價格

第一節 主要都市ニ於ケル木炭價格……………一七一

一 東京市

(イ)炭種別價格 (ロ)本炭價格構成経路

二 大阪市

三 京都市

四 横濱市

五 神戸市

六 北海道主要都市ニ於ケル木炭價格

第二節 一般物價ト木炭價格トノ比較……………一八四

第三節 東京市ニ於ケル木炭價格ト鐵道運

賃負擔割合……………一八七

第四節 主要生産地ニ於ケル生産費……………一八九

一 福島縣

二 山形縣

三 新潟縣

四 宮崎縣

五 其ノ他

# 木炭ニ關スル經濟調査

## 第一章 總論

### 第一節 炭ノ意義



〔炭〕(木炭)トハ木材ヲ燒キ又ハ乾留シテ炭化セシメタル一種ノ燃料ナリ。其ノ外觀ハ色黒ク質極シテ輕軟ナル固體ナリ。近時炭ニ木ノ一字ヲ冠シ木炭ト稱スルヲ普通トセリ。炭ノ訓ハ「須美」ニシテ「染ミ」ノ轉訛ナリ。蓋シ之ニ觸ル、トキハ染ミテ黒クナルノ意ヨリ出デタルモノ、如シ。

前述セル如ク炭ハ從來一字ニテ能ク其ノ全意ヲ表示セリ。説文ニモ「炭ハ木ヲ燒キタル餘リ也」又「木ヲ燒キテ後ニ殘リシ黒キ燃料ナリ」トアリ。故ニ之ヲ木炭ト稱スルハ字義上ヨリ觀テ聊カ重複ノ嫌ナキニ非ズ。然ルニ泰西文化ノ輸入ト共ニ獨逸語ノ所謂Stein-Kohleヲ邦譯スルニ當リ我國ニハ從來既ニ「燃石」ナル名稱存シタルニ拘ラズ新熟語熱ノ旺盛ナル當時トテ之ヲ「石炭」ト轉譯スルニ至レリ。爰ニ於テ在來ノ炭(須美)ハ之ヲ石炭ヨリ區別スルノ要起リ、強テ木ヨリ製スルノ故ヲ以テ木炭ト指稱スルコト、ナレリ。今日「炭價」ノ語ハ一般ニ石炭ノ價格ヲ想到セシメ貯炭トイフトキハ單ニ石炭ノ貯在ヲ想ハシムルニ至

レモ宜ナリト謂フベシ。木炭ナル名ハ素ト仙臺ノ名産埋木細工ノ原料タル埋木ノ粗惡ナルモノニシテ、燃料ノ用ニ供セラレタルモノヲ指シ、扶桑木或ハ岩木トモ稱シ來レルモノナリ。然ルニ固有ノ名稱ハ燒成セル炭ノ爲ニ掠奪セラレ而モ炭ヲシテ木炭ノ名稱ト變ゼシメタル石炭ヨリ之等ハ新ニ分類セラレテ、亞炭或ハ褐炭ナル呼稱ヲ受クルニ至リヌ。仙臺附近ニテハ今日モ尙、木炭テフ名稱ハ昔時同様亞炭ヲ指シ居レリ。

### 第二節 木炭ノ性質

木炭ノ性質及其ノ生産量ハ炭材製炭方法等ニ依リ大イニ差異アレドモ比重其ノ他ニ就イテ觀レバ概ネ次ノ如シ。

(イ) 比重 木炭ノ比重ハ製炭方法ノ等シキ場合ニ於テハ炭材ノ比重ニ殆ンド比例スレドモ、然ラザル場合ハ炭化良好ニシテ最後ノ加熱溫度、換言スレバ精鍊溫度ノ高キニ從ヒテ大ナルヲ常トス。其ノ比重ハ概ネ一・四乃至一・九ニシテ充分ニ水ヲ吸收スルニ於テハ水中ニ沈ムヲ見ル。

「ヴィオレット」氏ノ實驗ニ徵スルニ木炭ノ炭化溫度ト比重トノ關係ハ次表ノ如シ。

にせあかしや木炭ノ炭化溫度ト比重

「ヴィオレット」氏實驗

炭化溫度	比	重	炭化溫度	比	重
二七〇度	一・四〇二	一・四〇二	二九〇度	一・四〇六	一・四〇六
三一〇	一・四二二	一・四二八	三三〇	一・四二八	一・四二八
三五〇	一・五〇〇	一・七〇九	四三〇	一・七〇九	一・七〇九
一〇二五	一・八四一	一・八六二	一五〇〇	一・八六二	一・八六二
一五〇〇	一・八六九	一・一〇二	以上	一・一〇二	一・一〇二

(ウ) 容積重 容積重トハ孔隙ヲ含メル一定容積ノ重量ガ同容積ノ水ノ重量ニ對スル比ヲ謂フ。木炭ノ容積重ハ一般ニ水ヨリ小ナルヲ以テ水ニ浮ブヲ常トス。然レドモ我國ノ優良ナル白炭即チ通稱堅炭ノ容積重ハ水ヨリ大、即チ一以上ナルヲ以テ充分ニ乾燥スルモ水ニ浮クコトナシ。斯クノ如キハ外國木炭ニ殆ンド其ノ例ヲ見ズ。容積重ノ大ナルハ、其ノ質緻密ニ因ルモノニシテ良炭ヲ意味シ、其ノ小ナルモノハ質軟弱ニシテ劣等炭ナルヲ知ルヲ得ベシ。

(ハ) 發火點 木炭ノ發火點ハ普通三百度乃至六百度、硬質ノモノニシテ最後ノ炭化溫度高キモノ程、其ノ發火點高シ。炭化溫度ト發火點トノ關係ニ就イテハ「ヴィオレット」氏實驗ノ結果次ノ如ク、之ニ依テ觀ルモ炭化溫度ノ高キニ從ヒ、其ノ發火點高キヲ推シ得ベシ。

木炭ノ發火點

(「ヴィオレット」氏)

炭化溫度	發火點
二六〇—二八〇度	三四〇—三六〇度
二九〇—三五〇	三六〇—三七〇
四三二	四〇〇
一〇〇〇—一五〇〇	六〇〇—八〇〇
一五〇〇以上	一二五〇

我國木炭ノ發火點ニ關シテハ林學博士三浦伊八郎氏ノ實驗アリ。其ノ成績ハ次ノ如シ。

我國各炭ノ發火點

(三浦博士)

炭種	發火點	炭種	發火點
白炭		黑炭	
河津櫛材皮	五二一度	佐倉炭	四四九度
新宮並大丸	四六四	奥州角俵櫛丸最上	四三九
新宮並大丸	四九九	黑磯なら割	四〇三
新宮大丸	四九六	奥州角俵櫛丸最上	四〇一
河津大丸	四九五	奥州角俵櫛丸並	三九九
周參見うばめ	四九四		

古座うばめ大丸	四九二	野州汽車積櫛丸最上	三八五
古座小備	四八六	黑磯雜割	三五九
新宮うばめ	四八四	野州汽車積松最上	三五三
岩越線堅最上	四八一	奥州角俵櫛丸並	三五三
古座並大丸	四七三	奥州角俵櫛丸並	三四九
古座並大丸	四六九	小川郷雜丸	三三三
新宮うばめ大丸	四六二	黑磯雜丸	三三三
古座山丸	四五九	浪磯雜丸	三二三
岩越線堅並	四五六	黑磯櫛丸	三一七
河津並(雜)	四四九	上總下總松ラクダ上	二五六
新宮半丸	四四四	奥州角俵雜並	二三五
信州杏掛(雜堅)	四四一		
古座丸	四二二		
河津うばめ	三六六		
古座大丸上	三六一		

(ニ) 熱量 木炭ハ其質硬キニ從ヒ其ノ熱量概ネ大ナレドモ此ノ兩者ハ必ズシモ比例スルモノニアラズ。純粹ノ無定形炭素ハ其ノ「グラム」ヲ燃燒スレバ約八、一〇〇「グラム」ノ水ノ溫度ヲ一度上昇セシムル熱量ヲ有ス。然レドモ一般ニ木炭ハ炭素ノ外ニ雜物ヲ包含スルヲ以テ其ノ熱量ハ之ヨリ低ク、實驗ノ結果ニ依レバ通常六、〇〇〇乃至七、五〇〇「カロリ」ナリ。

炭化爐木炭ノ熱量

炭種	カロリー	炭種	カロリー
かば材炭	六、三八〇	なら材炭	六、五〇〇
もみ材炭	六、二二〇		

(ホ) 吸水吸濕性 炭ヲ窯ヨリ取出ス時ハ直ニ濕氣ヲ吸收シ漸次其ノ重量ヲ増スモノニシテ冬期ノ乾燥時期ニ於テ室内ニ置クモ尙六乃至七%ノ水分ヲ含ム。之ニ充分ノ水ヲ含マシムレバ乾燥量ノ五〇乃至一〇〇%時トシテ夫レ以上ノ重量ニ達スベシ。今吸濕量ト時間トノ關係ヲ示サン。

吸濕量ト時間トノ關係

(ライジツヒ) 氏實驗)

炭出後	吸濕性	一定時間ノ吸濕量
〇時一分	〇・八三	初五分
〇時三分	一・六六	初十分
〇時五分	二・三七	初十五分
〇時四分	三・〇五	初二十分
一・〇〇	三・七九	初三十分
一・三〇	四・四九	初四十分
二・〇〇		初五十分

(ヘ) 瓦斯吸着性 木炭ハ各種ノ「ガス」ヲ吸收スル特性ヲ有シ、「アムモニヤ」ノ如キハ二十四時間ニ自己容積ノ九十倍容炭酸瓦斯ハ三十五倍容酸素ハ九倍容ヲ吸收ス。木炭ヲ防臭用ニ供スルハ此ノ吸着性ヲ利用スルモノナリ。

木炭ノ「ガス」吸着量(二十四時間内)

種類	容積	種類	容積
アムモニヤ	九〇・〇〇倍容	鹽化水素	八〇・〇〇倍容
亞硫酸炭素	六五・〇〇	炭酸ガス	三五・〇〇
一酸化炭素	九・四〇	メタン	九・三〇
窒素	七・五〇		五・〇〇
水素	一・七五		

(ト) 脱色性 木炭ハ又色素其ノ他諸種ノ化合物ヲ吸着スル性質ヲ有ス。サレバ古來精糖淨水等ニ使用セラレタルガ其ノ脱色力ハ一般ニ動物炭ヨリ微弱ナリ。然レドモ木材ニ石灰鹽其ノ他諸種ノ藥品ヲ加ヘテ炭化スルトキハ骨炭ヨリモ其ノ脱色力大トナル。三浦博士製造ノ亞硫酸鹽前處理脱色炭ハ上等骨炭一〇〇ニ對シ一三五〇ノ成績ヲ示セリ。

脱色力(上等骨炭ヲ一〇〇單位トス)



(リ) 發熱溫度及其ノ保持時間 良炭ハ點火後其ノ火持チ長ク而モ一定時間ニ發散スル熱量少ナシ。故ニ今、等量ノ輕軟ナルモノト堅硬ナルモノトニ就キ一定時ノ發熱溫度ヲ比較スレバ前者ハ後者ヨリ高シ。容積相等シキ場合ニハ木炭ノ硬軟ニ依リ發熱最高溫度ニハ大差ナケレドモ其ノ火熱ノ保持時間ニハ著シキ差異アリ。即チ同一重量ノ木炭ニ在リテハ硬炭ハ長キ時間稍々低溫度ヲ持續シ、軟炭ハ一時的ニ高溫度ノ發熱ヲ見ルモ其ノ溫度ノ降下又速ナリ。又同一容積ノ木炭ニ於テハ硬軟ニ係ラズ最高溫度ニハ大差ナケレドモ軟炭ハ高溫度速カニ低下シ、硬炭ハ然ラズ。

(ヌ) 爆跳 木炭ニ熱ヲ加フレバ或物ハ盛ニ碎片ノ爆跳スルコトアリ。之レ製炭ノ際消火ニ當リ或種ノ瓦斯ヲ吸收シ若クハ揮發ヲ妨ケラレ居リタルニ熱ヲ受ケタル爲メ膨脹スルニ因ルモノノ如シ。栗、椎、いぬえんじゆ、楢、みねばり、榎、桐等ノ大樹ノ中心炭ハ比較的爆跳甚シ。

伊豆大島	三島	岩手島	岐手島	山梨	岩手	富山	埼玉
櫛	楸	楸	楸	楸	楸	楸	楸
三	三	三	三	三	三	三	四
強	強	強	強	強	強	強	強
福井	青森	鹿兒島	德島	伊豆大島	岩手島	岐手島	岩手島
雜	楸	松	松	松	松	松	松
四	三	三	三	三	三	三	三
弱	強	強	強	強	強	強	強

千山	鹿山	岐山	千山	千山
櫛	櫛	櫛	櫛	櫛
五	四	三	三	六
度	度	度	度	度
千山	山梨	岩手	岩手	岩手
櫛	櫛	櫛	櫛	櫛
六	五	四	三	三
度	度	度	度	度

山梨	岩手	島根	秋田	青森	山梨	群馬	長野	岡野
櫛	櫛	櫛	櫛	櫛	櫛	櫛	櫛	櫛
五	五	五	五	五	五	五	四	四
弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
千山	山梨	長野	鹿兒島	山梨	山梨	山梨	山梨	山梨
雜	楸	楸	楸	楸	楸	楸	楸	楸
四	四	四	四	四	四	四	四	四
弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱

(ル) 組成分 木炭ハ約八〇乃至九〇%ノ炭素ヲ含ム外、水素三乃至四%、酸素及窒素五乃至一五%、灰分一%ヲ含ム。炭素含有量ノ多キモノ程良炭ナリ。

木炭ノ成分

(「クラール」氏實驗)

製炭方法	炭素	水素	酸素及窒素	灰分	炭化最後ノ溫度
堆積製炭	九〇・三六%	二・七四%	五・七二%	一・一〇%	六〇〇
築窯製炭	八四・一八	三・三二	一一・七二	〇・七八	五〇〇
レトルト製炭	八一・一五	四・二四	一三・六四	〇・九七	三五〇

築窯製炭

(「ユオン」氏實驗)

炭種	炭素	水素	酸素及窒素	灰分	熱量
かば炭	七五・〇四%	三・四九%	一九・八三%	〇・九〇%	六、三八〇
たうひ炭	七五・三八	四・一四	一七・一七	一・二四	六、五〇〇
もみ炭	七三・四一	三・四五	二〇・六三	一・二六	六、二二〇

(ヲ) 立消 炭ガ點火後所謂立消スルハ粗悪ナル木炭ニ不燃性瓦斯ガ吸着セル爲ニ起ル現象ナリ。

木炭ノ性質ノ大要ハ上來記述シタレドモ尙我國ニ於ケル各種炭ノ性質ヲ其ノ樹種別ニ表

示スベシ。  
白炭

樹種	硬度	容積重(炭塊)	木材比重	酸化鉛法	熱量
うばめがし	六・五	一・〇三五〇	一・〇六	七、六九〇	五、七二〇
うばめがし	六・五	一・〇一五〇	一・〇六	七、四二〇	五、九四〇
さわふたぎ	五・五	〇・九四〇〇	一・〇六	七、二二〇	五、三八〇
にいなら	六・五	〇・八七〇〇	一・〇八	七、〇七九	六、〇九〇
ひらぎ	四・五	〇・七九八八	一・〇〇	七、四六七	五、九四〇
しきみ	五・五	〇・六〇六八	一・〇九	七、一六一	五、九四〇
すしやんほ	四・五	〇・七五八四	一・〇九	六、八九一	七、二六〇
けやしき	四・五	〇・七一〇〇	一・〇八	七、一七三	六、二七〇
むらさき	四・五	〇・六七四七	一・〇七	六、四九二	七、〇四〇
さわみすき	四・〇	〇・七〇三四	一・〇七	七、〇六八	六、七一〇
ぶな	三・五	〇・四六九五	一・〇六	六、五〇四	六、一八〇
みすな	三・五	〇・七一九一	一・〇六	七、二六七	六、八二〇
あかめがし	三・五	〇・四八五二	一・〇八	七、〇六八	六、九三〇
もみ	三・〇	〇・四三五四	一・〇九	六、七六九	六、八二〇
つばき	一・〇	〇・四七五九	一・〇七	六、六八〇	六、二七〇
ほりばたぶ	一・〇	〇・七〇二八	一・〇七	六、九九七	七、一五〇
ほりばたぶ	一・〇	〇・四二〇〇	一・〇七	五、七五三	七、一五〇



平	や	ま	が	均	き
四・〇	一・〇	〇・四	四・二	〇・六	八・二
〇・六	八・二	〇・九	〇・三	六・九	七・七
〇・九	〇・三	六・六	〇・〇	六・四	五・六
〇・二	〇・一	六・四	五・六	六・一	〇・二

樹種	硬	度	容積重(炭塊)	木材比重	酸化鉛法	熱量
あらがし	五・五	〇・八	五・七	〇・八	六・八	六・九
くぬぎ	三・五	〇・七	四・二	〇・九	六・四	六・八
にらぎ	三・〇	〇・五	五・七	〇・八	六・九	七・〇
ぶな	三・〇	〇・五	五・七	〇・八	六・九	七・〇
剥皮	二・五	〇・四	一・七	〇・三	四・九	七・三
ほ	一・〇	〇・三	七・四	〇・九	六・一	七・一
ぬ	一・〇	〇・三	七・四	〇・九	六・一	七・一
あか	一・〇	〇・三	八・六	〇・七	五・八	六・二
や	一・〇	〇・三	八・六	〇・七	五・八	六・二
平均	二・四	〇・五	二・五	〇・六	六・七	七・二

樹種	硬	度	容積重(炭塊)	木材比重	酸化鉛法	熱量
く	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
う	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
ば	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
め	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
が	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
し	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三
ぎ	四・五	〇・五	六・〇	一・〇	七・二	七・三

樹種	硬	度	容積重(炭塊)	木材比重	酸化鉛法	熱量
ぶ	二・〇	〇・三	九・九	〇・六	七・二	六・九
し	二・〇	〇・三	九・九	〇・六	七・二	六・九
す	二・〇	〇・三	九・九	〇・六	七・二	六・九
は	一・〇	〇・二	八・三	〇・五	七・一	七・〇
し	一・〇	〇・二	八・三	〇・五	七・一	七・〇
は	一・〇	〇・二	八・三	〇・五	七・一	七・〇
と	〇・五	〇・一	九・三	〇・三	八・一	七・二
き	〇・五	〇・一	九・三	〇・三	八・一	七・二
平均	二・二	〇・三	八・〇	〇・四	六・六	七・一

尙更ニ三浦博士實驗ノ結果ヲ左ニ掲グ。  
我國木炭ノ性質  
白炭

樹種	硬	度	容積重(炭塊)	熱量(トムソン法)
紀州	七・〇	〇・七	七・七	六・四
同	七・〇	〇・七	七・七	六・四
同	六・五	〇・六	七・一	七・四
同	六・〇	〇・五	七・四	七・〇
同	六・〇	〇・五	七・四	七・〇
同	六・〇	〇・五	七・四	七・〇
伊豆	六・〇	〇・五	七・四	七・〇
平均	六・〇	〇・五	七・四	七・〇



か	し	平	B	均	〇・九四五	一・六二五	七、三七二
な	ら	平	B	均	〇・八九一	一・六五二	七、三七八
		平	A	均	五・〇〇〇	一・六四三	七、一一四
		平	B	均	四・五〇〇	一・六八三	七、二〇八
		平	A	均	四・七五〇	一・六一三	七、一六一
さざんくわ		平	B	均	三・五〇〇	一・六三七	七、一六一
		平	A	均	四・〇〇〇	一・六四七	七、〇五五
		平	B	均	三・七五〇	一・六四二	七、一〇八
雑		平	A	均	三・五〇〇	一・六〇二	七、三二五

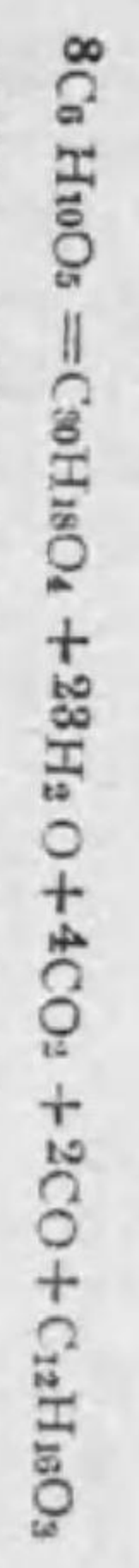
第三節 炭化ト加熱溫度

(イ) 炭化作用 木材ヲ乾留装置ニテ加熱スレバ百五十度内外ニテ水蒸氣ハ發散乾燥シテ分解シ始メ先ヅ多量ノ炭酸瓦斯ヲ發生シ漸次一酸化炭素ヲ混ズルニ至リ液體生産物トシテ「メチルアルコール」、醋酸木醋液ノ成分ヲ多量ニ流出ス。二百八十度以上ニ至レバ次第二炭酸瓦斯ノ發生減少シ一酸化炭素ノ外「メタン」、「アセチレン」、「エチレン」、「プロピレン」、水素瓦斯等増加シテ出ヅ。液體生産物トシテハ醋酸、可溶タール等ノ高級化合物ヲ生ズ。四百度以上ニ達スレバ揮發性ノ物質ハ漸次ニ減少シ初メテ二十「パーセント」内外ノ木炭ヲ殘

留スルニ至ル。

以上ハ木材乾留ニヨル炭化作用ノ經過ナルガ此等ハ其ノ加熱ノ方法ニ依リ各生産量ノ割合ニ差異ヲ生ズ乃チ急激ニ加熱スレバ「ガス」狀ノモノ多ク發生シ徐々ニ加熱スレバ液體並固體ノ生産物ヲ多ク出スヲ以テ一般ニ木炭ヲ得ル割合大ナリ。木材ハ普通二百七十度以上ニ加熱スレバ其ノ放熱反應ニ因リ自ラ發熱分解スルニ至ル。

纖維素ノ炭化法式ハ主トシテ次ノ如シ。



纖維素 纖維素ノ木炭 水 炭酸ガス 一酸化炭素 其他物質

「グイオレット」氏ハ豫メ百五十度ニ乾燥セル木材ヲ乾留シテ生ズル木炭量及其ノ炭素含有量ノ實驗ヲ爲シタルガ其ノ結果ハ次ノ如シ。

乾留溫度	木炭產出量%	木炭炭素含有量	乾留溫度	木炭產出量%	木炭炭素含有量
一五〇	一〇〇・〇	四七・五	一八〇	三六・一	七一・六
一六〇	九八・〇	四七・六	一九〇	三四・一	七二・五
一七〇	九四・六	四七・七	二〇〇	三三・六	七三・二
一八〇	八八・六	四八・九	二一〇	三二・九	七三・六
一九〇	八二・〇	五〇・六	二二〇	三二・二	七五・三
二〇〇	七六・二	五一・八	二三〇	二九・六	七六・六

二二〇	七三・五	五三・三	四三・二	一八・九	八一・九
二二〇	六七・五	五四・五	一〇・三	一八・七	八三・二
二三〇	五五・四	五七・一	一一・〇	一八・四	八八・一
二四〇	五〇・八	六一・三	一二・五	一七・九	八九・一
二五〇	四九・六	六五・八	一三・〇	一七・四	九〇・七
二六〇	四〇・二	六七・八	一五・〇	一七・三	九四・五
二七〇	三七・一	七〇・四	一五・〇	一七・三	九四・五

二〇

(ロ) 我國ノ製炭溫度 次ニ木炭ノ性質ト炭化溫度トノ關係ヲ見ルニ大體良炭ハ高溫  
ニ依リ徐々ニ加熱シ以テ炭化セシメ急ニ冷却セシムル場合ニ得ベシ。黒炭ハ四百度乃至四  
百五十度ヨリ炭化シ八百度ニ達シテ消火スルモノニシテ窯密閉後約一晝夜ニテ百度内外ニ  
冷却ス。其ノ平均溫度五百度ナリ。白炭ノ炭化溫度ハ三百度内外ニシテ最後ノ精練ニ當リ  
千四百度迄上昇セシメ、後急激ニ百度乃至五百度ニ冷却シ消火ス。

#### 第四節 木材炭化ト生産物

空氣ノ完全ナル供給ヲ制限シ、若クハ十分ニ之ヲ遮斷シ加熱スレバ木材ヲ組成スル物質ノ  
一部ハ炭ニ酸化シ炭酸瓦斯及水分トナリ、或ハ酸素不充分ノ爲メ一酸化炭素トナリ、若クハ酸  
素ヲ含有セザル種々ノ炭化水素瓦斯トナリ、而シテ其ノ一方ニ所謂炭素ヲ主成分トスル炭ノ

残留トナル。乾燥セル木材ハ七〇%ノ炭水化物ヲ含ミ、其ノ中五〇%ハ纖維素、二〇%ハ「ペ  
ントザン」、「メチルベントザン」、「マンナン」、「ガラクトタン」等ヲ含有ス。此ノ外二〇%内外ハ  
炭素ニ富メル「リグニン」ニシテ尙其ノ外樹脂、油脂、蛋白質及礦物質タル一%内外ノ灰等ヲ  
含ム。木材ノ炭化ハ是等ノ含有物が加熱ノ結果トシテ分解結合スルニ外ナラズ。尙溫度ニ依  
リテハ炭化作用ノ結果「アルコール」、「アルデヒド」、「ケトン」、有機酸「フエイル」等ノ含  
酸化合物ヲ生ズレドモ此等化合物ノ發生ニ對スル化學的變化ノ經過ハ今尙明カナラザル  
ガ如シ。唯、「メチルアルコール」(木精)ハ木材組成化合物中ノ「メトオキシル」基(—OCH<sub>3</sub>)  
ヲ含有スルコト少ナキ「セルロース」(纖維素)以外ノ所謂「リグニン」其ノ他「メトオキ  
シル」基含有化合物ヨリ生ズルガ如シ。

我國主要樹種ノ「メトオキシル」基含有率 (三浦博士實驗)

樹種	生材	氣乾材	乾材
赤	三・二七%	四・六六%	五・三%
白	二・八三	四・五七	五・一
椎	二・五二	四・二〇	四・七
栗	二・八二	四・七〇	五・三
樺	三・二〇	四・八五	五・四
樺	三・二二	五・五五	六・三
樺	三・六四	五・二〇	五・八
杉	一・七三%	五・〇五%	五・八
檜	一・六六	四・七五	四・二五
唐	一・〇五	四・一〇	四・二五
銀	一・四一	四・五五	四・三
赤	一・一三	四・二五	四・三
松	一・一八	四・三五	四・三
松	二・九八	四・二五	四・二五

一一

柄	二・八一	四・八五	五・五	三・三三	四・七五	五・五
山	二・七〇	四・五〇	五・二	二・〇五	四・一〇	四・六
榎	三・一一	五・二〇	五・九	三・〇五	四・一〇	五・五
杉	三・四一	五・五〇	六・二	二・〇五	四・一〇	四・六
毛						
棒						

二二二

前記ノ如ク木材中ノ「メトオキシル」基ノ一部ハ木精（メチルアルコール）トナルモ、一部ハ木炭及「タール」中ニモ残留ス。要スルニ炭化ニ依リ生ズル産出物ハ（イ）「瓦斯」（ロ）「液」及（ハ）「固形」ノ三類ニシテ、此ノ三者中ノ主ナル化合物ヲ示セバ次ノ如シ。

（イ）「瓦斯」 狀ノモノ（木瓦斯ノ主成分）  
炭酸瓦斯、酸化炭素、「メタン」、水素、「アセチレン」、「エチレン」、「プロピレン」、「ブチレン」等。

（ロ）「液」 狀ノモノ（木醋酸ノ主成分）  
水醋酸、醋酸、「プロピオン」、醋酸、草酸、「カプロン」酸、「メチルアルコール」、「アセトン」、「メチルエチル」、「ケトン」、醋酸、「メチル」、「メチルアセタール」、「アルデヒド」、「メチラミン」、「アセタール」等。

（木タール主成分）

「ペンツオール」、「トルオール」、「キシモール」、「クモール」、「ナフタリン」、「パラフィン」、「フェノール」、「クレゾール」、「キシレノール」、「グアヤコール」等。

（ハ）「固形」 狀ノモノ

炭

而シテ此ノ炭ノ中ニハ炭素ノ外酸素、水素、「メトオキシル」基、「メタンガス」及灰分ヲモ含ム。今英國及獨逸ニ於テ、櫻山毛棒等ノ堅質木材ノ乾餾ニ依リテ得タル液、瓦斯、木炭ノ分量ヲ記セバ

國別	木材%	木炭%	木醋酸%	タール%	瓦斯及損失%
英	一〇〇	三三・七	五〇・九	五・五	一〇・九
獨	一〇〇	二六・八	五七・九	五・五	一五・五

我農科大學ノ試験成績ヲ見ルニ

木	材	木	炭%	蒸餾液%	瓦斯及損失%
ぶ	な	な	二二・五八	四九・五六	二七・八六
か	み	み	二七・三五	五七・三一	一五・三四
か	ね	ね	二五・七一	三五・八九	二〇・四〇
な	は	は	二〇・〇〇	五五・五四	二四・四六
ぶ	ね	ね	二四・〇五	四八・八〇	二七・一五

第五節 各種製炭方法ト木炭ノ種類

第一、生産方法

二二三

木炭ノ生産ハ本業トシテ行ハル、モノト、農家ノ副業トシテ行ハル、モノトアリ。後者ニ在リテハ概シテ冬期ノ農閑期及其ノ前後ニ生産セラル。製炭モ亦個人經營ノモノト資本合同經營ニ依ルモノトアレドモ、我國ニ於ケル多クハ前者ニ依ル。

木炭ノ生産方法ヲ大別スレバ一、無蓋製炭法二、堆積製炭法三、築窯製炭法四、木材乾留法ト爲スコトヲ得。

一、無蓋製炭法

平地凹地又ハ坑内等ニテ粗朶ノ如キモノヲ用ヒ、消シ炭ノ如キ軟キ炭ヲ製造スル方法ニシテ最モ簡單幼稚ナルモノナリ。此ノ方法ニ依リ製セラル、モノハ其ノ質粗惡ナルノミナラズ、原料ヨリ所得量モ少ク僅カニ原料ノ一〇%内外ナリ。

二、堆積製炭法

此ノ方法ハ歐洲諸國ニ於テ最モ多ク採用セラル、方法ナリ。本法ニモ縱積、橫積アリ。我國ニ於テハ橫積法ノ一種トモ見ルベキ伏燒行ハル、ノミ。伏燒製炭法ハ地面ヲ掘リ下ゲ或ハ平坦ニシテ床ヲ造リ敷木ヲ置キ、其ノ上ニ炭材ヲ橫積シ適當ノ高サト爲シ其ノ上ニ切子ト稱シ細キ炭材ノ短ク切りタルモノヲ置キ枝葉ヲ以テ其ノ上面左右ヲ被覆シ、其ノ外面ヲ素灰ニテ被ヒ點火スルコトニヨリ炭化セシムルモノナリ。此ノ製法ニ依レバ其ノ製品ハ多ク一尺内外ニ折レ全長炭ヲ生ズルコト少ク且木炭ノ外面ノ光澤良好ナラザルモ、炭質ハ堅硬緻密即優良ニシテ收得數量モ亦少ナカラズ。四國地方ニ於テ古クヨリ行ハレタル製炭法ナリ。

三、築窯製炭法

本法ハ我國及米國ニ於テ最モ普通ニ行ハレ歐洲ニ於テハ多ク採用セラレズ。此ノ法ハ煉瓦或ハ土石ノ類ヲ以テ固定的ニ炭窯ヲ築設シ、製炭ヲ行フモノナリ。

築窯製炭法ニ二アリ。(イ)窯内消火法。(ロ)窯外消火法乃チ之レナリ。

(イ)窯内消火法 此ノ方法ハ築窯製炭法中最モ普通ニ行ハル、モノニシテ我國ニ於テハ土籠又ハ黒炭籠ト稱ス。窯内ニ於テ木材ノ炭化後、窯口、煙突口、煙道口ヲ密閉シ消火セシメ冷却後製炭ヲ取出ス法ナリ。外國ニ於ケル築窯製炭法ハ此ノ種ニ屬ス。本法ニ依ル産炭ハ次ニ述ブル窯外消火法ニ依ルモノヨリ稍軟ク品質中庸ナレドモ收得率ハ大ナリ。從テ各地ニ於テ盛ニ行ハレ其ノ改良窯ノ種類ハ頗ル多シ。主ナルモノヲ列擧スレバ次ノ如シ。

窯名	改良者又ハ起原地名	窯名	改良者又ハ起原地名
池田窯	大阪府、兵庫縣地方	大竹窯	福島縣 大竹龜藏氏改良
佐倉窯	千葉縣	福井窯	福井縣 田中駒吉氏改良
榑崎窯	廣島縣 榑崎圭三氏改良	德島窯	德島縣 英 丑太郎氏改良
八名窯(田中窯)	愛知縣 田中長領氏改良	茨城窯	茨城縣 森 重弘氏改良
三村窯	東京、三村博士改良	廣島窯	廣島縣 長野利吉氏改良
大正窯	靜岡縣 榑原郡木炭組合改良	長野窯	

池田窯及佐倉窯ハ其ノ由來甚ダ古ク、榑崎窯、三村窯、八名窯等ハ十數年前ヨリ行ハレ、大正窯

等ハ近時ノ改良ニシテ廣ク行ハル。

築窯ノ方式ニハ種々アリ。池田窯、佐倉窯ノ如ク木又ハ竹材ニテ大體窯形ヲ造リ捏ネタル土ヲ塗リタルモノアリ、捏ネタル土ニテ煉瓦狀ノ物ヲ造リ之ヲ積ミ重ネテ窯壁ヲ形成スルモノアリ、窯土ヲ少シク濕シ積ミテ叩キ固ムルモノ等アリ。又窯ノ天井ヲ木又ハ竹ヲ以テ造リタル後土ヲ置クモノアリ、又炭材ヲ立木及上木トシテ詰込ミタル後炭材片ノ凹凸ヲ整理シ其ノ上ニ土ヲ置クモノアリ。前者ヲ棚置法ト稱シ、後者ヲ木口置法ト云フ。現時主トシテ用ヒラル、ハ木口置法ナリ。

窯形ハ一般ニ前後ニ長ク、前方ヨリ後方ニ廣グ且窯底ハ稍後方ニ傾斜シ窯壁及天井ハ可成之ヲ低クス。炭化ニ當リテハ炭材詰込後灰化ヲ妨グル爲メ炭材ノ前ニ障壁ヲ設ケ其ノ前面ヲ點火室トシテ焚火シ、上部ヨリ點火シタル後焚口ヲ閉テ僅カニ下方ナル通風孔ヲ通ジテ炭材ノ炭化ニ便シ、斯クテ煙ノ色及臭氣等ニ依リ炭化ノ状態ヲ判斷シ、稍々多量ノ通風ヲ爲シテ高溫度ニ上昇セシメタル後最終ノ密閉手段ニ依リテ消火シ百度以下ニ冷却シタル後焚口ヲ開キ炭出ヲ爲スモノナリ。下部ヨリスル點火方法ハ今日ハ殆ド行ハレズ。收炭率ハ窯土炭材方法等種々ノ條件ニ依リ異レドモ全材生木（立木、上木、燃料）ニ對シ一五乃至二〇%ヲ普通トス。櫻類ハ一九乃至二二%、櫟ハ一八乃至二一%、檜ハ一七乃至二〇%、雜ハ一五乃至一八%ナリ。新窯ハ其ノ收炭率少ク一二乃至一八%ニ過ギザレドモ二、三回窯焚ヲ爲シタル後ハ漸次其ノ率ヲ增加ス。

(ロ) 窯外消火法

窯外消火法ハ東洋特有ノ製炭法ニシテ、此ノ製法ニ依レバ最モ堅硬緻密ナル木炭ヲ製出スルコトヲ得。本法ハ先ヅ低溫度ニテ徐々ニ炭化セシメ、最後ニ酸化ヲ盛ニシ極メテ高溫度ニ熱シテ精鍊センメ殆ド白熱狀ト爲シタルモノヲ窯外ニ取出シ、少量ノ灰、粉炭等ヲ混淆シタル土、所謂消粉ヲ以テ覆ヒ急激ニ消火冷却スルモノナリ。窯ハ石窯或ハ白炭窯ト稱シ、其ノ産炭ヲ白炭又ハ堅炭ト云フ、就中其ノ質優良ナルハ土佐、紀州窯（備長窯）等ニシテかし、なら等ノ硬材ニ應用ス。

窯ハ其ノ壁ヲ石ニテ積ミ上ゲ、石ト石トノ間ニ土ヲ詰メ、天井モ亦窯土ノ外石ニテ圍ムコトアリ、形ハ横斷面圓形ニシテ前後ヨリモ寧ろ左右ニ長ク、底ハ水平ナルカ稍前方ニ傾斜ス。

本法ニ依ル收炭率ハ窯内消火法ニ依ルモノヨリ低ク一〇乃至一五%ヲ普通トス、築窯當時二、三回ハ其ノ率殊ニ低シ。かじハ一般ニ收炭率高ク一三乃至一五%、くぬぎ、なら等ハ中廢ニシテ一、二乃至一四%、雜ハ一〇%内外ナリ。

四、木材乾餾

木材ノ乾餾ハ「ガス」ノ出口以外全然密閉スル装置中ニ於テ行フモノニシテ其ノ装置中ニ木炭ヲ殘存スルヲ以テ又木材炭化ノ一方法ナリ。乾餾装置ハ大別シテ（イ）金屬製「レトルト」ノ性質ヲ有スル諸種ノ装置即チ「レトルト」内乾餾法、（ロ）土石、煉瓦等非金屬性材料ヲ用ヒテ造リタル装置即チ窯内乾餾法、（ハ）特種乾餾装置ノ三トス。

(イ)「レトルト」乾餾法

「レトルト」ハ通常鍛鐵ヲ以テ製シタル圓筒形乾餾装置ニシ

テ最モ進歩シタルモノナリ。生産物ノ收量ハ他ノ二法ニ比シ最大ナリ。「レトルト」中直立式「レトルト」ハ窯ヨリノ取外シ自由ニシテ、乾燥後直チニ他ノ炭材ヲ詰込ミタル「レトルト」ト取替ヘ得ルヲ以テ連続シテ作業ヲ行フノ利アリ。本装置ハ英、佛等ニテ廣ク用ヒラル。横臥式「レトルト」ハ一般ニ固定式ニシテ從テ原料材及木炭ノ取出シニ便ナラズ。サレバ大規模ノ工場ニ於テハ概ネ車輛「レトルト」ヲ用フ。車輛「レトルト」ハ横臥式ノ大ナル圓筒或ハ角形ノ長キ「レトルト」ニシテ「レトルト」内ニ軌道ヲ設ケ原料材ヲ積載シタル儘「レトルト」内ニ挿入シ蓋ヲ閉ヂ加熱乾燥後直チニ之ヲ牽出シ前方ニ裝置セル冷却室「レトルト」ト同形）ニ挿入シテ密閉シ外部ヨリ水ニテ冷却消火スルモノナリ。此ノ裝置ハ米國ニ於テ「オーヴン」ト稱シ廣ク採用セラル。我國ニ於テモ大工場中本裝置ヲ用フルモノアリ。

(ロ) 窯内乾燥法 本法ハ煉瓦ヲ以テ造リタル箱形ノ窯ノ内部ニ、加熱裝置ニ連絡スル鐵管ヲ挿入シ其管内ニ加熱「ガス」ヲ通ジ鐵管壁ヲ隔テ、原料材ヲ加熱乾燥スルモノナリ。我國ニ於テ大正三、四年頃考案シタル諸種ノ乾燥窯ハ孰レモ土石煉瓦等ヲ以テ造リタルモノナリ。其ノ中岩本式乾燥窯ハ其ノ形狀ニ種々アレドモ大體ニ於テ煉瓦及石ニテ數個ノ加熱煙道ヲ造リ此等ノ材料ヲ隔テ、乾燥後空氣ヲ通ジ製炭法ノ所謂精練ニ依リ木炭ノ品質ヲ良クスルモノナリ。其ノ裝置ハ炭化室二個並列シ其ノ中間ト左右ニ煙道ヲ造リ後方ニ通ジ周圍ヨリ加熱シ或ハ更ニ窯底ニモ煙道ヲ造リ底部ヨリモ加熱シ炭化室ノ上部又ハ後部下方ヨ

リ揮發物ヲ發散スル如クシアリ。丸光式乾燥窯モ亦略々之ト相似タルモノニシテ多數ノ炭化室ヲ並列シ共同冷却器ニ導クモノナリ。又萬代式ト稱スルハ加熱裝置トシテ窯底及窯壁ニ土管ヲ通ジタルモノ、高島林學士考案ニ係ル拱熱式ハ耐火煉瓦ト窯土トヲ以テ二重「アーチ」形ヲ造リ其ノ間ヲ煙道トシ左右及上部ヨリ加熱乾燥シ炭化室ノ後方下端ヨリ揮發物ヲ散出スル裝置ナリ。

以上諸種ノ裝置ハ孰レモ壁ヲ隔テ、加熱スルモノニシテ乾燥比較の完全ニ行ハルレドモ土石煉瓦等ヲ材料トスルヲ以テ鐵材ノモノ、如ク完全ニ氣密ト爲スコト難シ。サレド一〇〇度以上ノ精練溫度ニ耐フルヲ以テ優良ナル白炭ヲ得ルノ特長アルノミナラズ其設置費モ比較的低廉ナリ。唯々短時間内ニ優良ナル白炭ヲ得ルコト能ハザルガ故ニ優良炭ヲ得ントセバ炭化時間ヲ數日延長セザルベカラザルノ不便アリテ作業能力爲メニ減退シ乾燥本位ノ場合ハ通常「レトルト」式ヲ以テ有利ナリトセラル。

「シウワルツ」氏ノ窯ハ一般ノ製炭窯ト異リ炭化室ニ空氣ヲ通ゼズ燃料ト炭材トヲ全然區別シ熱「ガス」ヲ以テ加熱炭化セシムルモノナリ。又其ノ他ノ製炭窯モ一部ハ加熱ノ材料トシテ消費セラル、モ一部ニハ乾燥作用起リ乾燥ト同様ノ生産物ヲ生ズルモノアリ。

(ハ) 特殊乾燥裝置 本裝置ハ「グレンダル」氏ノ考案ニ係リ煉瓦及鐵製ノ溝ヲ數個ノ室ニ別チ其ノ間ノ隔壁ヲ開閉自在トシ、一定時間毎ニ順次原料材ヲ積載セル車輛ヲ前室乾燥室、炭化室、冷却室ニ送り、後室ヨリ取出スルモノニシテ完全ニ連續的乾燥ヲ爲シ得ルモノナリ。



唯、生産物ノ收量必ズシモ多カラザルノ憾アリ。又、歐洲ニテハ原料材缺乏ノ結果鋸屑又ハ「タ  
ンニン」浸出残滓ヲ乾餾スル種々ノ装置考案セラレ「パリテー」氏ノ考案セル螺旋狀攪拌  
装置ヲ設ケタル圓筒形乾餾装置ハ最モ進歩セルモノト見ラル。

第二、木炭ノ種類

木炭ハ種々ノ見地ヨリ之レヲ區別スルコトヲ得レドモ、今、製法、形狀及樹種ニ依ル區別ヲ示  
サン。

一、製法ニ依ル區別

(イ) 白炭 炭材ヲ窯中ニテ徐々ニ炭化セシメ最後ニ高温度ニテ精鍊シ白熱化シテ甕外  
ニ取出シ灰又ハ粉炭等ヲ混ジタル消シ粉ヲ掛ケテ消火セシムレバ原料材ノ約二割ニ相當ス  
ル重量ノ白キ灰ノ附着シタル木炭ヲ得ベシ。之レ即チ白炭ナリ。白炭ハ高度ノ熱ヲ發シ又  
大ナル熱量ヲ有スルモ製造ニ熟練ヲ要スルコト多ク又炭トナル歩止リ少ナキガ故ニ市價比  
較的高シ。普通炭質ノ堅キヨリシテ堅炭ト稱シ或ハ又多ク石ニテ築造セル甕ヲ使用スルヲ  
以テ石甕炭トモ謂ヒ、立人間ニ於テハ時ニ「赤目」(赤目樫ノ略稱)ト稱スルコトアリ。紀州  
産ノ備長炭ハ即チ其ノ一例ナルコト上述ノ如シ。

(ロ) 黒炭 黒炭ハ炭材ヲ甕中ニテ炭化セシメ最後ニ高温度ニテ精鍊シタル後、外氣ヲ遮  
斷シ甕中ニテ冷却セシメタルモノニシテ火附キ好ク家庭用トシテ需要多シ。佐倉炭、池田炭  
ハ黒炭中最モ人口ニ嗜炙スルモノナレドモ、其ノ他家庭ニ於テ愛用セラル、モノハ多ク此ノ

製法ニヨルモノナリ。土甕ニテ燒成スルガ故ニ俗ニ土甕炭トモ謂フ。

(ハ) 松炭(鍛冶炭) 松炭ハ松材ヲ粗雜ナル甕中ニテ炭化セシメタルモノ、廣ク鍛冶用ニ  
供セラル、ヲ以テ鍛冶炭ノ名アリ。松炭ニハ別ニ窯ヲ築カズ焚火シテ木ノ燃エ終リシ頃ヲ  
見計ラヒ水或ハ土ヲ掛ケテ消火製出スルモノアレドモ此ノ製法ニ依ルモノハ質粗惡ナリ。

(ニ) 乾餾炭 木材ヲ外氣ト遮斷シ乾餾スレバ醋酸、木精等ヲ揮發シテ木炭ヲ得。之レ乾  
餾炭ニシテ其ノ外觀黒炭ニ類似ス。其ノ質ハ既述ノ如ク窯燒炭ニ比シ粗雜ニシテ燃焼シ易  
キヲ以テ品位甚ダ低シ。

二、形狀ニ依ル區別

木炭ハ其ノ形狀ニ依リ丸炭、割炭、粉炭、枝炭等ニ分類スルヲ得レドモ此ノ分類ハ概シ黒炭ニ  
適用セラル、モノニシテ白炭ニ用ヒラル、コト少シ。

(イ) 丸炭 丸炭ハ炭材ノ直径二寸前後ノモノヲ炭化セシメタルモノヲ良シトス。本炭  
ハ其ノ歩止リ、通例原料材ノ八割前後ヲ常トスルガ故ニ徑二寸ノモノハ燒上リ一寸六分ノ炭  
ヲ得ベシ。夫レ以上ノ大材ハ使用ニ當リ不便ナルヲ以テ割リテ製炭スルヲ常トス。

(ロ) 割炭 割炭トハ炭材ヲ二個以上ニ割リテ燒成シタルモノニシテ品位丸炭ニ亞グ。  
紀州産ノ白炭ニテ角鱗ト稱スルモノハ皆割炭ノ謂ナリ。

(ハ) 粉炭 粉炭ハ木炭ノ細カク破碎シタルモノニシテ、其ノ大小ニ依リ大粉、中粉、荒粉、微  
塵粉等ノ稱アリ。

(ニ) 枝炭 樹木ノ枝梢等ヲ燒キテ作ルモノニシテ白炭トシテ製造セララル、場合多シ。  
三、樹種ニ依ル區別

樹種ニヨル區別ハ白炭ニ在リテハ櫻櫚、檜、雜ノ四種、黑炭ニ在リテハ栴、柏、檜、雜ノ四種ニ分ツ。尙同一樹木ヲ同一方法ニ依リ製シタルモノニテモ地方ニ依リ特種ノ名稱ヲ附スルコトアリ。佐倉炭、池田炭等ノ如シ。

## 第六節 木炭ノ用途

木炭ノ用途ハ之ヲ大別シテ第一家庭用 第二農業用 第三工業用ノ三トスルコトヲ得。

### 第一、家庭用

一、探暖用 我國ノ家庭ニ於テハ古來石炭ノ代リニ探暖用トシテ多ク木炭ヲ用ヒタリ。從テ其ノ消費量極メテ多ク製炭事業ノ進歩モ之レニ依リテ促進セラレタリ。

二、廚房用 廚房用トシテノ消費量ハ探暖用トシテ消費セラル、モノヨリ大ナリ。白炭ハ火持良キニ因リ廚房用トシテ最モ賞用セラル。

三、濾過用 木炭ハ飲料水其ノ他液體ノ濾過ヲ爲スニモ使用セラル。然レドモ其ノ使用量ハ他ニ比スレバ極メテ少ナシ。

四、吸收用 木炭ハ既ニ述ベタルガ如ク吸收力ニ富ミ、瓦斯ヲモ吸收スルノ力強キヲ以テ床下ノ濕氣有毒瓦斯ノ吸收用又時トシテハ運動場ノ排水用トシテ消費セラル。然レドモ現

時炭價ノ騰貴ト代用品ノ發明トニ因リ斯カル用途ニ依ル消費量ハ至テ僅少ナリ。

五、炭團製造用 炭團ハ木炭ノ粉末ヲ以テ製造ス。其ノ價格低廉ナルト炭團特有ノ利益トニ因リ其ノ需要漸次増加スルニ從ヒ、其ノ原料トシテ供用セラルル木炭ノ消費量モ亦益々大トナレリ。

### 第二、農業用

農業生産ノ用ニ供セラル、木炭ノ量モ亦相當大ナレドモ近時石炭其ノ他代用品ノ使用ニ依リ漸次其ノ量減少ノ傾アリ。

一、蠶室保温用 蠶室保温ノ爲メ使用セラル、木炭ハ近時石炭ノ爲メニ驅逐セララル、傾アレドモ尙其量尠カラズ。其ノ消費率ハ春蠶繭一石ニ付キ約十貫ナリトイフ。

二、繭乾燥用 繭ノ乾燥ニハ大規模生産ノ場合ハ石炭ヲ用スルモ小工場又ハ普通農家ニ在リテハ木炭ヲ使用ス。其ノ率ハ繭一石ニ付キ約六貫ナリ。

三、絲取用 家庭ニ於ケル蠶絲ノ繰業ニ當リ座繰又ハ足踏ミニ依ルモノ、燃料ハ多ク木炭ヲ用フ。其ノ消費率ハ生絲一貫ニ付キ約十貫ナリ。

四、製茶用 木炭ハ又製茶ニ用フ。其ノ率ハ製茶一貫ニ付約一貫ヲ要ス。

### 第三、工業用

木炭ハ近來益々諸工業上ニ用途ヲ擴メ其ノ使用量又從テ増加シツ、アリ。

一、冶金用 木炭ハ冶金用トシテ製鋼事業ニモ用ヒラルレドモ製鐵事業ニ使用セラル、

量最大ナリ。銑鐵ヲ製スルニハ先ヅ適當ノ大イサニ碎キタル鑛石又ハ鑛滓砂鐵等ノ中ニ石  
灰石及木炭ノ小塊又ハ「コークス」ヲ混ジテ熔爐中ニ入レ、熱風ヲ送リテ之ヲ燃燒セシム。  
斯クスルトキハ「コークス」又ハ木炭ハ高熱ヲ發シテ鑛石及石灰石ヲ熔融セシムルト同時  
ニ鑛石中ノ酸素ヲ奪ヒテ鐵ヲ分離セシム。之ニ幾分ノ炭素ヲ供給シテ鐵ト結合セシム。石  
灰石ハ鑛石中ノ土類ト化合シテ熔滓ヲ形成スレドモ熔滓ハ輕キガ故ニ爐ノ上部ニ浮ビ、鑛  
爐底ニ集沈ス。此ノ爐底ノ鐵ヲ外ニ導キテ型ニ入レ冷却セシメタルモノハ即チ銑鐵ナリ。  
木炭銑鐵ハ磷分少ナク品質良好ナリ。銑鐵一佛噸ヲ製スルニ鑛石ヲ用フルトキハ木炭約二  
佛噸半、鑛滓ヲ用フルトキハ二佛噸乃至二佛噸六分、砂鐵ヲ用フルトキハ一佛噸五分、再製ニ在  
リテハ半佛噸ヲ要ス。此ノ外滿庵鐵砒素鐵鏡鐵等ノ合金銑鐵事業ニハ還元劑トシテ製品重  
量ノ約二分ノ一ニ相當スル木炭ヲ要ス。

針葉樹木炭ハ磷分少ナキヲ以テ製鐵用ニ供セラル。製鋼事業ニ於テハ還元劑トシテ使用  
セラル、モ其ノ消費額云フニ足ラズ。

二、鐵工業 木炭ハ近來造船所、鐵工所製鋼所等ニ於ケル鐵工業ニ使用セラル、モノ多シ。  
鐵鑛ハ木炭ヲ爐中ニテ燃燒セシメ、通風機ニテ衝風ヲ送り以テ鍊鐵又ハ鋼材ヲ灼熱シタル後  
之ヲ金敷ノ上ニ載セ鐵鑛又ハ其ノ他ノ工具ヲ用ヒテ鍛延、壓縮、屈曲、截斷、接合等ヲ爲シ以テ所  
要ノ形狀ト成ス。又鍛工業ト關聯シテ硬鋼及工具鋼ヲ一層堅硬ナラシムル爲メニ更ニ一  
度之ヲ熱シテ急ニ冷却セシム。之ヲ燒入レト稱シ其ノ加熱材トシテモ亦木炭ヲ用フ。鐵工

業ニ於テモ又種々ノ木炭ヲ用フレドモ大規模ノ鍛工ニ於テハ白炭、黒炭ヲ用ヒ、小規模ノ鍛治  
屋ニ於テハ針葉樹木炭ヲ用フルコト多シ。

又鑄物工場ニ於テハ鑄型ノ乾燥、鑄物ノ整形等ニ松炭ヲ用フ。

三、「カーバイド」工業 「カーバイド」ハ生石灰ト木炭トヲ粉碎シテ混ジ、電氣爐ニテ熔解  
シ製造スルモノニシテ、其ノ兩者ノ混入ニ當リ各種ノ木炭ヲ用フレドモ夾雜物無キモノヲ可  
トス。木炭ノ消費量ハ生産量ノ七割ヲ占ム。「カーバイド」ハ瓦斯發生用、石灰窒素硫酸「ア  
ムモニヤ」製造用ニ供セラレ其ノ需要年々激増ノ趨勢ニアルヲ以テ今後木炭ノ消費量ハ益  
ト多キヲ告グベシ。

四、吸入瓦斯「エンジン」用 吸入瓦斯「エンジン」ノ原動力タル瓦斯發生用ニ供セラ  
ル、木炭ノ量ハ近時又著シク増加セリ。瓦斯發生法ハ先ヅ瓦斯發生爐ニ於テ木炭ヲ灼熱シ  
之ニ空氣及水蒸氣ヲ通ジテ瓦斯ヲ發生セシムルモノナリ。此ノ瓦斯ハ發熱量大ナラズト雖  
モ製造裝置簡單ナルヲ以テ此ノ方面ニ於ケル木炭ハ漸次石灰ニ代リツ、アリ。

五、一般工場燃料 木炭ハ又菓子製造工場、蒲鉾製造工場、陶磁器製造工場其ノ他洗濯屋、仕  
立屋等ニ於ケル燃料トシテモ主トシテ使用ニ供セラル。此ノ用途ニ於ケル需要モ亦今後益  
益増加ノ傾向アリ。

六、漆器研磨用 油桐ニテ製シタル駿河炭、かしをしみ、ざるすべり、山椿、ぶご等ニテ製シタ  
ル蠟色炭又ハほうのき炭、桐炭等ハ漆器研磨用トシテ用ヒラル。

七、化粧品製造用 ほうのきニテ製シタル木炭ハ眉墨其他ノ化粧品トシテモ賞用セラル。

八、火藥製造用 はんのきやまならしやなぎきり等ヲ低温度ニテ乾留セル木炭ノ粉末ハ火藥製造ノ用ニ供セラル。火藥用木炭ハ總テ乾留ニ依リテ産出セラレタルモノニ限ラレ、其ノ質均一ニシテ土砂ヲ混ヘザルヲ可トス。

火藥ヲ大別スレバ黑色火藥無煙火藥綿火藥ノ三種ト爲スコトヲ得ルモ普通ノ火藥即チ黑色火藥ハ硝石七十五木炭十五硫黃十ノ割合ヲ以テ混和製造セラル、モノニシテ之ニ要スル木炭ノ消費量モ亦少ナカラズ。

九、金屬熔接用 木炭ノ火力ハ電線工場又ハ電燈會社ニ於テハ電線接續用、魚油會社ニ於テハ容器接合用、瓦斯會社其ノ他ニ於テハ鐵管接合用トシテ之ヲ利用ス。

我國ニ於ケル用途別消費量ノ割合ヲ種々ノ點ヨリ大約査定スレバ探炭用最モ多ク總量ノ四割之ニ亞グハ厨房用ニシテ約三割二分、鐵工業用製茶用養蠶用等ハ各六七分内外ナリ。

米國ニ於テ最近數箇年間最モ重要視セラレタルハ鐵砲火藥、其ノ他ノ彈藥製造ニ利用セラレタルコトナルガ一方、燒礦用トシテモ著シク其ノ需要ヲ高ムルニ至レリ。

### 第七節 木炭品質ノ鑑定

木炭ノ良否ヲ鑑別スルコトハ容易ノ業ニ非ズ。從來之ガ鑑別ハ普通略式鑑定ニ依リ經驗ヲ基礎トシ炭ノ色澤音響重量質ノ硬軟等ニ依リ鑑定セリ。木炭ノ良否鑑別ニ就テハ左ノ方

法アリ。今日迄良炭ノ性質ニ就キ學者モ種々ナル條件ヲ列舉シ居レルガ是等ハ必ズシモ良炭ノ特質ト見ラレザルモノアリ。然レドモ大體從來ノ鑑定法トシテハ

(イ) 肉眼鑑定 炭ノ色澤形狀其ノ他ヲ肉眼ニテ觀察スルコトニ依リ直ニ炭ノ硬サ軟サ、燻爆ノ有無火力ノ強弱火持ノ如何等其ノ内的ノ品位ヲ判斷スルモノニシテ全ク微妙ナル心理考查ニ依リ其ノ良否ヲ鑑別スル鑑定法ナリ。其ノ色合鮮明光澤ヲ有シ形狀端正木理正シク其ノ横斷面貝殼狀ヲ呈スルモノハ概シテ良炭ナリ。

(ロ) 臭味鑑定 嗅覺ニ訴フルコトニ依リテ燃焼ノ完否等ヲ鑑別スル方法ナリ。通常臭味ナキヲ佳トス。

(ハ) 音響鑑定 炭ト炭ト打合セテ發スル音響ノ清濁ニ依リ其ノ燃焼ノ完否及硬度等ヲ判別スル方法ニシテ其ノ音響清快ナルヲ佳トス。

(ニ) 觸感鑑定 觸感ニ依リ其ノ良否ヲ鑑別スル方法ナリ。濕味ヲ感ズルモノハ其ノ燒成ニ當リ強熱ヲ以テセザリシ爲メ含有水分多キニ因ルモノニシテ良炭ト云ヒ難シ。白炭ニ在リテモ斯カル觸感ヲ起サシムルモノハ製炭ノ際窯外ニ出シテ消火スルニ當リ水消ト爲シタルコトヲ示スモノニシテ比較的粗炭ナリ。又接觸ニ當リ手ニ黑色ノ附着スルハ最後ノ精鍊不足ナルヲ示スモノニシテ又不良炭ナリトセラル。

(ホ) 銘柄鑑定 從來ノ經驗ヲ基トシ炭ノ商標ニ依リ品位品質產地製造者等ヲ知り之ニ依リ良否ヲ判斷スルモノナリ。

(ハ) 試用鑑定 肉眼接觸ニ關セズ、現物ヲ實地ニ燃スコトニ依リ火力、火持ち、燻煙等ヲ識別スルモノニシテ正確ナル方法ニ相違ナケレドモ其ノ勞費ヲ要スルヤ勿論ナリ。

(ト) 重量鑑定 重量ニ依リテ其ノ硬軟乾濕ノ度ヲ識別スル方法ナリ。其ノ容量ニ比シテ重量重キハ炭質ノ緊密ナルヲ證シ、火附キ惡シキ缺點アレドモ燻煙ノ感ナク、火力モ強ク、火持ち良キコトヲ證シ、經濟的良品ナルベシ。

我國ノ文獻ニ徴シ良炭ノ標準ヲ列擧スレバ

- (イ) 黑色ノ光澤ヲ有スルコト
- (ロ) 破砕面ニ光澤ヲ有スルコト
- (ハ) 破砕面ノ貝殻狀ヲ呈スルコト
- (ニ) 金屬的音響ヲ發スルコト
- (ホ) 煙焰ヲ發セザルコト
- (ヘ) 抗壓力大ナルコト
- (ト) 木材構造ノ存スルコト
- (チ) 熱量大ナルコト
- (リ) 比重大ナルコト
- (ヌ) 熱ノ持續長キコト
- (ル) 燻又ハ爆跳セザルコト
- (ヲ) 引火容易ナルコト
- (イ) 樹皮及組織ニヨリ樹種ヲ判別シ得ルコト
- (ロ) 接觸ニ依リ他物ヲ汚染セザルコト
- (ハ) 水ヨリ輕キコト
- (ニ) 無味無臭ナルコト

要スルニ木炭ハ使用目的ニ依リ其ノ性質ノ良否ニ關スル鑑別標準モ異ニスルモノニシテ茲等ヲ掲グ。

ニ概論シ難キモ概ネ堅硬ト容積重ノ大ナルトハ良炭ノ條件ナリ。

### 第八節 實收炭量、俵裝並積載數量

#### 一、燒成ニ依ル實收炭量

我國燒窯ノ大小形狀ハ地方ニ依リ各差異アルモ普通卵形又ハ橢圓形ニシテ、小ナルモノハ炭材二百貫乃至五百貫、大ナルモノハ千貫乃至千五百貫ヲ入ル、ニ足ル。前者ハ之ヲ日窯ト稱シ、毎日出炭ヲ爲シ甚ダ便利ナレドモ、後者ハ其ノ產出數量多キニ拘ラズ、良炭ヲ得ルコト困難ニシテ之ガ操業不便ナルヲ以テ小窯ヲ使用スルモノ多シ。

燒成スル實收炭數量ハ炭燒方法、窯ノ大小、熱度、樹木ノ種類、氣乾程度、技術ノ巧拙等ニ依リ差アレドモ、我國原木一棚ノ實收炭量ハ黑炭ニ於テ五十五貫乃至六十六貫ナリ。米國ニ於ケル優等炭材ナルさわぐらみ、樺、樺、樺等ノ實收炭量ハ容積トシテハ原木ノ五割乃至六割重量トシテハ原木ノ一割九分乃至二割五分ナリ。例ヘバ三十「コード」ヲ入ル、窯ヲ使用スル「ヴァー」州ニ於ケル一大製炭場ニアリテハ平均一「コード」(百二十八立方呎) 六十一貫内外ノ生産量ヲ得、「オーブンエアー」式窯ニテ樺及黃松ノ混合原木ヲ採用スル南「ベンシ」州ニ於ケル二十五ノ硬木乾餾工場ノ如キハ一「コード」平均ノ實收量八十七貫ニ及ビ其ノ產出量ハ普通窯ノ夫レニ比シ著シク大ナリ。

英國ニ於ケル混合原木又ハ切株ノ平均實收量ハ「コード」六十一貫内外ニシテ米國ニ於ケル製炭實收ト大差ナキモ櫻山毛樺ノ「コード」原木ノ收炭量ハ八十一貫乃至九十二貫ニ達ス。

二、俵裝

木炭ハ燒成後普通ハ俵ニ納メテ取引セラル。一俵ノ重量ハ地方市場ノ慣習等ニ依リ多少ノ差アリ。四貫俵、五貫俵多クレドモ中ニハ三貫五百匁、八貫、十貫俵等アリ。俵ノ原料トシテハ、東北北陸地方等ニ於テハ藁ヲ用フル所アレドモ萱ヲ使用スルヲ常トス。萱ニ在リテハ十一月頃其ノ莖葉ノ黄色ニ變ズル時ヲ見計ラヒ、之ヲ刈取リテ乾燥シタル後、之ヲ編臺ニ載セ、穂先及株端ヲ交互ニ合セ細藁繩ニテ編ミ兩端ハ折り込ミテ俵口ノ繩掛ケニ便ズ。五貫入ノモノハ堅約二尺、横約三尺五寸トス。編上ラバ之ヲ二ツ折りニシ或ハ箱形ニ或ハ圓柱形ニ繩ニテ繋ギ合セ俵尻ニ繩ヲ掛ケ柴又ハ藁ヲ以テ炭ノ脫落セザル如クシテ、一定量ノ炭ヲ充タシタル後、其ノ上ニ留メ柴ヲ置キ繩ヲ以テ俵口ヲ緊ム。尙此ノ外地方ニ依リ炭ノ折レザル様左右ニ當テ木ヲ挿ムモアリ。是等ハ普通ノ状態ナルガ攝州池田地方ノ池田炭ノ俵裝ノ如キハ揃ヘタル木炭ノ上下左右ニ編ミタル藁片ヲ當テ細キ樹枝ヲ以テ炭ノ脫落ヲ防止スル爲メ十文字ニ二個所ヲ締メ市場ニ搬出ス。

三、積載數量

炭一俵ノ重量ハ前ニ述ベタルガ如ク三貫五百匁、四貫、五貫、十貫等市場ノ慣習ニ依リ差異アリ

ルノミナラズ、其才積モ北海道苫小牧ノ如ク七才ニ及ブモノアリ、新庄地方ノ如ク九才ヲ超ユルアリ、其ノ他一才八分、二才、三才等其間著シキ差アルヲ以テ一噸ノ積數モ亦一定セザレドモ平均四十俵乃至五十俵ナリ。今木炭ノ主要發送驛ニ就キ調査シタル處ヲ示セバ次ノ如シ。

主ナル銘柄	外裝(荷姿)	才積 重量	噸當積載俵數	調査驛名
楢丸、雜丸、割割	角俵、丸俵	17×13×12=294 三十八斤	平均 四〇俵	湊 (八ノ戸)
楢丸、雜丸、割割	双俵入繩掛角造	二才二分 雜丸三十六斤 二才三分、二十六斤 一才九分、二十五斤	平均 四〇 約 五〇	八ノ戸 今庄 (北陸本)
楢丸、雜丸、割割	各双入角俵	1.8×1.1×1.1=2.24 楢丸三十二斤 雜丸三斤 1.2×1.2×1.6=2.304 一十四—一十八斤 2.8×1.7×1.7=8.14 七十五斤 8.0×1.8×1.8=9.72 八十九斤	四〇 四五 一五 一	鹽 (鹽宮城) 矢吹 (東北本) 新庄 (奥羽本) 柳ヶ (北陸本)
楢丸、雜丸、割割	双俵	二才	六五	柳ヶ (北陸本)
楢丸、雜丸、割割	入俵	七才	一五	苫小 (北海道)

特 上金(横堅ヤキ)	中金(同)	甲乙丙丁(雜木)	白燒	白燒	雜	雜	白燒	佐用	佐用	柗	楓	達	檜	檜	大
丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸
茅	萱	萱	茅	茅	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四十斤、 四十五斤	六十斤	六十斤	三十八斤	三十八斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤	三十二斤
三〇	二五	二五	三七	三七	四五	四五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五
津	飯	飯	眞	眞	上	上	野	野	野	野	野	野	野	野	野
山作 山備	野宮崎	野宮崎	川山 山形	川山 山形	郡山 山形	郡山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形	原山 山形

四二

小	半	〇	角	角	角	淺	同
丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸
三才三分	三才三分	三才三分	三才三分	三才三分	三才三分	三才三分	三才三分
二才二分	二才二分	二才二分	二才二分	二才二分	二才二分	二才二分	二才二分
四一	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
野	野	野	野	野	野	野	野
野	野	野	野	野	野	野	野

第九節 木材炭化ノ沿革

(イ) 炭化沿革ノ一般

木ヲ燒キテ炭ヲ造レル起原ハ極メテ古キガ如シ。古代埃及人が屍體ヲ保存センガ爲メ木「タール」ヲ用ヒタルハ羅馬ノ博物學者「プリニース」氏ノ著書ニ見ユ。又「オフラスタ」氏モ其ノ著書中ニ於テ「マケドニヤ」人が「タール」製造ヲ行ヒタルコトアルヲ發表セリ。其ノ用途ハ數世紀以來主トシテ家庭用燃料ニ供セラル、ニ至リタルガ就中伊太利佛蘭西西班牙等ノ如キ石炭不足ノ國ニ於テ殊ニ然リ。前世紀ノ中葉ヨリ末葉ニ亘リテハ木炭ハ又鐵鑛煉解用トシテ著シク消費セララル、ニ至レリ。次ニ其ノ生産ノ起原ハ人類ノ金屬利用ト殆ンド同時代ニアルモノ、如ク其ノ方法モ當時ハ幼稚ナル坑内製造法ニ依リタリ。堆積製造法ハ其ノ後ニ至リ行ハレタルモノニシテ今尙歐洲各國ノ森林地方ニ於テハ採用セララル。炭

四三

化爐ノ考案セラレタルハ十八世紀頃ナリ。

四四

木材乾餾ハ千六百五十八年初メテ木材炭化ノ過程ニ發生スル液體中ニ醋酸ノ含有スルヲ知リタル後乃チ千八百十二年ニ至リ發見セラレタリ。初メ瓦斯燈ニハ木瓦斯ヲ用ヒシモノニシテ十九世紀初期迄ハ不完全ナル乾餾ニ依リ木炭ト木瓦斯トヲ得タリシガ十八世紀末葉ヨリ石炭ノ乾餾行ハル、ニ至リ、木材乾餾ノ目的ハ漸次變更ヲ見ルニ至レリ。

木材ノ炭化ハ初メ堆積製炭法ニ依リ、副産物トシテ木醋液ヲ採取シタルガ、其ノ後炭窯ヲ用ヒ、炭材ト燃料トヲ區別シ熱瓦斯ニテ乾餾スルニ至リ、次イデ金屬壁ヲ隔テ、熱スル裝置案出セラレ、遂ニ金屬性「レトルト」ヲ使用スルニ至レリ。較近歐洲ニ於テハ原料缺乏ニ伴ヒ鋸屑其ノ他ノ屑材乾餾裝置考案セラル、ニ至レルハ上ニ述ベタルガ如シ。

米國ニ於ケル乾餾用器ハ大形ノ車輛「レトルト」大部分ヲ占メ之レニ亞グハ炭化爐「キルン」ニシテ小形「レトルト」ハ甚ダ少シ。

(ロ) 我國ノ製炭沿革

我國ニ於ケル木材炭化ノ沿革ニ就テハ記錄ノ微スベキモノナシト雖モ往時ヨリ行ハレタルモノナルコトハ諸種ノ事情ヨリ推知セラル。排煙口ヲ大師穴ト稱スルモ僧空海弘法大師ノ考案ニ係ルモノナルコトヲ證スベキカ。近時主トシテ採用セラル、製炭窯モ既ニ元龜天正時代ニ於テ使用セラレタルモノ、如シ。天正年代攝津ノ中川勘兵衛ガ池田炭ノ名聲ヲ擧ゲ、寛政年代下總ノ川上左仲ガ佐倉炭ノ名ヲ博メ、元祿年間紀伊、土佐ニ備長炭ノ製造行ハレタ

ル等ハ以テ之ヲ證スベシ。

(ハ) 明治ヨリ大正時代

明治時代ニ入り燒窯ニ諸種ノ改良行ハレタルガ、一方乾餾法ノ案出スヲ見ルニ至レリ。明治ニ入りテ以來ノ主ナル製炭改良者トシテハ廣島縣ノ榑崎圭三氏、愛知縣ノ田中長領氏ヲ擧ゲ得ベク、榑崎、田中窯(八名窯、茶炭窯)ハ共ニ其ノ氏ヲ以テ命名シタルモノナリ。藤崎萬治郎氏及三村林學博士モ改良窯ヲ案出シタリ。大正時代ニ入り歐洲大戰ハ又炭業界ニ大ナル刺戟ヲ與ヘ種々ナル改良法ノ考案ヲ見タリ。其ノ主ナルモノハ大正式、大竹式、英式、長野式、白瀧式、錦井式、森式、田中式等ニシテ何レモ黒炭製出ニ用ヒラル、モノナルガ別ニ愛媛縣ノ西南部ニ於テ行ハレタル横臥堆積製炭法ノ一種伏燒ニ就テモ亦諸種ノ改良ヲ見ルニ至レリ。

木材炭化ノ副産物タル液體ノ利用ハ我國ニ於テハ近來ニ至リ初メテ行ハレタリ。乃チ明治二十六年頃林學博士守屋惣四郎氏之ガ利用ヲ唱シ、製炭窯ヨリ煙ノ空氣冷却ニ因リ木醋液ヲ採集シ、之ヨリ醋酸石灰ヲ製造スル方法ヲ實驗シ、其ノ普及ニ努力シ、爾後三村林學博士又之ガ實驗ト獎勵トニ努メタリ。歐洲大戰ニ際會シ、醋酸石灰及木精ノ輸入杜絶ハ南洋ニ於ケル彈性ゴム栽培ノ勃興ニ因ル乳液凝固用醋酸ノ需要增加ト相俟チテ醋酸等ノ產出ノ必要急激ニ増加シ、和歌山、埼玉兩縣ヲ初メ高知、宮崎、栃木、千葉、三重、長野等ノ諸縣及北海道等ニ於テ其ノ製造ニ未曾有ノ盛況ヲ呈シ、醋酸石灰年產額百數十萬斤ニ及ベリ。然レドモ歐洲戰爭終熄ヲ

四五



告グルニ及ビテ歐米ニ於ケル生産力ノ復興ニ伴ヒ外國品ノ輸入ヲ見ルニ至リ、内地ノ生産ハ閉塞スルニ至レリ。

四六

(二) 我國ノ木材乾餾

木材乾餾モ亦明治二十六年頃守田原兩博士等ガ歐洲ニ行ハル、方法ヲ紹介セシ以來之ガ普及ヲ見ルニ至レリ。

明治四十三年日本醋酸製造株式會社ハ栃木縣鹽原ニ車輛「レットルト」及「マイエル」式「タール」分解器ヲ設備シテ大規模ノ乾餾ヲ行ヒ又樺太廳ハ鹽原ニ同種ノ工場ヲ設立シ明治四十四年之ガ作業ヲ開始セリ。大正三年ニ於テ岩本嘉平、同澄一、同半三ノ三兄弟ハ窯内乾餾法ノ考案ヲ爲シタルガ時偶ニ歐洲大戰ニ際會セル爲メ此ノ乾餾法ハ各地ニ普及シ、萬代式、丸光式、複本式、拱熱式等ノ乾餾窯又現ハレタリ。然レドモ平和克復後是等乾餾事業ハ何レモ外品ノ壓迫、經濟界ノ恐慌等ニ因リ忽チ悲境ニ陥レリ。

第十節 我國ニ著名炭

我國ニ産スル木炭中往時ヨリ特ニ其ノ名ノ知ラル、ハ一、備長炭、二、佐倉炭、三、池田炭ノ三ナリ。左ニ其ノ各ニ就キ沿革、特徴其ノ他ヲ略述スベシ。

一、備長炭

紀州産ノ木炭ハ古來熊野炭ノ名ヲ以テ知ラレタレドモ、就中白炭ハ世ニ備長炭ト呼バレ、其

ノ質最モ優秀ニシテ世上ノ好評ヲ博セリ。

備長炭ノ濫觴ニ關シテハ二説アリ。其ノ一説ニ依レバ萬治年間、紀伊ノ國日高郡津川村在大津屋市右衛門ノ創造ニ係リ、他ノ一説ニ依レバ元祿年間、紀伊國西牟婁郡田邊郷在備後屋長右衛門ガ其ノ製炭ノ鼻祖ニシテ備長炭ノ名モ亦其ノ名ニ因ミシモノトセラレ、其ノ眞偽詳カナラザレドモ、紀伊國熊野ノ地ニ於テ初メテ産炭ノ行ハレシハ蓋シ疑ヲ容レズ。

爾來備長炭ノ名ハ益々喧傳セラレ、明治四十一年ニハ西牟婁郡ニ、同四十二年ニハ日高、東牟婁兩郡ニ同業組合ノ設置セラル、アリ、製品ノ検査施行ト相俟テ愈々其ノ改良發達ヲ見ルニ至レリ。

窯ノ構造並燒方

窯ハ丸石ヲ以テ圓形ニ積ミ、内部ハ土ヲ以テ塗リ、窯ノ後部ヲ高ク前部ヲ低クス。内部ノ幅幅ハ一丈一尺高サハ高キ方五尺五寸低キ方四尺トシ、前後ニ煙突ヲ設ク。火口ハ長方形ニシテ高サ四尺巾一尺六寸トス。窯ノ築キ方ハ最初周圍ヨリ爲シ上部ハ之ヲ殘シ炭材ヲ窯内ニ詰メ、其ノ上ニ木屑ヲ厚サ四五寸ニ積ミ、其ノ上ニ草ヲ布キ更ニ其ノ上ヲ赤土ニテ打固メ厚サ三寸許リトシテ閉ゾ。一回燒炭後ハ上部ノ蓋ハ固着スルニ至リ全ク圓形ノ窯トナル。

本炭ノ燒方ハ前記窯内ニ炭材千貫許リヲ堅ク積入レ前方ノ口ヨリ枯木ヲ投入シテ之ニ點火シ一日間燒キ其ノ夜ハ火口ノ中央ヨリ上半口ヲ土ニテ塗リ、火口ヲ狭少トナシ、更ニ三日間之ヲ燒キ又下半口ヲ塗リ最下部ニ豎五寸巾八寸ノ僅少ナル火口ヲ置キ、斯クテ又二日間燒

四七

キテ爰ニ全ク火口ヲ閉鎖シ各部ニ四寸許リノ七個ノ穴ヲ穿テ僅ニ空氣ヲ通ジテ火力ヲ助ク。新クスルコト三日間ニシテ初メテ窯口ヲ開キ「アブリ」ト稱スル木製ノ器ヲ以テ火ノ點ケル炭ヲ搔キ出シ之ヲ水ニテ濕シタル木灰中ニ埋メテ消ス。其ノ間又四日ヲ要シ斯クシテ初メテ炭トナル。其ノ一窯一回ノ收炭量ハ技工ノ巧拙諸條件ノ適否等ニ依リ異レルモ凡ソ三十二俵、百四五十貫内外ナリ。

主産地及炭材 本炭ハ主トシテ紀州西牟婁、日高、東牟婁ノ諸郡ニ産ス。

世ニ備長トシテ珍重スルモノ、炭材ハ姥目樫ニシテ之ノミヲ特ニ「ビン」ト呼ビ日向、靜岡ノ「ビン」ト區別ス。姥目樫ハ紀南御坊新庄、田邊、南部、周參見等ノ海濱ニ近キ山麓ニ産シ、就中田邊、南部ニ産スルモノハ「ビン」中最モ優良ナルモノナリ。樫ハ紀南秋津川、清川等ノ奥地ニ産ス。其ノ製品ハ姥目ニ讓ルト雖モ其ノ質堅クシテ重ク石炭ニ似タル光澤ヲ有ス。樹ハ普通春秋ノ二期ヲ除キ常ニ伐採セラル。十年以上ヲ經タル樹ヲ用フルヲ常トスルモ時ニ七、八年ノ樹ヲ伐採スルコトアリ。

備長炭ハ二貫五百匁俵ニシテ近時三圓以上ニ當リ、高價ナルヲ以テ唯饅屋料理店、菓子屋、織物師、製絲工場等ノ一部分ニ使用セラル。販路ノ割合ハ概ネ名古屋、京阪神六割、東京三割、紀州内一割ナリ。俵装ノ材料ハ茅ヲ用ヒ其ノ形狀ハ丸ク長サハ二尺三寸五分トス。俵ニハ萱口、柴口ノ二アリ、生産山名、燒夫名、炭名ヲ記セル札木ヲ附ス。目方ニハ二貫五百匁俵、三貫俵、四貫俵、三アレドモ萱口俵（三百匁）ハ御坊産ノ三貫俵ニ限リ、柴口俵（七百匁）ハ二貫五百匁

俵並四貫俵ニ用フ。

材種ニ依ル銘柄ハ次ノ如シ。

堅木炭		雑材	
大	〇	上	〃
〇	上	△	〃
小	〇	□	割物
		上	
		上	
			二ツ割
			二分以上ノ丸物

ホ	炭	材	浅木炭材	雑木、椎、栗、松、梅、榎ヲ除ク
丸間上(ホ〇)	〃	五分以上ノ丸物	丸	六分以下ノ丸物
並間上(ホ上)	〃	五分以下ノ丸物	大	一寸二分以下ノ丸物
角間上(ホ角)	〃	割物	□	割物
			浅	其ノ他屑物拾込

二、佐倉炭

佐倉炭ハ關東地方ニ於テ其ノ名甚ダ高ク座敷用トシテ賞用セラル。佐倉ノ名ヲ冠ラスト雖モ近時下總國佐倉地方ニ於ケル木炭ノ産出ハ微々振ハズ佐倉附近ニ於テモ佐倉炭ノ名スラ知ラザルモノアリ。現時ノ佐倉炭ハ從來ノ佐倉炭製法ニ依リ産出スル房州、武州、常州、野州

等各地方ノ黒炭ヲ總稱スルモノ、如シ。

佐倉炭ニ關シテハ從來種々ノ記録アリ。「産業事蹟」ニ依レバ

「小金原ノ柵林ハ往時使用ノ途ナカリシニ富塚村（今、白井村ノ内ニアリ）ニ川上右仲ト云フ者アリ寛政五年柵林輪伐ノ議ヲ立テ時ノ有司ニ請ヒテ之ヲ實施セシニ時人未ダ製炭ノ術ヲ知ラザルヲ以テ相州ヨリ職工ヲ招キ焚炭ノ業ニ從事ス之實ニ下總柵炭ノ濫觴トス爾來益々盛大トナリ遂ニ佐倉炭ノ名アルニ至レリ」

又遊歴雜記佐倉城下ノ國產條ニ依レバ

「當所ニ名産二三アリ……取り分ケ佐倉炭ハ關東ニテノ名産トス之ニ楯ト樺トノ二種アリ楯ノ木ニテ燒キタルハ皮厚ク樺ノ樹ヲ燒キタルハ皮薄シ茶事ニ用フル炭之ナリ武州ヨリモ秩父、八王子、飯能、青柳、神奈川等ヨリ若干武城ニ於テ鬻グト雖モ下總佐倉ノ産ヲ上品トシ其ノ餘ハ八王子ヲ良シトス、炭ノ出處同ジカラネド皆通ジテ佐倉炭ト稱セリ強チ此ノ炭ハ佐倉ニテ燒クニハアラザレドモ佐倉ノ城下ニテ賣捌クヲ以テ此ノ名アリ攝津國池田ノ里ハ市中ナレドモ近在ヨリ切炭若干ヲ持出シ池田ノ市日ニ賣捌クヲ以テ池田炭ト云ヘルガ如シ然レバ下總佐倉ノ城下ニテハ切炭ヲ金一分ヲ拾俵ニ換ヘ又常陸ノ山炭ハ金一分ヲ以テ上品ナル性堅キハ大體六俵半ヨリ七俵ニ換フ是東武ニテ所謂角大ト云ヘルモノナリ下品ニハ軟カキハ金一分ヲ以テ十三俵マデニ換フ」

是ニ由テ觀レバ佐倉炭ナル名ノ起原ハ必ズシモ下總佐倉ニ於テ產出セラレタルニ因リ佐

倉ナル名ヲ附セラレタルニアラズ。其ノ當時ノ武州產ヲモ併稱シタルモノニシテ唯、主トシテ佐倉城下ニ於テ賣捌カレタルガ爲メナルガ如シ。

窯ハ長サ約八尺、巾約六尺、深サ約二尺、底部ハ平面トシテ空氣ノ流通ヲ防ギ其ノ周圍凡二寸ヲ除キタル全面ニ砂ヲ盛り其ノ間ヲ砂ト土トノ混合物ヲ以テ詰メ穴ノ内側ノ高サニ至ラシメ後穴内ノ砂ヲ除キ長サ一尺五、六寸ニ切り揃ヘタル乾燥セル炭材ヲ穴内ニ並立ニ詰メ込ミ其ノ上ニ粗朶小枝等ヲ穹窿狀ニ置キ、蓋ヲ覆ヒ其ノ上ヲ更ニ混合セル土砂ヲ以テ塗リ厚一寸三分乃至二寸トナシ、火口ハ石ヲ以テ造リ而シテ煙突ハ窯ノ底ヨリ來ル道ニ通ジ火口ト反對ノ側ニ對ス。斯クテ一尺程開ケタル上部ノ火口ヨリ火ヲ入レ天井凡ソ四分ノ一ノ邊迄火ノ廻ルヲ待チ上部ヨリ四分ノ一ノ處ニ片材ヲ横タヘ、泥土ヲ以テ夫レヨリ上部ヲ塗リ塞ギ二分ノ一迄火廻レバ本口ノミヲ開キ置キ他ハ悉ク閉ヅ。斯クスル時ハ火ハ火口ヨリ塞ギ二分ノ一之ヨリ兩方ニ分レ火口ノ方ニ向フ。火口ヲ全ク閉塞スル時期ハ煙ノ色ニ依リテ判斷ス。點火ヨリ火口ヲ止メル迄ノ時間ハ冬季ハ午前九時ヨリ翌日午後三時迄、春季ハ午前七時ヨリ翌日午前十時迄ヲ普通トス。火口ヲ閉塞シタル儘一日ヲ經レバ窯中ノ火ハ全ク消滅ス。爰ニ於テ窯中ノ炭ヲ採リ出スモノナルガ點火ヨリ探炭マデ凡ソ四日ヲ要ス。

佐倉炭ノ材種ハ柵櫛ナリ。炭材ヲ燒クニ當リ一尺物ハ九寸ニ、九寸物ハ八寸ニ燒上ル。炭材ノ樹齡ハ七年乃至十年ヲ可トス。燒上レル炭ハ池田炭ニ相似テ炭材ノ形ヲ崩サズ兩端ノ木口菊形ヲ呈シ、又見事ナル黒色ヲ帶ブ。

三、池田炭

池田炭ハ佐倉炭ト同ジク黒炭中著名ナルモノナリ。本炭ハ天正年間攝津ノ國能勢郡吉川村中村勘兵衛清光ノ創製セシモノト傳ヘラレ、名僧利休ハ池田炭ノ品位幽香ノ佳ナルヲ殊ノ外喜ビ常ニ愛用シタリシト。然レドモ當時ハ未ダ其ノ製炭方法ニ缺陷アリテ多少燻煙ノ嫌アリシガ、爾來漸次改善セラレ所謂池田炭トシテ天下ノ推賞ヲ受クルニ至レリ。

窯ハ縦徑九尺、横徑八尺程ノ敷地ヲ土間ノ如ク打固メ、周圍ニ長サ三尺、周圍五寸ノ松杭百五十本ヲ五寸許リ打込ミ周圍ハ九寸位ノ曲リ易キ幹ヲ以テ縦ニ三本、横ニ三本ヲ架シテ前ノ松杭ヲ縛シ穹窿狀ト爲シ、多數ノ小枝ヲ以テ之ヲ編ミ付ケ、更ニ十二、三本ノ小枝ヲ以テ之ヲ押へ、窯ノ後部ニ棒ヲ立テ下端ヲ小「クド」ト稱スル約三寸許リ掘リ下ゲタル石ヲ以テ疊ミタル穴ニ接セシム。此ノ小「クド」ハ煙筒ノ入口ニシテ「クド」棒ハ煙筒トナル穴ヲ成ス。火口ハ石ヲ以テ疊ミ前面ノ兩側ハ長サ一尺三寸、巾一尺ノ一個ノ石ヲ以テシ其ノ兩側ノ石ノ上ニ更ニ一個ノ石ヲ置キ、「クド」棒モ亦切石ヲ以テ疊ム。斯クシテ後、粘土ヲ以テ其ノ周圍ヲ塗リ、乾燥セシメ、塗ルコト五回ニシテ一尺五寸ノ厚サト爲ス。塗リ終レバ「クド」棒ヲ抜キ窯内ニテ枯柴ニ點火シ土ヲ塗ル前ニ作りシ下拵ヘノ棒ヲ燒キ去ル。全部窯成レバ二尺内外ニ切り揃ヘタル樑材百貫匁ヲ縦ニ立テ其ノ上ニ「サックワ」ト稱スル枝材六十束ヲ充シ口立木二十貫ヲ立テ焚附材ヲ焚キ込ムコト約六時間ニシテ其ノ火窯内ノ上部ナル「サックワ」ニ燃エ移ル。此ノ時粘土ト小石、瓦片等ト混和シタルモノヲ以テ火口ノ下部方三寸許リノ小口

ヲ殘シ火口ヲ塗リ縮メ、燃燒ヲ續クルコト二晝夜、炭材、燃燒セバ火口ト煙筒トヲ密閉シ空氣ヲ遮斷スルコト五晝夜、火氣全ク絶ユレバ爰ニ始メテ產炭ヲ見ル。

池田炭ノ材種ハ概ネ樑ニシテ製炭法ノ可ナルガ爲メ其ノ硬度極メテ適當ナリ。其ノ特徴ハ上皮剝グルコトナク、原木ノ儘ヲ殘シ上下ノ木口ハ佐倉炭同様菊形ヲ呈シ割目又美ナリ。加之本炭ハ其ノ火力ノ強ク其ノ有效時間ノ長ク、一種ノ幽香ヲ有スルヲ誇トシ、其ノ一片ノミニ點火スルモ尙立消スル等ノ憂ナシ。從テ茶席用ヲ初メ劇場寄席、料理店、旅館等ノ火鉢用トシテ愛用セララル。近時、他府縣ヨリ製炭法實習ノ爲メ來リ歸縣後此ノ方法ヲ以テ製炭スルモノ多シト雖モ品質ハ尙本家ナル池田炭ニ及バズトイフ。

主要産地ハ大阪府能勢郡止々呂美村ニシテ池田町ノ西北二里ノ地點ニ在リ。製炭業者ハ六、七戸ニ過ギザルモ富者、名門モ亦製炭事業ニ專念スルノ風アリ。此ノ外、産地トシテハ兵庫縣川邊郡東谷村、國崎村、吉川村等ニシテ止々呂美村ノ年生産額ハ十八萬貫内外、他三ヶ村ノ年産額モ殆ド同數量ナリ。

炭材ハ毎年一、二月頃伐採シ約半ヶ月ヲ經テ燒ク。其ノ製品ハ包裝ヲ施サル儘ニテ納屋ニ貯藏シ、約一ヶ年ヲ經タル後生産者ノ手ニ依リ肩引又ハ牛車ヲ以テ池田町及其ノ北隣細川村ニ運送シ、薪炭商ノ手ニ渡ス。現在池田炭ノ約半數ハ池田町池田木炭株式會社ニ於テ取扱ハル。

仕向地ハ京阪神方面ニシテ遠距離ノ地ヘノ輸送ハ稀ナリ。從テ其ノ包裝方法ノ如キモ一

本並ビトシ之ヲ藁包ト爲シ毀損ヲ避クル爲メ十文字ニ細木ヲ掛ケ其ノ彈力ニテ内部ノ炭ヲ壓セザルヤウニス。積載ニ當リテモ毀損ヲ恐レ積ム重ナルコトナシ。一車ノ積載量ハ肩引ニテ五貫二百匁俵十俵乃至十二俵牛車トシテ普通十五俵ナリ。

### 第一章 生 産

#### 第一節 全國木炭生産額

木炭ハ本邦ニ於ケル各種燃料中重要ナル部類ニ屬ス。其ノ重要ノ程度ハ大規模ノ工業用トシテハ石炭、石油ニ及バザレドモ家庭、社寺、教會、病院、火葬場、陶器製造等ノ如キ特殊ノ小工業並製鐵業等ニ於テハ主位ヲ占ム。是レ古來ノ慣習ノ與ツテ力アル處ナリト雖モ、無煙且瓦斯發散量小ニシテ我國ニ於ケル家屋ノ構造上最モ適スルヲ以テナリ。  
北米合衆國ニ於テモ製炭業ハ相當ニ注目セラレ、比列賓又近時其ノ生産ヲ開始シ、馬來半島ニ於テモ炊事用トシテ特殊ノ木炭ヲ製造シ、支那モ亦近時優良品ヲ輸出スルニ至リ我國ト競争ノ地位ニ立タントスル狀勢ニアリ。燃料トシテノ木炭ガ石炭其ノ他ノ燃料ニ依リテ多少壓迫セララルモ木炭ハ又木炭トシテノ獨得ノ長所アルヲ以テ其ノ生産ハ次第ニ増加ノ傾向ヲ有ス。  
大正二年ヨリ十一年ニ至ル最近十ヶ年間ニ於ケル全國生産額ハ左ノ如シ。

全國木炭生産額

年次	摘要	數量	價額
大正二年	二	三四六、〇二二、六四〇	二二、六七〇、四八一
三年	三	三三六、六三一、〇〇九	不明
四年	四	三五二、一〇九、九三二	二二、五七九、五五一
五年	五	三八六、三六二、一二九	不明
六年	六	四四六、二一九、三四五	不明
七年	七	五二二、八四六、三四三	九三、三九八、六七九
八年	八	四九三、五一、九三七	不明
九年	九	四六一、〇五三、七二九	不明
十年	十	四六二、六九四、三二五	二、三〇、八四八、三三九
十一年	十一	四六二、五四二、七八二	二、一九、七六五、三七四
十年間平均	平均	四二六、九九七、四一七	

〔北海道廳及農商務省調査ニ依ル〕

前表ニ依リ十ヶ年間ニ於ケル生産狀況ヲ概觀スルニ七年及ビ八年ノ生産量特大ナリシヲ除キ略々漸増ノ現象ヲ呈シ増加割合極端ナラズ。大正五年以前四ヶ年ノ生産量ハ何レモ四億貫ニ達セズ、六年以後ノ六ヶ年ハ何レモ其ノ生産量四億四千萬貫以上ヲ有シ從テ十ヶ年間ノ平均生産量ヲ超ユルヲ見ルベク、二年ト十一年ト比較スレバ後者ハ前者ヨリ約一億二

千萬貫即チ該十ヶ年ニ約三割ノ増加ヲ示ス。  
 次ニ價額ニ就テ見ルニ年ト共ニ騰貴ノ趨勢ニアルヲ知ルヲ得レドモ生産數量ニ比例セザルハ勿論ニシテ二年ト十一年トヲ比較スルニ後者ノ價格ハ約一億二千萬圓ニシテ前者ノ二千萬圓ニ對シ約六倍ニ當ルヲ見ル。

第一節 府縣別木炭生産額

一、府縣別木炭生産額

各府縣ノ木炭生産額ニ就テモ之ヲ累年のニ表示スルコト能ハザルノ憾アリ。左ニ農商務省調査ヲ基礎トシ單ニ大正十年及十一年ニ就キ其ノ數字ヲ掲グ。

府縣名	大正十年		大正十一年	
	數量	價額	數量	價額
東京	二、〇六五、五六一	六九、三三八	三、四四〇、八九〇	一、〇〇四、二八九
大阪	七、九七一、七三三	二、〇二四、二〇〇	五、五七〇、八四二	一、八〇七、三三六
京都	一、一〇一、一五〇	四四二、九七五	一、〇六一、〇五〇	六六、七〇四
神戶	二、六三三、四一四	一、〇五〇、一四九	三、二二八、一五三	四、一五九、三二一
兵庫	二、三九七、七七一	四、〇八〇、一六一	八、五三〇、四七二	一、九八〇、〇三三
長崎	四、五五七、一六七	一、一四九、一三三	五、八八八、七〇〇	一、九八〇、〇三三
新潟	四、八六八、二七〇	五、五五三、〇八六	二、五八八、七〇〇	五、五五九、五〇〇
埼玉	五、六三三、九九〇	二、四〇五、五七一	五、六二五、一四五	一、九二一、八四七

府縣名	大正十年		大正十一年	
	數量	價額	數量	價額
群馬	一〇、三三三、六五〇	三、七八〇、一八五	二二、二六六、七九八	四、一〇〇、四三三
茨城	四、三〇七、三八八	一、七七一、三三九	五、五七六、一六〇	二、〇四八、一〇〇
栃木	四、三三三、二九六	一、七七一、三三九	四、三三三、二九六	一、六〇二、六一一
群馬	一、四〇六、五八二	四、五九二、六四三	三、三三三、五〇三	三、五八四、七〇〇
三浦	一、八五九、五八〇	六、三三三、九七〇	一、九五五、七〇六	五、六、五四二
愛知	九、八八四、四七二	三、五九二、一三九	九、三二一、三五四	三、〇九五、九四九
静岡	四、〇九三、七六三	一、二八三、二八九	四、六九〇、七四二	一、二二七、一七三
山梨	一〇、八三九、五九八	四、一九五、五〇八	一〇、五三八、八四二	三、八五九、四二五
岐阜	九、七二〇、四七七	二、八三九、一四三	八、九四四、八六四	二、三九〇、五二六
長岐	三、九四一、五八七	一、五八一、一六六	四、三四七、四七九	一、三九二、六三三
富山	一、八三三、九八三	三、五五九、五五五	二、三五〇、〇七二	二、八四四、六二六
石川	二、三〇一、一五五	三、七三三、三三三	二、七三〇、八三六	三、五八七、九二一
福井	八、九八四、三九五	二、七三三、三三三	九、二二二、七八七	二、四九七、四二二
岩手	一九、七六三、一三三	六、二二〇、六六三	一九、九六五、一五二	五、二四一、八八
青森	三三、二八四、七九三	八、二八六、三三二	二九、八五四、二五五	六、六五三、〇八〇
山形	八、九四〇、五七一	二、二九七、五九四	一〇、〇一八、〇〇二	二、二六五、七四六
秋田	一三、三二六、五七四	二、七五五、七九〇	九、一八六、一八四	二、七五三、三三三
福島	九、八四四、九六四	四、〇一一、八五七	三、三六六、四五〇	三、五三三、五九九
石川	一一、五五六、五二四	三、一五五、三三〇	八、七〇〇、三三八	二、八二二、五四二
富山	五、二四一、六八一	三、五六一、〇一一	九、九三二、一六六	二、九八三、三三〇
鳥取	七、八七二、七三二	一、五五八、八三六	四、四三三、九三三	一、二九七、二八〇

島根	一四、二六六、一七二	三、〇六八、一三三	一四、三八九、二二三	三、二五四、九七四
山口	八、三三六、五九八	二、七五五、七三〇	八、八二五、七五〇	二、五八七、二五五
山陰	一〇、三九九、六八七	二、三〇四、四二七	一〇、八三三、八五四	二、二五〇、〇〇三
徳島	九、三九九、二二三	二、六九五、七三八	八、九五四、二二三	二、五三〇、四六九
香川	六、五九一、七二一	二、七三三、九五三	六、二九九、四三三	二、四七八、五六四
愛媛	五、一八五、〇八七	一、六三九、九八九	五、〇六二、〇二八	一、五〇八、八八四
高知	一、〇〇〇、六七二	三、七二一、六三八	九、六六、六七四	二、九二、七五〇
福岡	六、五四四、八二八	一、五五三、三三八	六、一〇六、五二四	一、四八六、六四四
大分	一六、二六、七二二	四、七九九、四三〇	一七、〇四六、一八一	四、四一七、三二四
佐賀	三、三〇〇、三七五	八、三九九、七二七	三、三三二、三四二	八、六六、七五九
熊本	一四、四四五、六一〇	四、三二六、七九三	一三、六二六、七〇五	三、七七一、七四四
宮崎	一、六五四、四六〇	四、八二二、〇五九	一、四八四、六一〇	三、八五、一三七
鹿児島	一一、七七五、七七二	三、三三六、〇八一	九、一五五、三七七	二、二二二、〇九五
鹿兒	一九、五五三、七五七	四、四四三、五二七	一九、七三三、六六六	四、〇六九、四四四
神奈川	一四、四四三、四三二	二、六五五、四〇〇	一五、三三七、四九三	二、八〇〇、九九二
沖繩	一、四三三、四六五	一、六、三三三	一、〇五、九三三	三、六、〇三六
北海道	四、〇七、一七三	五、四四、五三二	四、三三〇、一八一	五、八八、五八八

〔備考〕 神奈川縣ノ數字ハ大正十一年ノモノヲ缺ク

〔農商務省調査〕

前表ニ依リ先ヅ大正十年ニ於ケル其ノ生産量ヲ見ルニ北海道ノ四千五百萬貫岩手縣ノ三千三百萬貫ハ嶄然頭角ヲ現ハスヲ知ルベシ。今姑ラク此ノ二地方ヲ別トシ各府縣ヲ第一、千

萬貫以上、第二、五百萬貫以上、第三、五百萬貫以下ニ區別スルトキハ福島、宮崎、新潟、島根、大分、鹿兒島、栃木、秋田、長野、岐阜、靜岡、兵庫、群馬、石川、廣島及熊本諸縣ハ第一ニ屬シ、山口、和歌山、徳島、青森諸縣ハ第二ニ屬シ、第二中上記以外ノ各縣ハ木炭生産地トシテ特記スルニ足ルベキモノナシ。東京、大阪、神奈川、愛知、福岡諸府縣ハ第三ニ屬スルモ此等府縣ハ人口稠密ニシテ商工業盛ナル地方ヲ含ムガ故ニ生産量ニ比シ消費量遙ニ大ナルヲ以テ生産地ト稱スルヨリハ寧ろ消費地ト稱スルヲ妥當トスベシ。

價額上ヨリ見レバ岩手縣ノ八百萬圓、福島縣ノ六百萬圓、新潟縣及北海道ノ五百萬圓等ハ其ノ主要ナルモノニシテ此ノ外四百萬圓以上ヲ生産スル府縣トシテハ宮崎、大分、高知、秋田、靜岡、栃木及兵庫ノ各縣ナリ。

要スルニ本邦ニ於ケル木炭生産地ハ北海道、東北地方、關東、西北部、北陸地方ノ一部、九州ノ東南部、四國ノ南半部及山陰地方ニ區分スルコトヲ得ベク、其ノ勢力範圍ヲ見レバ北海道、東北地方及ビ栃木縣ノ木炭ハ箱根以東ヲ主要市場トシ、北陸地方ノ製品ハ本州中部一帶ニ捌カレ、九州及四國ノ木炭ハ海陸兩方面ヨリ其ノ勢力ヲ關西地方ニ及ボシ時ニ依リ東京地方ノ市場ニ送ラル、コトアリ。山陰地方ノ生産品ハ主トシテ畿内地方ニ向ケラレ、九州及四國ノ木炭ト競争ノ立場ニ在リ。

二、北海道木炭生産狀況

北海道ハ現在ニ於テ本邦木炭生産地中第一位ヲ占ムルノミナラズ將來ニ於テモ亦最モ有

北海道木炭生産状況

年次	摘要		製炭戸數	窯數	數	數量	價額
	大正	六年					
大正	六	六	六,一四四	七,七九八	四一,〇三九	七八二	三,五九三,八七四
七年	六	六	六,五九九	八,一九七	四〇,六五三	七七八	四,八四〇,七八五
八年	六	六	六,四六九	八,一七二	三四,〇一四	〇二三	四,三〇二,二九四
九年	七	七	七,四八六	九,五九七	四〇,〇九七	〇一五	五,三八七,九七六
十年	七	七	七,五二二	九,八二八	四五,〇二七	一七三	五,四三六,五三二

〔北海道廳調査〕

前表ニ依リ先ヅ生産量ヲ見ルニ大正八年ノ三千四百萬貫ヲ除キ其ノ他ノ各年ハ何レモ四千萬貫ヲ超エ、六年、七年及九年ハ多少ノ差異アリト雖モ其ノ生産量大體類似シ、特ニ大正十年ハ此等ノ年ヨリ一躍約五百萬貫ノ増産ヲ見テ四千五百萬貫ニ達シ其ノ製造戸數及窯數ニ於テモ最近五ヶ年間ニ於テ其ノ首位ニ在リ。即チ六年ト比較スレバ製造戸數ニ於テ六千百戸ヨリ千四百戸ヲ増加シテ七千五百戸トナリ、窯數ニ於テ七千七百窯ヨリ九千八百窯ニ上リ、其ノ増加數二千百窯ニ達スルノ状態ニシテ以テ北海道木炭業界ノ趨勢ヲ推知シ得ベシ。

第三節 炭種別生産額

一、全國炭種別生産額

木炭ノ製法上ヨリ分類スルバ白炭、黒炭及其ノ他ノ炭ト爲スコトヲ得。白炭ハ所謂堅炭ニシテ其ノ價格高ク、黒炭ハ又土産ト稱シ其ノ質軟カク白炭ニ劣ルト雖モ價格低廉ナルヲ以テ其ノ生産量ハ前者ヨリ大ナリ。

全國炭種別生産額

年次	種別摘要		炭		炭		其他	
	白	黒	數量	價額	數量	價額	數量	價額
大正	一〇,四九七,七三	一〇,三三三,八五四	一一,四六〇,四六四	一〇,五三四,三五八	四七二,六八三	四七二,六八三	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五
七年	二〇〇,八九九,〇九五	二八三,七九二,二七八	四七,五九九,九七二	一六,一八四,三〇八	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五
十年	一九五,〇六六,八九二	二五五,六三四,三四一	六四,三七二,二三三	二二,〇四三,〇九二	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五
十一年	一九九,四九七,七六六	二五二,一六〇,五五九	五七,九六,一五九	二〇,六六二,四一七	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五	二,一四三,〇九五

〔農省務省調査〕

前表ニ依リ白炭、黒炭及其ノ他ヲ通觀スルニ生産量最モ大ナルハ大正七年ニシテ最近ノ數字タル大正十一年ハ之ニ劣ルガ如シト雖モ十一年ノ生産量ハ其ノ他ノ年ニ比シ減ジタルガ爲ニ非ズシテ七年ノ生産量最近十ヶ年間ヲ通ジ特ニ大ナリシニ基因ス。先ヅ白炭ニ就テ謂ヘバ七年ノ二億貫ニ對シ十一年ハ之ヨリ約百萬貫ヲ減ジテ一億九千九百萬貫ヲ算シ七年ニ比スルトキハ斯クノ如ク減少セリト雖モ四年ニ比スルトキハ約五千萬貫即チ約三割五分方



ノ増加ヲ示シ、黒炭及ビ其ノ他ノ炭ニ於テモ略々之ト同様ノ増加率ヲ示ス。  
 次ニ是等三種木炭ノ生産量割合ヲ見ルニ四ヶ年ヲ通ジ全生産量ニ對シ黒炭五割強、白炭四割弱、其ノ他ハ約一割ナリ。又黒炭ノ生産量ハ常ニ白炭ノ生産量ヲ超エ、其ノ他ノ炭ニ至リテハ生産微々タリ。然レドモ前述シタルガ如ク白炭ハ品質優良價格低廉ナラザルヲ以テ價額上ヨリ見レバ其ノ生産ハ必ズシモ黒炭ニ劣ルト謂フコトヲ得ズ。大正十年ノ如キハ約六千四百萬圓ノ生産額ヲ示シタリ。

二、各府縣炭種別生産額  
 農商務省調査ニ依リ府縣別ニ其ノ炭種ヲ見レバ地方ニ依リテ各特徴アリ。  
 各府縣炭種別生産額（大正十一年）

府縣	白炭		黒炭		其他	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
東京	七六七、四〇〇	一、八六五、八七五	二、七七一、五〇〇	七二二、五五八	五、九五〇	八二七
京都	二、五五、一八八	三、六四四、四五二	二、七三三、七七一	八三三、四三三	二八九、八六七	六七、〇七〇
大阪	三六七、八二〇	一、〇九、四七九	一、〇〇〇、三四〇	四五九、〇四〇	九二、九〇〇	三六、九〇〇
神奈川	八八七、六二〇	三、〇四、一五四	一、七三二、九〇四	六七三、六九九	一、九〇〇	八〇〇
兵庫	一〇、六〇〇、三三三	三、七三二、一三四	六八、七七五	一七、四〇五	一、〇四九、一四五	二五〇、七七二
長崎	四、一〇六、五八四	九五一、三九二	四、三三九、二八六	九七四、九七一	八四、六〇二	一一、六七五
新潟	二、五九五、一三九	四、六六七、二二三	二、三三二、九八八	六九九、九三三	九〇〇、六五三	一八二、三三六

府縣	白炭		黒炭		其他	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
群馬	五、四九九、八六五	一、八六五、八七五	一〇二、九〇〇	四一、八一五	一一、四八〇	三、一五七
茨城	一〇、八一、八七五	三、六四四、四五二	一、三八九、七〇七	四四一、八三三	六五、二六六	一三、一四八
栃木	四七六、八三三	一、〇九、四七九	四、七〇九、七二七	一、六九二、二五〇	三九九、七二二	一六、〇八一
群馬	八四三、三四三	三、〇四、一五四	三、二六六、〇五九	一、二六八、八六五	二九、二五八	三九、五九二
愛知	三、〇八、〇五九	一、〇五四、六五六	九、一五五、四三三	二、四五一、八三三	四、〇一一	一〇、九二一
三重	三五、一八〇	六、三三二	一、五五五、〇二六	四九三、九六二	一九、五〇〇	二、二四八
静岡	四四六、二七五	一、二三、一九〇	八、七四五、一八五	二、八三一、五八〇	一一九、八九四	二六、一七九
山梨	一、七〇六、〇三〇	五七八、五六三	二、九〇〇、四五二	六三二、四四〇	三、四二六	六、一六九
滋賀	二、六九五、九三四	一、一八一、九七一	七、六九二、七三三	二、六四二、〇二六	一、五〇〇、一七五	三四、四八八
岐阜	四、三三四、六七六	一、一〇〇、五九二	四、五〇一、二一九	一、一七〇、〇六九	九八、〇六九	一九、八五六
長野	四、六四〇	一、八五六	四、〇〇五、六三三	一、三五六、六七六	三、七二〇	三四、〇九〇
富山	五、二二、七八八	一、三三二、〇四七	六、〇〇九、五〇二	一、五〇二、二八八	二、八、八五二	二、二六一
石川	八、六四四、四六八	二、六七一、六四七	三、五三三、八六三	八六七、四六四	五、三六、五〇五	一〇二、八〇〇
福井	一、四〇七、四三七	三、六六、八〇八	七、七〇〇、四七〇	二、二二、六三三	四、八八〇	八、九七一
山形	九、一〇九、六五二	二、七六三、五四七	一〇、七四六、一〇七	二、四五四、六五九	一〇九、三九三	二、三、六三三
秋田	四、七六、〇〇八	一、三三九、九五八	二、四、八三七、一一〇	五、二九〇、〇九三	二八九、一三七	四三、〇九
福馬	四、三三、四三九	一、〇七四、四二五	五、三二一、四五六	一、一六六、三八五	五九三、一〇八	三四、九四六
石川	七、天〇、二三元	二、二八八、四二二	一、四三七、二七六	四八八、九五六	一四八、六六九	三六、〇〇五
福馬	一、九七〇、三〇五	三、一八六、二七七	一、三六、五五五	三四二、八六六	五九、五九〇	一四、六一六
石川	一、五八、七四〇	五四、三三七	六、九五、六〇三	二、三三、五四八	一〇五、九八五	四六、六六六
富山	一、五七一、九四四	四、五二、二二五	八、三二一、七七	二、四四、四五七	一四七、四四五	二五、六四八
富山	二、三三三、二二〇	七、六六、〇九六	一、九二一、七六八	五、四〇、七四三	一一〇、〇六五	二〇、四四二

島根	鳥取	岡山	廣島	山口	和歌山	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	大分	佐賀	熊本	宮崎	鹿兒島	沖縄	北海道
三、八六〇、八九六	一、〇三三、二六八	三、一六六、一五八	七、九二九、九二〇	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八
五、五〇〇、九〇〇	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	七、九二九、九二〇	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八
五、五〇〇、九〇〇	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	七、九二九、九二〇	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八	一、二九四、四五二	八、四九三、〇四八	一、九八六、七三八	二、七八〇、九九八
三、三三三、三三三	八、八八八、八八八	六、八八八、八八八	一、二九四、四五二	九、九九九、九九九	二、〇〇〇、〇〇〇	三、三三三、三三三	四、四四四、四四四	五、五五五、五五五	六、六六六、六六六	七、七七七、七七七	八、八八八、八八八	九、九九九、九九九	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一一、一一一、一一一	一二、一二二、一二二	一三、一三三、一三三	一四、一四四、一四四
二、八七五、一〇七	九、九九九、九九九	二、〇〇三、九四五	一、三三七、七三二	二、〇一〇、三〇七	四、八七、四三三	三、七四、三三三	四、五二、九四二	二、三三、五九四	二、八六一、二五五	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二
四、七六〇、二五二	二、〇〇三、九四五	一、三三七、七三二	二、〇一〇、三〇七	四、八七、四三三	三、七四、三三三	四、五二、九四二	二、三三、五九四	二、八六一、二五五	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四
二、八五五、三三三	三、三三三、三三三	二、七六、七六	五、七、九九九	三、三三、三三三	四、五二、九四二	二、三三、五九四	二、八六一、二五五	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
九、七三三、三八	二、七六、七六	五、七、九九九	三、三三、三三三	四、五二、九四二	二、三三、五九四	二、八六一、二五五	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
九、七三三、三八	二、七六、七六	五、七、九九九	三、三三、三三三	四、五二、九四二	二、三三、五九四	二、八六一、二五五	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
三、四、二九〇	一〇、五七六	一、四一六、一八四	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
三、〇〇九、五五〇	九、四、二五八	六、〇〇一、四一六	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
一、六、二九四、一四四	三、四、二六七	三、〇一一、四一六	一、二二二、三三三	五、九一、三九〇	一、三〇〇、八七八	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
六、六、七四、〇六	一、三、九、七九〇	一、〇四七、九九九	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四
六、七〇、三三〇	一〇、一、六、七	四、七、六八八、六二二	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四	五、七五五、〇六四

〔備考〕 神奈川縣ノ數字ハ大正十年中ノモノナリ  
 前表ニ依リ便宜上白炭及黒炭ノ一千萬貫以上ノ生産府縣ヲ舉グレバ白炭ノ生産地トシテハ宮崎縣ノ一千六百萬貫ヲ筆頭トシ兵庫新潟群馬秋田高知等ノ各縣之ニ屬シ黒炭ノ生産地

トシテハ北海道ノ四千七百萬貫其ノ首位ヲ占メ、岩手、福島等ノ各縣之ニ亞グ。又全國的ニ觀レバ黒炭ノ生産量ハ白炭ノ生産量ヨリ大ナリト雖モ各府縣ニ就テ觀レバ必ラズシモ然ラザルヲ知ルベシ。乃チ此ノ現象ハ前段ニ述ベタルガ如ク千萬貫以上ノ生産地トシテハ白炭ノ方多シ。

北海道及岩手縣ハ我國最大ノ木炭生産地ニシテ大部分ハ黒炭之ヲ占メ、其ノ生産量ヲ全國ノ數量ト比較スレバ北海道ハ其ノ一割九分弱岩手縣ハ一割三分強ニ相當ス。  
 向上来白炭及黒炭ニ對シ其ノ他ト謂ヘルハ鍛冶炭其ノ他ヲ含ムモノニシテ生産量ハ前二者ニ比シ遙カニ少ク、神奈川縣ノ百萬貫ヲ除キ其ノ他ハ何レモ百萬貫ニ達セズ。

### 第四節 殖民地木炭生産狀況

一、樺太  
 樺太ノ木炭生産ハ森林ノ開發未ダ充分ナラザル今日見ルベキモノ少シト雖モ位置寒帯ニ近ク、且將來島内ニ各種工業ノ勃興シ、人口増殖スルト共ニ木炭ノ需要増加ヲ誘發シ延イテ生産モ之ニ適應シテ増加ノ傾向ヲ有スルノミナラズ、豊富ナル森林ノ伐採ヲ行フトキハ樺太ニ於ケル木炭生産ノ將來ハ相當有望ナルモノ、如シ。唯、大正十一年ヲ除キ大正六年以來殆ン毎毎年減少ノ傾向ヲ持續シ來リシハ内地ニ於ケル木炭生産量ノ漸増ニ比シ奇現象ト謂フベシ。

樺太廳調査ニ基キ製造戸數、生産數量其ノ他ヲ表示シ、同島ニ於ケル木炭生産狀況ヲ明カニスルコト、セリ。即チ次表ノ如シ。

樺太木炭生産狀況

年次	摘要	製造戸數	窯數	數	量	價	額
大正六年		五一三		五七六	一、四五三、九二八		一七一、九二四
同七年		五二二		六一二	一、五七七、四七六		二八四、三八一
同八年		四九〇		六六九	一、二一一、四七九		三三二、九一四
同九年		不明		不明	不明		不明
同十年		三三〇		三七〇	一、二八一、七一九		二九九、五〇八
同十一年		四七三		五四五	一、九〇六、〇八八		三九〇、八二二

前表ニ依レバ數量ニ於テ最モ大ナルハ大正十一年ニシテ百九十萬貫ニ及ベリト雖モ、之ヲ内地ノ府縣ニ比スレバ最小生産地方タル東京、奈良等ノ府縣ト伯仲シ大阪、香川、沖繩等ノ各府縣ヨリハ其ノ數量聊カ大ナルニ過ギズ。次ニ之ヲ大正六年ニ比スレバ約五十萬貫ヲ増加セリト雖モ七年ニ約十萬貫ヲ増加シタル外、十年迄ハ常ニ漸減ノ傾向ヲ辿リ十一年ニ至リ初メテ増加セルモ價額ハ尙三十九萬圓ニシテ内地ノ下位ニ屬スル香川縣ト大差ナシ。

二、臺灣

製炭法ノ不完全ナルト運搬ノ不便ナルトニ依リ臺灣ニ於ケル木炭ノ生産ハ未ダ其ノ初期

在リ。

製炭法ハ黑燒ト稱シ極メテ原始的ノモノナリ。製炭セラレタル分量ノ三割ハ原木ノ儘ニ割ハ半燒。残り五割ガ比較的完全ナル木炭トナルニ過ギザルヲ以テ之等ノ木炭ハ籠ニ入レテ市場ニ送り其ノ中ヨリ炭化セラレタル部分ノミヲ撰ビテ販賣スルモノニシテ上等品一貫

ノ價格二十錢見當ナリ。  
臺灣ノ木炭ハ右ノ如ク粗惡ナルヲ以テ單ニ島内ノ需要ヲ充タスニ止リ、未ダ島外へ輸移出スルノ域ニ達セザレドモ將來道路開ケ高地帯ニ於ケル森林ヲ伐採シ、斯ノ地方ニテ生産シタル木炭ヲ容易ニ市場ニ搬出シ得ルニ至ルト共ニ製炭法ノ改善ヲ行フトキハ、内地へノ移出ハ勿論其ノ他東洋諸國へノ輸出モ望ミ得ベキガ如シ。現ニ臺中州當局ノ如キハ此ノ點ニ着眼シ靜岡縣、福島縣等ヨリ教師ヲ招聘シテ講習會ヲ開催スル等大イニ製炭法ノ改善ニ努力シツツアリ。

臺灣ニ關シテ、次ニ述ブル朝鮮ト同様精確ナル統計ヲ缺キ、全島ノ生産量ヲ知ルコト能ハザルヲ憾トスト雖モ、臺中州ニ於ケル大正十二年中ノ生産額ハ數量約七十三萬二千八百九十貫、價額約八萬三千六百圓ナリ。

三、朝鮮

(1) 輸移出入數量並價額

朝鮮ニ於ケル木炭ノ生産ニ關シテハ統計ノ據ルベキモノナク、從テ其ノ生産事情ヲ詳ニス

ルコト能ハザレドモ朝鮮總督府調査ニ依リ大正九年以降十一年ニ至ル輸出數量並價額ヲ示セバ左ノ如シ。

朝鮮木炭輸出數量並價額

年次	大正九年		大正十年		大正十一年	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
支那	一七四、一〇八	四三、四三五	一三三、三三〇	四七、七〇三	二八〇、二二六	三二、三七二
露領亞細亞	一、七四四	四三四	三三〇	六〇	一一八	二六
内地	一七九、〇八八	五〇九	五九七、八七二	九八、五八八	一一三、二六八	七〇八
計	三二四、九四〇	四四、三七八	八三二、五二二	一四六、三五一	三九二、五六〇	一一三、一〇六

〔朝鮮總督府調査〕

前表ニ依レバ數量價額共漸増シ來リ大正十一年ニハ數量百三十九萬貫ニ餘リ其ノ價額二十一萬圓ヲ超ユ。而モ其ノ増加ノ勢ハ極メテ迅速ニシテ大正九年ノ三十一萬貫ニ對シ十年ハ約五十二萬貫ヲ増シ十一年ハ更ニ之ヨリ約五十六萬貫ヲ増加シ九年ニ比スレバ約百八萬貫即チ約三十五割ノ増産ヲ示セリ。其ノ仕向地ノ主ナルモノハ内地及支那ニシテ十一年ニ於ケル内地ヘノ發送數量ハ百一十一萬貫即チ沖繩縣大阪府香川縣等ノ生産量ニ匹敵シ支那ハノ輸出量亦急激ナル勢ヲ以テ増加シ十一年ノ數量二十八萬貫ニシテ九年ヨリ十一萬貫即チ約六割ヲ増加ス。是等ノ趨勢ヨリ觀レバ朝鮮木炭ノ生産モ同様著シキ發展ヲナシツ、アル

ヲ想像スルニ難カラズ。

(ロ) 根炭

朝鮮ニ於テハ白炭及黒炭ノ外根炭ト稱シ木ノ根ヲ炭化セシメタル一種ノ木炭ヲ生産ス。此ノ木炭ハ未ダ内地ニ移入セラレザルヲ以テ周知セラレズト雖モ其ノ價格比較的低廉ニシテ支那炭ヨリ二三割安ク品質又優良ナルヲ以テ之ヲ内地ニ移入スルトキハ優ニ支那炭ト競争スルコトヲ得ベシ。唯其ノ生産量大チラザルヲ憾トスルノミ。根炭ノ大正十二年十二月京城ニ於ケル値段段ハ十貫ニ付二圓七十錢ナリ。

第五節 支那木炭輸入ト本邦木炭

一、支那炭輸入狀勢

支那ヨリ本邦ヘノ木炭ノ輸入額ハ農商務省調査ニ依レバ大正七年ニ一萬二千貫ナリシモノ同十年ニハ九十三萬四千貫同十一年ニ至リテハ二百三十一萬五千貫ニ昇リ僅々數年間ニ極メテ急激ナル増加ヲ見タリ。仕出地ハ浙江省温州府ヲ主トシ南部ノ各港ヨリ我が門司大阪神戸四日市名古屋横濱等ノ諸港ニ向ケ發送セラル。其ノ品質ハ極メテ優良ニシテ燃焼時間長ク聲價次第ニ高ク内地ノ木炭市場ニ於テモ大ニ注目セラル、ニ至レリ。大正十二年九月關東大震災ニ會シ政府ガ物資供給ノ缺乏ヲ補ヒ被害地住民ノ生活ヲ安定セシムル爲メ生活必需品土木建築用器具機械及材料等ノ輸入税ニ減免ヲ行ヒタル際、支那炭モ正味五貫入一

依ニ付十七錢乃至二十五錢ノ關稅（木炭ノ輸入稅ハ從價稅ナリ）ヲ免ル、ヲ得タリ。當時鐵道、船舶等ニ由ル輸送圓滑ヲ缺キ延イテ内地ノ炭價暴騰ノ折柄トテ一時支那木炭ハ大イニ内地市場ヲ蠶食セリ。然レドモ大正十三年三月輸入關稅ノ復活セラル、ヤ其ノ輸入ハ頓挫ヲ來スニ至レリ。木炭ノ生産量ハ大正七八年頃ニ比シ近時ハ其ノ増加抄々シカラザルニ、一方之ニ對スル需要ハ次第ニ増加シ聊カ供給ノ不足ヲ訴フルニ至リタルヲ以テ將來ハ支那ヨリノ輸入ニ依リ補充セザルベカラザルニ至ルベキカ。加之、大正七年頃本邦ニ輸入セラレタル支那木炭ハ上海經由ノモノニシテ品質粗惡、荷造不完全ニシテ到底本邦ノ製品ニ及ブベクモアラザリシガ最近ノ輸入炭ハ所謂温州炭ニシテ前述ノ如ク品質極メテ優良ナルノミナラズ價格モ比較的低廉ナルヲ以テ内地炭ト競争シテ何等遜色ナク燃焼時間ノ長キ特徴ハ家庭用トシテ大歡迎ヲ受ケ名聲噴々タルモノアリ。サレバ支那木炭ノ輸入ヲ計畫スルモノ現ハレタルガ京濱ノ有力ナル木炭問屋十二店ノ組織シタル温州木炭輸入組合ハ其ノ最タルモノニシテ三井物産ガ生産者ト契約シ三千噸級ノ船舶ニ依リ横濱又ハ芝浦ニ荷揚グスル温州炭販賣ヲ一手ニ引受ケツ、アリ。

二、支那温州ニ於ケル木炭生産事情

大正十三年六月六日附、在杭州帝國副領事ヨリノ報告ニ依レバ温州地方ヨリ本邦ニ輸出セラル、木炭ノ數量ハ左ノ如シ。

年次	數量
大正九年	七五六、六〇〇
十年	一、五九四、七五二
十一年	二、一五六、八二四

上表ニ見ルガ如ク支那温州ニ於ケル木炭ノ本邦ヘノ輸出額ハ近來顯著ナル趨勢ヲ示シ從テ其ノ製炭業ハ旺盛ヲ極ムルニ至レリ。即チ前ニ述べタルガ如ク品質ノ優良ナルト價格ノ比較的低廉ナルトハ本邦ニ於ケル需要ノ増加ヲ來シ、支那木炭輸入ニ從事スルモノ増加シ產地温州地方ニ於テハ炭價ノ暴騰ニ因リ巨利ヲ博スルモノ多キヲ加ヘタリ。斯クテ温州ノ地方民ハ目前ノ利ニ眩惑シテ將來ノ計ヲ爲サズ山林ヲ濫伐スルニ至リタルヲ以テ之ニ因ル洪水旱魃等ノ災害ヲ憂ヘ製炭ニ反對スルモノ續出シ、製炭禁止ニ關スル請願書ヲ同地省長ニ提出シタリトイフ。此ノ副領事ノ近報ニ依リテ觀レバ我國ヘノ木炭輸出力同地方ニ及ボシタル影響ノ大ナルヲ窺フニ足ルベク、一方支那温州炭ノ本邦ニ歡迎セラレツ、アル事情ヲモ推知シ得ベシ。

### 第六節 驛附近ニ於ケル木炭倉庫

本節ニ掲グル統計表ハ各鐵道局ノ調査ニ係リ管内主要木炭取扱驛ニ乃至四ニ就キ驛附近所在ノ木炭倉庫棟數、收容能力、貯藏量等ヲ擧ゲタリ。

#### 一、東京鐵道局管内

左表ノ示スガ如ク新宿驛附近ニ於ケル木炭倉庫ハ其ノ收容能力極メテ大ニシテ秋葉原驛

附近同倉庫ノ收容能力五千三百噸ニ比シ更ニ大ナルヲ見ル。此等倉庫ノ大部分ハ各薪炭問屋ニ屬シ將來尙増設ノ見込アリト謂ヘバ其ノ收容能力又從テ増大スベシ。

木炭倉庫數並貯藏量

種別	年別	棟數	收容能力	貯藏量	
				上半期末	下半期末
秋	十三年	六	五,三六〇	五,二八〇	五,二五〇
	十二年	"	"	五,三〇〇	五,〇六一
	十一年	"	"	五,二七〇	五,〇六一
	十年	"	"	五,二五〇	四,二〇〇
	九年	"	"	四,八七五	三,六〇〇
	八年	"	"	四,六〇〇	三,〇〇〇
	七年	"	"	四,四〇〇	三,四〇〇
	六年	"	"	四,四〇〇	三,〇〇〇
	五年	"	"	四,八〇〇	三,六〇〇
	四年	"	"	四,六〇〇	三,〇〇〇
	三年	"	"	二,八〇〇	二,〇〇〇
	二年	"	"	二,〇〇〇	一,〇〇〇
	一年	"	"	一,〇〇〇	一,〇〇〇

種別	年別	棟數	收容能力	貯藏量	
				上半期末	下半期末
黑	十三年	三	三,一〇〇	一,七〇〇	一,四〇〇
	十二年	"	"	"	一,〇〇〇
	十一年	"	"	"	一,〇〇〇
	十年	"	"	"	一,〇〇〇
	九年	三	三,〇〇〇	一,八五〇	一,四〇〇
	八年	"	"	"	一,七五〇
	七年	"	"	"	一,七五〇
	六年	"	"	"	一,六五〇
	五年	"	"	"	"
	四年	"	"	"	"
	三年	"	"	"	"
	二年	"	"	"	"
	一年	"	"	"	"

種別	年別	棟數	收容能力	貯藏量	
				上半期末	下半期末
市	十三年	"	"	一,〇五〇	九〇〇
	十二年	"	"	一,二七〇	九〇〇
	十一年	"	"	一,〇四〇	一,一五〇
	十年	二	二,二四〇	一,二七〇	一,一五〇
	九年	三	二,三四〇	一,三六〇	一,一五〇
	八年	四	二,九四〇	一,四〇〇	一,一五〇
	七年	"	"	一,三六〇	一,一五〇
	六年	"	"	一,二〇〇	一,〇六〇
	五年	"	"	一,一〇〇	一,〇六〇
	四年	"	"	一,一〇〇	一,〇六〇
	三年	"	"	一,一〇〇	一,〇六〇
	二年	"	"	一,一〇〇	一,〇六〇
	一年	"	"	一,一〇〇	一,〇六〇

種別	年別	棟數	收容能力	貯藏量	
				上半期末	下半期末
宿	十三年	四	四,〇〇〇	四,〇〇〇	四,〇〇〇
	十二年	"	"	"	"
	十一年	"	"	"	"
	十年	"	"	"	"
	九年	"	"	"	"
	八年	"	"	"	"
	七年	"	"	"	"
	六年	"	"	"	"
	五年	"	"	"	"
	四年	"	"	"	"
	三年	"	"	"	"
	二年	"	"	"	"
	一年	"	"	"	"

二、名古屋鐵道局管内

八王子ニ於テハ倉庫業者アルモ木炭ノ取扱ヲ爲シタルコトナク直接荷主ノ店舗ニ搬入シ又名古屋モ同様ノ事情ヲ有スルヲ以テ單ニ今庄、七尾港ニ就キ其ノ數字ヲ擧ゲタレドモ此等驛附近ニ於ケル倉庫ハ其ノ數極メテ少ナク、收容能力モ亦小ナリ。

今庄驛附近ニ於ケル木炭倉庫數並貯藏量

種別	年別	倉庫業者數	倉庫ノ坪數	上半期末貯藏量	下半期末貯藏量
四年	三三七	三三七	三三七	三三七	
五年	三三七	三三七	三三七	三三七	
六年	三三七	三三七	三三七	三三七	
七年	三三七	三三七	三三七	三三七	
八年	三三七	三三七	三三七	三三七	
九年	三三七	三三七	三三七	三三七	
十年	三三七	三三七	三三七	三三七	
十一年	三三七	三三七	三三七	三三七	
十二年	三三七	三三七	三三七	三三七	

七尾港驛附近ニ於ケル木炭倉庫數並貯藏量

種別	年別		倉庫業者數	倉庫ノ坪數	上半期末貯藏量	下半期末貯藏量
	大正三年	四年				
倉庫業者數	坪	坪	坪	坪	坪	坪
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一

三、神戶鐵道局管内

管内木炭倉庫數最モ多キハ二條驛ニシテ其ノ數四十五、收容能力六千噸之レニ亞グハ石見江津驛ノ二十一棟、三千噸ナリ。

木炭倉庫數貯藏量 並自大正三年 至最近 上半年末現在

種別	倉庫總坪數	倉庫總力	自至大正三年		最近
			上半年末	下半年末	
倉庫業者數	坪	坪	坪	坪	坪
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一

四、門司鐵道局管内

本管内ニ於テハ人吉ノ木炭倉庫ヲ除キ他ハ何レモ其ノ規模大ナラズ詳細次ノ如シ。

木炭倉庫數並貯藏量

摘要	上下半年末貯藏量					
	六年	七年	八年	九年	十年	十一年
木炭專用倉庫ニハア ラザレドモ大部分木 炭ニ使用ス	坪	坪	坪	坪	坪	坪
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一

川	戸	八	驛別
大正三年 四年 五年 六年	十二年 十一年 十年 九年 八年 七年 六年 五年 四年	大正三年 四年 五年 六年 七年 八年 九年 十年 十一年 十二年	期別
上下上下上下	上下上下上下上下上下上下上下上下	上下上下上下上下上下上下上下上下	別
五	六六六六六六五四四四二一一一 八八八八八八四四九四二〇〇八三〇四一	六六六六六六五四四四二一一一 八八八八八八四四九四二〇〇八三〇四一	棟数
一九〇	八八八八八八四四九四二〇〇八三〇四一 五五五五五五二七四二〇〇八一六四二二 五五五五五五二七四二〇〇八一六四二二	八八八八八八四四九四二〇〇八三〇四一 五五五五五五二七四二〇〇八一六四二二 五五五五五五二七四二〇〇八一六四二二	坪数
三八〇	〇〇〇〇〇〇八六六五五二一一一 五五五五五五九〇二一八一九三三八四 六六六六六六七三八五九一四〇三八四七 三三三三三三二七六四八〇六五二八四四	〇〇〇〇〇〇八六六五五二一一一 五五五五五五九〇二一八一九三三八四 六六六六六六七三八五九一四〇三八四七 三三三三三三二七六四八〇六五二八四四	倉庫 收容能力
二八五	六三五二五二五二二二二二二二二 七一八一八六三〇六五一四一九三六四 九六八一〇四八八五七一四〇八三七四七 〇八一二九〇三一一六九三九二二七四四	六三五二五二五二二二二二二二二 七一八一八六三〇六五一四一九三六四 九六八一〇四八八五七一四〇八三七四七 〇八一二九〇三一一六九三九二二七四四	實際貯藏量
		大正三年中倉庫ナシ	記
		大正六年十月開業ニ付六年上半期前ノモノハ調査セス	事

七七

五、仙臺鐵道局管内  
管内ハ岩手、福島等木炭ノ主要生産地ヲ含ムヲ以テ其ノ倉庫數又多ク、ハノ戸ノ木炭倉庫ハ其ノ數六十八、收容能力一萬五百六十三噸ニ及ビ我國有數ソ木炭倉庫所在地ナリ。

木炭倉庫數並貯藏量

驛名	棟数及坪数	年別	上半期末	下半期末	上半期末	下半期末	上半期末	下半期末	上半期末	下半期末	上半期末	下半期末
人	四六棟	三	一七、一三三	二二、七〇七	一、八七五	一、二五〇	三、二五〇	一、二五〇	不	二五、七〇〇	一、二四四	二、〇一四
吉	一、三〇〇坪	四	二二、六九七	二二、七九六	一、二五〇	一、七五〇	三、二五〇	一、二五〇	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七
飯	一五棟	五	二四、一二九	二二、四六三	七、三二五	一、七五〇	一、七五〇	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四
野	七三坪	六	二一、三〇七	二二、六二九	六、一五〇	一、八七五	一、八七五	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四
熊	一三棟	七	二六、四三九	二六、九八二	六、一五〇	一、八七五	一、八七五	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四
本	五六五坪	八	二五、七八九	二七、二九三	六、一五〇	一、八七五	一、八七五	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四
八	四棟	九	二六、四九三	三一、三四四	六、一五〇	一、八七五	一、八七五	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四
幡	一〇〇坪	一〇	二六、四九三	三一、三四四	六、一五〇	一、八七五	一、八七五	不	二五、七〇〇	九二八	一、五〇七	一、二四四

七六





計	松	木	樟	醋	造	松	蔓	竹	松
		タ		酸	林				
		!		石	用				
					種				
	脂	ル	葉	灰	子	煙	莖	皮	茸
	斤	斤	斤	斤	斤	貫	斤		
	一〇二、五三七	八三六	二、九一八、二一六	一三三、八七一	四一〇、五九九		五、九六一、三二二	一、二二五、六七九	
									二、九二一、六四九
									六二九、七五二
									三二二、〇八一
									二二四、〇三七
									一三五、六〇四
									六〇、三三一
									五一、〇八二
									一九、六三〇
									一八、〇九二
	四〇〇、一七一、五三三								

〔農商務省調査〕

前表ニ依レバ本邦ニ於ケル林野産物中最モ重要ナルハ用材木炭及薪炭材ノ三ニシテ之等ハ其ノ數量並價格ニ於テ巔然頭角ヲ現セリ。數量ニ就テハ單位各々異リ換算スルコト能ハザルモノアルヲ以テ全部ニ就テハ之ヲ知ルコト能ハズト雖モ例ヘバ用材ハ五石一噸トシテ約八百九萬七千八百八十二噸木炭ハ二百七十貫一噸トシテ約百七十一萬三千二百二十一噸薪炭材ハ一棚百立方尺一噸トシテ計算スレバ二千二百十三萬五百七十三噸トナル。其ノ他ノ林野産物中斤單位ニテ數量最モ大ナル柴草ハ一噸千七百斤トシテ換算スレバ約四十五萬三千七十七噸トナリ之ヲ前記ノ三者ニ比スレバ及バザルコト遠ク又之レヲ價格上ヨリ觀レバ

用材木炭及薪炭材ノ各九千萬圓ヲ超ユルニ對シ柴草ハ千六百萬圓其ノ他ノモノニ至リテハ何レモ千萬圓未滿ニシテ到底前記三種ニ比籌スベクモアラズ。  
木炭ハ前述セルガ如ク其ノ數量ニ於テハ用材及薪炭材ニ劣リ第三位ニ在レドモ價格ニ於テハ一億一千萬圓ニ達シ用材ノ一億四千八百萬圓ニ亞ギテ第二位ヲ占メ本邦林野産物總價格四億圓ノ約四分ノ一ニ相當ス。

### 第三章 消費

#### 第一節 本邦木炭消費量

木炭ハ本邦ニ於テハ古來探暖、厨房等ノ家庭用トシテ汎ク一般ニ使用セラレ、石炭、瓦斯、石油、電氣等ノ未ダ發見セラレザル以前ニ於テハ薪ト共ニ唯一不可缺ノ家庭の燃料トシテ日常生活ニ密接ナル干繫ヲ有セシモノニシテ最近之等文化的燃料ノ漸ク我が家庭ニ入ルニ及ンデモ尙木炭ノ需要ハ更ニ減少セズ其ノ生産量ノ如キハ年次増加シツ、アルハ既ニ生産ノ部ニ説ケルガ如シ。之レ燃料トシテノ木炭ガ我が家庭ノ構造、慣習其ノ他相關聯シテ獨特ノ特色ヲ有スルニ外ナラザルベシ。然レドモ之ガ消費數量ニ關シテハ未ダ統計ノ見ルベキモノナク、唯僅カニ帝國森林會ノ調査ニ係ル大正八年ノ數字ヲ舉ゲ得ルニ過ギス。即チ左表ノ如シ。

大正八年消費量	一人當
一〇二八、七五六、二六八	一七・九

(帝國森林會調查)

右ニ依レバ大正八年ニ於ケル一ケ年間ノ本邦木炭消費量ハ十億二千八百萬貫即チ五貫俵約二億五百萬俵ニ當リ、一日約五十六萬俵ニ當ル。又一ケ年間一人當消費量ハ十七貫九百匁五貫俵約三俵半ニ相當ス。

(北海道廳並農商務省調査ニ依ル大正八年木炭生産量ハ四億九千三百萬貫ニシテ帝國森林會調査ニ係ル同年消費量ハ上記ノ如ク十億二千八百萬貫ニ及ビ其ノ差五億三千五百萬貫ノ大量ナリ。生産量ト消費量トノ間ニ斯ノ如キ著シキ差異アルハ各調査方法ノ異ルニ因ルベケレドモ同年國有鐵道ニ於ケル木炭輸送數量百二十萬噸即チ約三億萬貫ヨリ推セバ鐵道ヲ介セザル農村消費量ノ甚ダ多大ナル木炭ノ生産量四億九千萬貫ハ聊カ尠ナキニ失スルノ疑アリ。何レニスルモ木炭ニ關シテハ調査資料ニ乏シク其ノ真相ヲ促フルコト困難ナルモ農商務省ノ調査ハ累年發表ナルヲ以テ其ノ生産數字ヲ大正八年中ニ於ケル森林會調査ノ木炭消費量ト相對照スレバ此ノ間又何物カ得ルモノアルベキヲ信ズ。其ノ實際ノ果シテ何レガ眞ナルヤハ今後ノ研究ニ委セントス。)

### 第二節 府縣用途別木炭消費量

本邦ニ於ケル木炭ノ府縣別消費量ヲ知ランガ爲メ森林會調査ニ依リ大正八年ニ就キ之ヲ見ルニ次表ノ如シ。

府縣別木炭消費量及一人當消費量 (單位 貫)

(帝國森林會調査)

道府縣	人口 (千人)	家庭用	産業用	公共設備用	計	計ニ對スル一人當	家庭用ニ對スル一人當
東 京	三、六五五	六九、六〇、二六六	一〇、〇三九、三〇〇	八、三三八、一七一	八八、〇七、七七七	二四・二	一九・〇
北 海 道	二、三五九	四八、四四〇、八〇〇	一八、五六六、四七〇	六、一七三、九七〇	七三、一七〇、二四〇	三〇・〇	二〇・五
福 岡	二、一六一	四二、六三三、九〇七	一五、〇四七、九八一	四、九七五、三三三	六二、五九七、一七〇	二九・〇	一九・七
大 阪	二、五八八	三九、三三三、五七一	六、五五四、四〇〇	五、九四四、四三三	五二、六七一、四〇三	二〇・〇	一五・二
神 奈 川	一、三六〇	四二、九六六、九七九	四、八五二、二六五	三、一〇二、八六〇	四九、九三二、一〇四	三六・七	三〇・九
福 島	一、三三三	一九、四四〇、九七七	二〇、六三三、五三四	一、九九五、三三四	四二、〇六八、八七一	三〇・七	一四・二
兵 庫	二、三三三	一五、九四四、六四六	五、九三三、三六六	三、〇七三、六三〇	二四、九五一、六四二	一〇・七	一一・二
愛 知	二、一四四	一九、八二〇、八六七	二、三三六、九〇〇	一、九二〇、八六〇	二四、〇六〇、六二七	一五・九	九・二
長 野	一、五六三	二〇、三四四、九六一	七、五七三、〇八三	三、五五五、九八五	三二、四七三、〇三九	二〇・一	一三・〇
京 都	一、二九六	二二、〇四五、八一九	六、〇二二、〇八五	一、六四四、七八	二八、七二二、六三三	二二・二	一六・二
靜 岡	一、五九七	一三、六五五、五三三	一、五〇一、〇三三	二、二六、九七〇	一五、四二三、五三三	一五・九	八・五
山 形	一、〇〇四	一四、四四六、六五七	七、五八六、七三六	二、一〇〇、八九一	二四、〇六六、二八四	二四・〇	一四・四
群 馬	一、〇九四	一六、三四四、八七三	三、九七〇、八六五	一、五〇三、三三〇	二二、八一八、〇六八	一九・九	一四・九
熊 本	一、二九一	九、八八六、一〇八	一〇、一六六、二四〇	一、五四一、五七三	二一、一八八、九二二	一六・七	七・七
岐 阜	一、二一九	一六、一九〇、〇九九	四、一九九、〇九五	八〇五、四六一	二一、一九九、六五五	一八・九	一四・五
廣 島	一、五九五	一一、八八、九三二	五、四三二、六四五	三、六三九、〇五四	二〇、八九、六〇〇	一三・二	七・四

山	富	岡	長	石	三	滋	山	千	鹿	島	大	岩	茨	栃	宮	愛	新	青	秋	香	埼
梨	山	山	崎	川	重	賀	口	葉	島	根	分	手	城	木	城	媛	湯	森	田	川	玉
六三	八〇	一、二七〇	一、三三四	七九	一、二〇〇	七〇四	一、二二三	一、一三三	一、三六六	一、四六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六	一、三六六
五、二六九、四〇一	六、一三八、一〇四	九、三三三、〇〇八	八、五三三、九〇〇	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	六、六九九、三三三	八、五九九、二七七	六、六九九、三三三	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五	九、一〇〇、〇五五
三、七四六、六四〇	四、一五六、九三三	一、四六〇、五五二	三、二九四、八四六	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	五、四三三、二四六	四、二〇一、七二二	五、四三三、二四六	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇	二、三八一、〇八〇
五九〇、六四六	七〇五、六六六	八八〇、一三三	七〇二、六七七	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、三三三、〇三七	一、三三三、〇三七	一、三三三、〇三七	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八	一、二六六、三四八
九、六〇六、四〇八	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五	一、一〇〇、六五五
一五・一	一三・八	九・一	六・九	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七
八・三	七・八	七・三	六・九	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七	一・七

上表ニ依ルニ消費量ノ最モ多キハ東京ニシテ八千八百萬貫ヲ數ヘ、之ニ亞グハ北海道ノ七千三百萬、福岡ノ六千二百萬貫等ニシテ沖繩ノ三百八十五萬、徳島ノ五百七十九萬貫等最モ少シ。用途別ニ之ヲ見ルニ家庭用ハ全消費ノ約七割ヲ占メ、其ノ中東京ハ六千九百萬貫ニシテ府縣中ノ首位ヲ占ム、北海道、福岡之ニ次ギ沖繩、宮崎最モ少シ。産業用ヲ見ルニ其ノ數量ハ二億六千八百萬貫ニシテ全消費ノ約二割六分ニ當リ、其ノ中福島ハ養蠶、纖維工業用トシテ二千萬貫ヲ費消シテ消費ノ第一位ニ居リ、之ニ亞グハ北海道ノ化學工業用ニシテ千八百萬、福岡ノ

沖	徳	和	宮	高	佐	奈	鳥	福
繩	島	山	崎	知	賀	良	取	井
五、六五	七、四一	七、九一	五、七〇	七、二五	六、八三	五、五五	四、四四	五、九七
一、六八七、五五二	四、九七七、〇五七	三、三三四、〇八一	二、八八九、四〇〇	四、七八八、九四四	五、八三三、八九九	三、三三三、五五元	五、六四一、三三五	五、四六七、〇九元
九〇〇、一三三	五、七、四六六	二、三八二、五五二	二、八七二、〇八一	三、三三四、大七七	二、二七、五五五	二、九八六、五〇四	三、〇三二、五六一	三、三三四、七六六
一、二四、三四九	三、八、三四	三、四七、三三六	三、五五、六七九	三、三三、九三三	四、七〇、三三七	二、七九、二〇二	八、九、七八〇	八、七、九四九
三、八五〇、〇〇四	五、七九二、八四二	五、九六三、九六〇	六、一七、二五二	八、二五七、七四四	八、二五七、七四四	八、四二、七二二	九、〇八八、三三四	九、五六九、七五四
六・八	七・八	七・五	一〇・七	一一・五	一一・三	一六・一	二・四	一六・〇
三・〇	六・七	四・一	五・一	六・七	八・五	五・九	一一・七	九・二

釀造業其ノ他工業用トシテ千五百萬貫東京ノ一千萬貫（多クハ製菓其ノ他ノ雜工業）ハ第八位ニ在リ。需要ノ最少ナルハ徳島沖繩ノ諸縣ニシテ農林其ノ他雜業ニ供セララル、モノアルニ過ギス。公共設備用ハ八千一百五十九萬貫ソノ量ハ尙東京ノ全消費量ニ及バズ。其ノ中東京最モ多ク北海道大阪之ニ亞ギ靜岡徳島ノ諸縣最モ少ナシ。

木炭ノ一人當リ平均消費量ハ前述ノ如ク十七貫九百匁ナルガ是ヲ府縣別ニ從ヘバ神奈川北海道福島最モ多ク何レモ三十貫ヲ超ヘ、就中神奈川ノ如キハ平均消費量ノ二倍ヲ超ユ。其ノ他平均消費量ヲ超ユルモノハ福岡東京ヲ首メ三府十二縣ニ及ビ、東北炭ノ產地トシテ知ラ、岩手縣ニ於テ其ノ消費量ハ正ニ平均消費量ト一致セリ。之ニ反シテ一人當リ消費量ノ最モ少ナキハ沖繩ノ六貫八百和歌山ノ七貫五百匁ナリ。家庭用ニ對スル一人當リモ略々以上ト相似タリ。

彌ツテ府縣ト木炭消費ノ關係ヲ大觀スルニ二三ノ例外ヲ除キテ其ノ消費量ハ概シテ府縣文化ノ消長ト並行シ、之ニ依リ能ク縣勢ノ一斑ヲ窺知シ得ベシ。即チ東京ヲ首メトシ大阪神奈川兵庫愛知京都ノ所謂六大都市所在府縣ハ大消費地トシテ何レモ十指ノ中ニ居リ、又彼ノ福岡ノ第三位ニアル等ハ木炭ガ都會地若クハ工業地ニ於テ、如何ニ使用ノ盛ナルカヲ示スニ足ル。

### 第三節 炭種別消費數量

森林會調査ヲ基礎トシ木炭ノ用途ニ就キ炭種別數量ヲ見レバ次ノ如シ。

#### 一、家庭用

採暖、厨房等家庭用ニ供セララル、木炭ハ六億七千八百萬貫ニシテ消費總量ノ六割六分ニ當リ、其ノ白炭炭種別需要ハ白炭稍々勝リ黒炭ノ二億八千萬貫ニ對シテ三億九千萬貫約五割八分ニ當レリ。一人當リハ白炭六貫八百ニシテ黒炭ハ四貫九百ナリ。即チ左表ノ如シ。

家庭用木炭消費量

炭種	消費量	一人當
白炭	三九四、〇四八、七九二 <small>貫</small>	六・八七四 <small>貫</small>
黒炭	二八四、三四五、八四四	四・九五九
計	六七八、三九四、六三六	一一・八三三

#### 二、産業用

産業用トシテ消費セララル、數量ハ總消費量ノ約二割六分、即チ二億六千八百萬貫ニシテ其ノ中白炭ハ一億二千九百萬貫、黒炭ハ是ヨリモ稍々多ク一億三千九百萬貫ナリ。産業別ニ之ヲ觀ルニ工業用ニ充テラル、モノ最モ多ク産業用中ノ約四割、一億六百萬貫、金屬工業三千萬、菓子豆腐等ノ雜工業三千一百萬、纖維工業一千六百萬、化學工業一千二百萬、釀造業一千萬及ビ鑛業木工業其ノ他工業ニ約四百萬貫之ニ亞イテハ旅館、飲食店等ノ雜業用トシテノ七千五百

八八

萬貫養蠶、製茶、椎茸等農林業用ニ供セラル、七千二百萬貫等ナリ。尙、此ノ外少量ハ商業、鑛業、水産業用ニ供セラル。其ノ炭種ハ鑛業、農林業、窯業方面ニハ主トシテ白炭ヲ用ヒ、金屬工等、醸造業ニハ黒炭ヲ用フ。一人當リハ四貫六百ニシテ之ヲ種別ニ觀レバ白炭二貫二百、黒炭二貫四百、勿産業別ニ觀レバ工業一貫八百、雜業一貫三百、農林業一貫二百、勿他ハ何レモ一貫、勿ニ充タズ。詳細次表ノ如シ。

産業用木炭消費量（單位 貫）

産業別	炭種		計	總計ニ對スル割合	一人當
	白炭	黒炭			
農林業	四〇、〇七三、五六六	三三、三六、四五二	七二、三九〇、〇三八	〇・二六九	一・二六三
水産業	一、四三三、七六八	一、〇四一、四〇二	二、四七五、一七〇	〇・〇〇八	三・八
鑛業	三、四五二、八四四	五八八、〇七九	四、〇四〇、九二三	〇・〇二五	七・〇
窯業	一、一四一、二二二	一、七二、四八六	二、八六三、七〇八	〇・〇〇五	三・三
醸造業	二、〇七三、三五五	八、一五二、〇三三	一〇、二二五、三八八	〇・〇三八	一・九
化學工業	六、七九五、四三三	五、五九二、三九七	一二、三四七、八三〇	〇・〇四六	二・六
織維工業	八、三〇二、二八八	八、四三三、二六八	一六、七三五、五五六	〇・〇六二	二・九
金屬工業	五、七二二、〇八一	二四、八九九、四三七	三〇、六二一、四五八	〇・〇二四	五・三
木工業	一、六七、四九一	一、四四六、七八〇	三、一二四、二七一	〇・〇一一	五・五
雜工業	二、三三五、九四〇	一〇、三五二、五七〇	一二、六八八、五一〇	〇・〇一八	五・二
其他工業	三三三、〇四八	一八四、五二一	五一七、五六九	〇・〇〇二	二・二
小計	四七、三〇二、六八七	五九、三二一、四七三	一〇六、六二四、一五九	〇・三九七	一・八〇

商工業	雜業	總計	總計ニ對スル割合	一人當
五、一七五、五六六	三、三六、〇三六	八、五三二、五五二	〇・〇三二	一・四九
三三、二六三、八四四	四二、七六、一五二	七五、〇〇〇、〇三六	〇・二七九	一・三三八
二九、四三三、二九五	三九、三三三、五二二	六八、七六六、七七七	一・〇〇〇	四・六八
〇・四八二	〇・五三八	一・〇〇〇		
二、二五六	二、四三〇	四、六八六		

（註）人口 五七、三三三、二千人

三、公共設備用

公共設備用トシテ算ヘラル、モノハ八千一百萬貫ツノ中白炭ハ四千萬貫、黒炭ハ四千一百萬貫ナリ。之ヲ用途別ニ觀レバ官公署用三千萬貫、學校用二千四百萬貫、社寺教會用一千一百萬貫等ハ主ナルモノニシテ、此ノ外病院、軍隊等三四ノ方面ニ用ヒラル、モノアレドモ其ノ量ハ一千五百萬貫ニ過ギズ、病院、寄宿舎等ハ主ニ白炭ヲ用ヒ、學校、火葬場等ハ黒炭ヲ用フ。即チ左表ノ如シ。

公共設備用木炭消費量（單位 貫）

用途種別	炭種		計
	白炭	黒炭	
學校用	九、五三七、三六六	一四、七三三、九七五	二四、二七一、三四一
官公署用	一四、七九六、〇〇〇	一五、八二四、〇〇〇	三〇、六二〇、〇〇〇
軍隊用	一、六八四、〇〇〇	一、七七六、〇〇〇	三、四六〇、〇〇〇

社寺教會用	六、七一一、〇〇〇	五、〇五六、〇〇〇	一一、七六七、〇〇〇
病院用	三、一五四、〇〇〇	一、五六五、〇〇〇	四、七一九、〇〇〇
寄宿舎用	一、五六六、四九一	八九四、三九五	二、四六〇、八八六
火葬場用	五四、八〇八	五二六、一〇二	五八〇、九一〇
其他用	二、六三二、七三一	一、〇八五、八八七	三、七一九、六一八
計	四〇、一三六、三九六	四一、四六一、三五九	八一、五九七、七五五

以上ノ各炭種用途ヲ一括シ見ルニ木炭消費量ハ左表ノ如シ。  
木炭消費量總括表（單位 貫）

用途	炭種		計
	白炭	黒炭	
家庭用	三九四、〇四八、七九二	二八四、三四五、八四四	六七八、三九四、六三六
産業用	一二九、四三二、二九五	一三九、三三一、五八二	二六八、七六三、八七七
公共設備用	四〇、一三六、三九六	四一、四六一、三五九	八一、五九七、七五五
計	五六三、六一七、四八三	四六五、一三八、七八五	一、〇二八、七五六、二六八

### 第四節 六大都市ノ木炭入荷状態

需要ノ最大ナル都會地ニ於ケル木炭需給ノ關係ヲ知ランガタメ今、東京及大阪、京都、名古屋、神戸、横濱ノ六大都市ニ就キ木炭入荷ノ状態ヲ農商務省調査ニ觀ルニ左表ノ如シ。

六大市場ニ於ケル木炭入荷（單位 貫）

（大正十年現在）

市場名	品種	入荷高	産地別割合%	備考
東京市	白炭 黒炭 鍛冶炭	三二、〇〇〇、〇〇〇 四四、〇〇〇、〇〇〇 四〇、〇〇〇、〇〇〇	東北四三、北陸一六、關東一 二、其他一九 東北四五、關東三〇、其他五 關東七七、東北一〇、其他三	宮崎七貫五百、高知六貫、 大分七貫、和歌山二貫五百、 兵庫三貫五百、其他七貫三百、 支那炭五貫五百
大阪市	白炭 黒炭 支那炭	二六、六九一、五〇八 一、九八〇、〇〇〇 二八、六七一、五〇八	宮崎三〇、高知二〇、大分一五 和歌山二〇、兵庫一〇、其他五 上海六〇、滿洲四〇	
京都市	白炭 黒炭 鍛冶炭	七、四三六、六五〇 三、四三二、三〇〇 五七二、〇五〇	丹波三〇、九州及四國五五 其他一五	
神戸市	白炭 黒炭	一一、二八一、三六八 一七八、八二八 一一、四六〇、一九六	播磨一八、紀州一〇、但馬三 長州一〇、九州二四、因幡七、美作 五、石見五、備中三、其他八 攝津九〇、播磨六、阿波二、 其他二	播磨四貫、紀州二貫、但馬七貫、 長州八貫、九州八貫、因幡七貫、 美作七貫、石見七貫、備中七貫、 其他八貫、攝津五貫、播磨三貫、 阿波三貫、其他十貫
名古屋市	白炭 黒炭 松炭	二二、一七〇、九〇二 二、三三三、四〇九 四、一四六、四〇九 四、六七〇、七二二	三河四〇、日向五〇、山陰三 美濃五、其他一 紀州三、伊勢四、美濃七、若狭 三、支那八、北海道三、三河二 伊勢一〇〇	三河八貫、日向九貫、山陰七 貫、美濃七貫、他四貫、 紀州五貫、伊勢四貫、美濃八貫、 若狭五貫、支那五貫、四百貫、北海 道十貫五百、三河八貫、伊勢四貫

横濱市	白炭	一、五三二、〇〇〇	千葉四〇、靜岡二〇、甲州九
	黒炭	一〇、三七七、〇〇〇	州其他四〇、北陸五〇、山陰二〇、東北二
	鍛冶炭	五、〇〇〇	〇、其他一〇、千葉一〇
計		一一、九一四、〇〇〇	

(農商務省調査)

〔註〕 大阪神戸名古屋ノ三市ハ俵數ヲ以テ示セシヲ以テ備考欄ノ貫數ニ準據シ適宜算出セリ。

右表ニ現ル、ガ如ク都市入荷數量ハ概シテ其ノ市ノ人口ニ比例スルモ東京名古屋二市ノ數量ハ他ノ四都市ニ比シ一ハ餘リニ多ク、一ハ餘リニ少ナシ、即チ東京市ハ實ニ八千萬貫ノ入荷ヲ見、次位ニ居ル大阪ニ殆ンド三倍シ、六大都市中一頭地ヲ拔ケリ。過半ハ黒炭ニシテ白炭之ニ亞ギ鍛冶炭最モ少シ。鍛冶炭ヲ除キテハ多ク東北ヨリ供給セラル。大阪ハ二千八百萬貫ニシテ其ノ人口ニ對スル消費率ハ京都神戸横濱ノ三市ト略ト同數ヲ示ス。内地炭ノ供給ハ宮崎高知和歌山等市ヲ圍繞スル諸縣ヨリシ、ソノ輸送ハ多ク海路ニ由ル。京都神戸横濱ノ三市中最も入荷ノ多キハ横濱ノ一千一百九十一萬貫ナレドモ三市ハ殆ド大差ナク、大阪ノ大約三分ノ一ニ當ルノミ。京都神戸ハ兩者殆ンド伯仲セルモ神戸稍ト京都ニ勝レリ。横濱ト異リ神戸京都ノ近畿都市ノ用炭ハ主トシテ白炭ニシテ、之等ハ京都ノ白炭ヲ通ジテ主ニ宮崎ノ日向物ヲ採リ、又他方若狹、山陰物ノ入荷ニ俟ツノ外、神戸モソノ白炭ハ九州山陰、播磨、紀州

等略之ト同一地方ニ求メ、單リ黒炭ハ其ノ大半ヲ攝津ニ仰グ。横濱ハ黒炭約九割ヲ占メ、白炭炭別入荷率ハ神戸ト全ク相反ス。北陸ハ之ガ主タル供給地ニシテ千葉、靜岡ハ白炭ノ仕出地ナリ。名古屋ハ其ノ入荷量僅々四百六十七萬貫ヲ數フルニ過ギズ數量ニ疑問アルモ黒炭ハ二百三十五萬貫ニシテ、白炭ヨリ稍ト多ク伊勢松坂及紀州新宮一帯ハソノ主ナル仕出地ナリ。白炭ハ三河、日向ノ産ソノ大半ヲ占メ、此ノ外伊勢ヨリ少量松炭ノ入荷ヲ見ル。

東京市入荷量ヲ東京薪炭問屋組合ノ調査ニ係ル同年市消費量(後節参照)ト相對比スルニ八千萬貫ノ入荷ニ對シ消費量ハ八千四十七萬貫、ソノ量兩者相均衡ス、其ノ他ノ諸市ニ就テモ名古屋ハ別トシ入荷量ト消費量トハ大ナル徑庭ナキモノト觀テ大過ナカルベシ。東京、横濱及名古屋等概シテ本州東部ニ位スル地ニ於テハ白炭ヨリモ黒炭ノ使用多ク、之ニ反シ近畿ノ都市ニ於テハ白炭ノ使用、黒炭ニ勝ルヲ知ル。

### 第五節 東京市木炭消費量

(イ) 累年消費量

本邦ニ於ケル木炭ノ最大消費地タル東京市ノ最近五ヶ年ノ木炭消費量ハ東京薪炭問屋組合ノ調査ニ依ルニ次表ノ如シ。

最近五ヶ年木炭消費量(單位 貫)

(東京薪炭問屋同業組合調)



年次	年消費量	平均一ヶ月消費	平均一日消費	指数
大正七年	六六、七五〇、〇〇〇	五、五六二、五〇〇	一八五、四一七	一〇〇
八年	六八、六五〇、〇〇〇	五、七二〇、八三三	一九〇、六九四	一〇三
九年	七〇、二四〇、〇〇〇	五、八五三、三三三	一九五、一一一	一〇五
十年	八〇、四七〇、〇〇〇	六、六九七、五〇〇	二二三、二五〇	一二一
十一年	八六、三〇〇、〇〇〇	七、一九一、六七七	二八九、七三二	一五七
平均	七七、四八二、〇〇〇	六、二〇六、八三三	二〇六、八九四	一一七

指数ハ大正七年ヲ百トス。

上表ニ觀ルニ東京市木炭消費量ハ逐年遞増シ十年ニハ八千四百七十七萬貫、十一年ニハ八千六百三十萬貫ナリ。五ヶ年平均消費量ハ七千七百四十八萬貫ニシテ、之レニ超ユルモノハ十、十一ノ兩年ナルガ其ノ超過率ハ十年ニ於テ約四分、十一年ニ於テ約一割一分ナリ。

(ロ) 一日平均消費量

一日平均消費量ヲ觀ルニ大正七年ハ十八萬五千貫、十年ハ二十二萬三千貫、十一年ハ二十八萬九千貫、即チ大正七年ヲ一〇〇トセバ十年ハ一二二、十一年ハ一五七ノ數字ヲ示セリ。而シテ五ヶ年ヲ通ジテ東京市民一日ノ消費量ハ二十萬六千貫之ヲ五貫依ニ換算スルニ四千一百依ニ當レリ。

左ニ東京市調査ニ係ル大正十年ノ同市消費ノ木炭發送府縣別分布圖ヲ掲グ。(前節參照)

(ハ) 季節ト消費關係

次ニ大正十一年ノ東京市消費木炭ノ季節消費關係ヲ觀ルニ次表ノ如シ。

大正十一年中木炭各月消費量

(東京薪炭問屋同業組合調)

月次	各消費量	消費量日	依換算
一月	一〇、五〇〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
二月	一〇、二〇〇、〇〇〇	三四〇、〇〇〇	六八、〇〇〇
三月	八、三〇〇、〇〇〇	二七七、〇〇〇	五五、四〇〇
四月	六、八〇〇、〇〇〇	二二七、〇〇〇	四五、四〇〇
五月	五、七〇〇、〇〇〇	一九〇、〇〇〇	三八、〇〇〇
六月	五、〇〇〇、〇〇〇	一六七、〇〇〇	三三、四〇〇
七月	四、七〇〇、〇〇〇	一五七、〇〇〇	三一、四〇〇
八月	四、四〇〇、〇〇〇	一四七、〇〇〇	二九、四〇〇
九月	五、六〇〇、〇〇〇	一八七、〇〇〇	三七、四〇〇
十月	六、九〇〇、〇〇〇	二一三、〇〇〇	四六、〇〇〇
十一月	八、二〇〇、〇〇〇	二七三、〇〇〇	五四、六〇〇
十二月	一〇、〇〇〇、〇〇〇	三三三、〇〇〇	六六、六〇〇
計	八六、三〇〇、〇〇〇		

之ニ據レバ一年ヲ通ジテ需要ノ最大ナルハ嚴寒期タル十二、一月ノ交ニシテ其ノ量何レモ一千萬貫ヲ超ヘ、亞イデ三、四ト遞減シ、盛夏ノ七八月ニ至リテ需要最モ少ナク僅々四百五十萬貫内外ヲ維持スルニ過ギズ。九、十月ニ及ンデ需要亦遞増ス。尙一日當リ平均消費量ヲ觀ルニ一月、三十五萬貫、二月、三十四萬貫ニシテ八月ハ十四萬七千貫、十二月ハ二月ヨリ稍々少ク三十三萬三千貫ナリ。

### 第六節 木炭累年輸出入額

(イ) 木炭輸出狀況

本邦木炭ノ對外關係ヲ觀ルニ明治中期ニアリテハ香港、英領印度ヨリ遠ク北米方面ニ亘リテ販路ヲ有シ其ノ輸出額モ相當數ニ上リ當時ニ於ケル我對外貿易品中ニ多少ノ存在ヲ認メラレザリシニアラザリシモ爾來輸出漸次減少シ現在ニアリテハ僅カニ日本海支那海中心トスル支那關東州、露領亞細亞ニ多少ノ輸出ヲ見ルニ過ギズ。之ヲ表ニ觀ルニ即チ次ノ如シ。

主要仕向地別木炭累年輸出額

(單位 數量ハ千貫、價格ハ千圓)

年次	支那		關東州		露領亞細亞		其他諸國		總計	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
大正三年	一、五〇二、一一〇	一、〇五二、一〇八	二一九	三	二八三	一三三	二、八六五、二四四			

年次	支那		關東州		露領亞細亞		其他諸國		總計	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格	數量	價格
四十年	一、一九七	九五	一、〇六五	一一〇	九	一	一一二	一九	二、四九二	二二五
三十九年	一、七七二	一三三	七〇〇	七一	六	一	一一二	二二	二、七一一	二二九
三十八年	一、四三八	一七七	五二五	七二	五	一	一一二	二二	二、〇〇二	二六五
三十七年	一、五六〇	三一七	六二二	三九	七	二	一一五	二二	一、九三三	四九九
三十六年	一、〇五八	二八七	三六〇	一〇九	五	二	一一二	二二	一、四二六	三九九
三十五年	五三二	一五七	一二五	三九	四	三	一一二	二二	七〇二	二〇九
三十四年	一三三	四二	一〇九	三三	二	二	一一	二	五三五	一四六
三十三年	四九	一六	六一	二〇	二	一	一一	二	一九三	六一

〔備考〕別數量價格ノ端數ハ適宜取捨シテ總計ニ合セリ。

之ニ依レバ大正三年ヨリ十一年ニ至ル九ヶ年ヲ通ジテノ最大輸出數量ハ大正三年ノ二百八十六萬五千貫ニシテ、四年ニハ二百四十九萬貫、五年ニハ二百七十一萬貫トナリシモ其ノ他ハ殆ンド逐年漸減シ、十一年ニ至リテハ僅々十九萬貫ニ下レリ。價額ヨリセバ數量ニ於テ第四位ニアリシ大正七年首位ニ出デ、四十五萬九千圓ヲ算シ、翌八年ノ三十九萬九千圓之ニ亞ゲドモ六年ハソノ額二十六萬五千圓ニシテ前者ト相等ノ距離ヲ存ス。而シテ十一年ノ如キハ僅カニ六萬一千圓ヲ示セルニ過ギズ。

木炭ノ仕向地ハ既述ノ如ク近年ニアリテハ支那關東州、露領亞細亞等ヲ主トシ、就中支那ニ輸出セラル、モノハ最近迄全輸出數量ノ過半ヲ占メシガ、大正七年ノ百五十萬貫、價額三十一萬七千圓ヲ絶頂トシテ爾來減少シ、十年ニ及ンデハ露領亞細亞ニ及バザルニ至レリ。

(ロ) 木炭輸入状況

本邦ニ輸入セラル、木炭ハ其ノ大半支那炭ニシテ之ガ本邦市場ニ現ハレシハ大正七年ノ交ニ屬シ本邦木炭輸入ノ濫觴ヲ爲セリ。  
當時ニアリテハ其輸入量モ極メテ微々タルモノナリシガ近年内地木炭ノ品不足ト之ニ伴フ價格騰貴トニ因リ近時入荷急増シタリ。就中温州炭最モ多シ。温州ハ上海ヲ距ル約三百哩、本邦産ニ劣ラザル良炭ヲ出ス。此外杭州、漢口等ヨリ輸入スルモノアレドモ少量ナリ。  
農商務省ノ發表スル處ニヨレバ木炭輸入量ハ左表ノ如シト雖モ實際ハ大正九年ニモ相當ノ入荷アリ。

木炭輸入數量 (農商務省)

大正七年	一二、〇〇〇
〃〃十年	九三四、〇六八
〃〃十一年	二、三一五、六三五

第七節 推定木炭累年消費量

木炭ノ需要者ニ對スル關係ハ或ハ家庭用トシテ全國戸々ニ涉リ或ハ産業用トシテ多種ノ方面ニ利用セラル、等其ノ範圍頗ル廣汎ナルヲ以テ之ガ消費量ヲ適確ニ調査スルコトハ全ク困難ナリ。從テ今日信憑ニ足ル數字ヲ得ルコト難シ。

本章第一節ハ帝國森林會ノ調査ニ依リ本邦ニ於ケル木炭消費量ノ一斑ヲ示シタレドモ、其ノ需要ノ消長ニ至リテハ全ク調査ノ據ルベキモノナシ。依テ本調査ハ止ムナク農商務省調査ノ木炭累年生産量ニ準ジ森林會調査ノ消費量ト八年ニ於ケル生産量トヲ對比シテ其ノ割合ヲ求メ此ノ均一數ヲ各年生産量ニ乗ジテ推定消費量ヲ作製セリ。固ヨリ正確トハ云ヒ難キモ亦參考トナスヲ得ベキカ。即チ次表ノ如シ。

全國木炭累年消費量 (推定)

年次	人口 (千人)	消費量 (千噸)	一人當
大正二年	五三、三六三	七二一、〇九〇、三四二	一三・五
〃〃三年	五四、一四二	七〇一、五三九、〇二三	一二・九
〃〃四年	五四、九三六	七三三、七九七、〇九八	一三・三
〃〃五年	五五、六三七	八〇五、一七八、六七七	一四・四
〃〃六年	五六、三三六	九二九、九二一、一一五	一六・五
〃〃七年	五六、六六八	一、〇八九、六一一、七七九	一八・九
〃〃八年	五七、三三三	一、〇二八、四七七、八七七	一七・九
〃〃九年	五七、九一九	九六〇、八三五、九七一	一六・五
〃〃十年	五八、六九七	九六四、二五四、九七三	一六・四
〃〃十一年	五九、四六〇	九六三、九三九、一五八	一六・二
平均		八八九、八六二、六一七	

### 第八節 木炭需給關係

木炭ハ現在ニアリテ薪ト併セテ薪炭商ノ手ニ依リテ賣捌カル。薪炭兩者ノ取引上ニ於ケル主從關係ハ所ニヨリテ一樣ナラズト雖モ、概シテ都會地ニ於ケル薪炭商ハ木炭ヲ本位ニ取扱フニ反シ、地方ノ薪炭商ニ至リテハ木炭ヲ寧ろ薪ノ從的地位ニ置キ其ノ取扱ハ都會地ニ於ケルト全ク趣ヲ異ニス。既ニ其ノ取扱機關ノ薪炭二者ニ於ケル干繋此ノ如キハ即チ其ノ地需要ノ薪炭何レナルヤヲ語ルモノナリ。之ガ生産ハ東京其ノ他大消費地ト關係アル地方ニアリテハ多ク專業的ニ行ハルレドモ一般ニハ地方農家ノ副業タリ。製品ハ初メ需要者ガ其ノ地ノ薪炭商ニ之ヲ購ヒ薪炭商ハ之ヲ薪炭問屋ニ求メ薪炭問屋ハ山元製産者ニ之ヲ求ムルノ順序ナリト雖モ固ヨリ地方ニ依リテ一樣ナラズ。需要ノ大半ハ家庭用ナルガ其ノ都會地使用ハ莫大ノ數ニ上リ近來石炭、瓦斯、石油、電熱等ノ漸ク都市家庭ニ使用セラル、モノ増加セリト雖モ之等ハ管ニ設備費其ノ他經費ニ多額ヲ要スルノミナラズ家屋ノ構造上ヨリスルモ未ダ我家庭燃料トシテ萬全ナラザルタメ一般ニハ用ヒラレズ、木炭ノ使用ハ依然トシテ歡迎セラレツ、アリ。而シテ都會地ト村落トノ消費割合ヲ知ルコトハ又困難ナル事業ナルガ左ニ參考ノタメ市、町、村別木炭消費ノ狀態ヲ和歌山ノ例ニ探リテ見ルニ次表ノ如シ。

市町村別家庭用木炭消費量 (單位 貫)

種別	市消費總量	町消費總量	木炭移出村消費總量	木炭自給村消費總量	木炭移入村消費總量	合計	一人當
白炭	三三、八九七	四三、四四	三〇、七〇二	三〇、三六〇	八五、二四	一、三五一、四九七	一、七〇九
黒炭	四九、九三	三三、八四九	一六、一八一	四三、一七五	四四〇、八〇〇	一、八五一、九七	二、三四三
計	七三、八二九	七八、二八三	四七、八八三	七三、五三五	五五、九四	三、一〇三、四四	四、〇五二
人口	八、八五八人	一、五、一八九人	三、四、八七四人	一、四、五〇八人	一、六、三三三人	七〇、七六一人	
一人當	八、五〇	四、六五一	一、九九二	五、二二二	三、一八一	四、〇五一	
白炭ニ對スル人當	二、六三九	二、六六	一、二八五	二、二七三	〇、五二五	一、七〇九	

之ニヨリテ觀レバ和歌山ニ於ケル消費量ハ市ニ於テ一人當リ八貫五百匁、町ニ於テ四貫六百匁、木炭移出村ニ於テハ約二貫匁、木炭自給村ニ於テハ五貫匁、移入村ニアリテハ三貫匁ニシテ市ヲ第一トシ自給村之ニ次グ。

## 第四章 運輸

### 第一 鐵道

#### 第一節 鐵道累年木炭輸送數量、延噸哩並運賃

國有鐵道累年木炭輸送數量延噸哩並運費ヲ示セバ左表ノ如シ。  
木炭累年運輸成績（貸切扱）

年度	種別	輸送數量		大正元年ヲ百 トシタル指數	延噸哩	運費	大正三年 ヲ百トシ タル指數
		噸數	噸哩				
大正元年	年	五〇一、四三四	一〇〇	一〇〇			
二年	年	五七九、二八一	一一六				
三年	年	五七二、五一六	一一四		九四、二九三、三八五		一一〇〇
四年	年	六三三、一一九	一二六				一一二四
五年	年	六四四、四一九	一二九				一一三二
六年	年	八三三、四五七	一六六				一七五
七年	年	一、〇五〇、一一六	二〇九				二〇八
八年	同	一、〇九四、七〇〇	二一八				二二〇
九年	年	一、二四、七九二	二二四				二二六
一〇年	年	一、二六八、八九一	二五三				二七九
一一年	年	一、三八一、五三七	二七六				四二一

上表ニ依リテ觀レバ輸送數量ハ大正元年ヨリ累年増加ヲ來シツ、アルモ大正五年以後其ノ率ハ異常ノ増加ヲ示セリ、之レ財界ノ好況及國力發展ノ結果ト見ルヲ得ベシ、即チ大正六年ハ八十三萬三千四百五十七噸、大正七年ハ百五萬百十六噸ナルヲ以テ二十一萬六千六百九十七噸ノ著増トナリ、大正八年ハ百九萬四千七百噸ニシテ大正七年ヨリ四萬四千五百八十四噸ノ増加ヲ爲シ、九十年ハ各年トモ著シキ歩調ヲ以テ増加セリ。即チ元年ヲ百トスレバ、三

年ハ百十四、六年ハ百六十六、八年ハ二百十八、九年ハ二百二十四、十一年ハ二百七十六ヲ示セリ。

更ニ運費ヲ觀ルニ數量ニ於テ激増セル大正七年ノ二百三十萬五千三百二十五圓ハ同六年ノ百九十三萬九千四百四十七圓ヨリ三十六萬五千圓ノ急増加ヲ爲セルハ勿論ナレドモ、大正十年ヲ觀ルニ數量ニ於テハ比較的順調ノ増加ヲ爲セシニ拘ラズ、四百十九萬七千八百七十七圓ノ巨額ニ上リ、前年ヨリ百二十九萬圓ノ增收ヲ爲セリ。數量割合ヨリモ七年並十年ノ收入激増ハ共ニ運費引上ヲ行ヘル爲メニ外ナラズ、而シテ大正三年ヲ百トセバ、四年ハ百二十四、五年ハ百三十二、六年ハ百七十五、七年ハ二百八十九、八年ハ二百六十二、十年ハ三百七十九、十一年ハ四百二十一トナル。

### 第二節 木炭一噸平均輸送哩其ノ他

國有鐵道木炭平均輸送哩平均運費並平均一哩運費ヲ觀ルニ左表ノ如シ。（貸切扱）

年度	種別	輸送哩		運費	
		一噸平均輸送哩	一噸平均運費	一噸平均一哩運費	一噸平均一哩運費
大正元年	年	一六四・七哩	一・九三六圓	〇・一一八圓	
二年	年		二・一七五圓		
三年	年		二・二六九圓		
四年	年		二・三二七圓		
五年	年				
六年	年				

〃	〃	〃	〃	〃
一	一	九	八	七
一	〇	年	年	年
年	年	年	年	年
一六〇・六	一七三・八	一九五・三	二二二・八	二二七・七
二一・一九四	一一・二二六	一一・五八五	三・三〇八	三・三七五
〇・一三六	〇・二二八	〇・一三二	〇・一五五	〇・一四一

一〇四

上表ニ依ルニ大正三年一噸平均輸送哩ハ百六十四哩七分七年ハ百六十一哩六分トナリ少シク縮少セルモ爾後次第ニ増加シ十一年ハ二百三十七哩七分ニ及ベリ。又一噸平均運賃ヲ見ルニ大正三年ハ一圓九十三錢六厘ニシテ逐次増加セルモ大正七年ハ二圓十九錢四厘八年ハ二圓二十二錢六厘トナリテ六年ノ二圓三十二錢七厘ヨリモ減少セリ。之レ兩年共數量ニ於テハ著シキ増加ヲ爲セルモ貨物ノ種類其他輸送哩ノ關係等ヨリ此ノ結果ヲ示セリ。一噸平均一哩運賃ヲ見ルニ大正三年ハ一錢一厘八毛ナルガ爾後次第ニ増加シ十年ハ一錢五厘五毛トナリ十一年ハ一錢四厘一毛ヲ示シ多少ノ減少ヲ示セリ。之レ十年ハ九年ニ比シテ一噸平均輸送哩ハ比較的增加セザルモ一噸平均運賃ニ於テ増加著シキ結果ナルガ十一年ハ十年ニ比シテ運賃ノ増加率ノ著シカラザル割ニ輸送哩ノ比較的增加セシ結果ニ外ナラズ。

### 第三節 鐵道貨物トシテノ木炭ノ地位

主要貨物輸送成績ヲ見ルニ次ノ如シ。

木炭ノ鐵道貨物トシテノ地位 (大正十一年中)

品目	數量	運賃	一噸平均輸送哩	總貨物ニ對スル萬分比	運賃
木炭	一、四九、三六六	四、七、〇、〇六	二六・〇	一三六	二八三
米類	二、六四、八、七九	六、六、〇、六四六	一四六・一	四三	三七七
麥類	六九、〇、七	一、三九、一、九二	九・七	一一	九
大豆類	三〇八、二四三	八四、三、六六	二〇・三	四九	四
雜穀	三六、九、五	一、二四、六、七	一五・六	六	四
生甘藷	一五、七、三	五〇五、三、六	一八・八	五	九
生馬鈴薯	二七、八、七九	一四、六、三	二八・二	四	六
生野菜	三五、八、〇九	一、〇、一、五五二	一三・七	五	六
柑橘類	一四、八、四〇	一、〇、六、三、一八	三三・一	三	六
其他ノ果物類	二八五、八、八九	一、六、七、一、〇九	二四・七	三	六
藥工品	四九、五、五三	一、二、七、四、九四七	八七・六	五	三
木薪類	六、〇、五、七、五	一五、八、五、〇、六	二〇・三	九	七
薪材	六、〇、〇、五、五	一、〇、一、一、六二	九・〇	一〇〇	天
石砂利	一、一、六、九、四、三〇	二、三、五、三、一七二	六七・八	一八七	天
砂石	二、八、九、七、〇、九二	二、六、四、五、九、九	一五・四	四六	一、五、一
石核	一九、四、五、九、四	三〇、九、四、〇、四三	五〇・二	三、一〇五	一、七、五
鐵骸	一、九、五、〇、一〇	五、九、一、八、五	一四・九	三三	三、四
	五七〇、六、七八	一、二、三、四、三、四七	八三・二	一〇五	七

飼料	棉絲	綿織物	綿織物	生絲	絹織物	毛織物	麻織物	石炭	セメント	煉瓦	陶磁器及土器	硝子類及其製品	バルブ及蓋機類	和紙	洋紙	疊表類	鐵及鋼製品類	漆器類	機械類	油脂蠟類	
四三、四四七	四三、九〇〇	三〇三、〇九六	三九二、三三〇	三二一、五七七	四四、七〇一	一二、三三八	三三、三三七	六〇、六三三	二八七、〇五二	九六五、七六六	四四七、五九一	三七、三六六	二九二、三六六	二四九、〇〇八	六三、六九三	四〇四、五七六	六七、二二三	六四、八二一	一五、五八八	二六、三七二	一〇、一四三
九四、四〇〇	一、四七、八九六	一、二七、〇四四	二、六五、九九五	一、八三四、八二八	七五二、三六五	二〇九、六四三	二五、二五二	三七〇、一五九	六〇、〇三二	二、三三、八五三	八六八、一三三	一、七二、八八八	九八一、七九九	九〇、五二二	四一、五五五	一、六三、五七三	五、六七、二九四	三、一六、三七六	一、八、四六七	一、八六、三四四	六九、五二七
二〇、九	一三、七	二一、〇	一六、二	三〇、〇	一九、二	一五、六	二五、八	三四、八	八四、六	九八、八	七六、二	一九四、四	一四七、〇	一三九、八	一八七、六	一六四、〇	一八五、五	一一、〇	一八六、六	三三、八	
六九	六八	四八	五三	五二	二七	二五	一〇	一〇	一五	一五	七	五	三	一	一	一	二	二	二	四	
五二	八四	七三	一五	一〇	一〇	一四	一三	一三	一三	一三	五〇	九〇	五五	三	九	三	八	一〇	一〇	三六	

一〇七

礦石	鐵及鋼	銅	海藻類	鹽乾魚	活鮮魚	小麥粉	澱粉類	砂糖類	味噌類	漬物類及乾野菜	茶	煙草	清酒	麥酒	清涼飲料水類	人造肥料	大豆粕	魚肥	其他肥料	
一、五九、二五〇	六九、三五九	八八、七三〇	四三、五九	五〇五、八七〇	三四、六二四	五二、五九〇	三九、五〇二	六六、八九一	五六、四九一	二四、一七九	六〇、九一八	五、一九六	三〇六、五〇〇	四〇〇、八八八	二六〇、三九九	八、六四四	七六、六六九	八四、四七四	一九二、七三三	
二、七二、七〇三	二、八七、三八一	二、六〇、九四九	五〇六、一五九	二四二、三三五	一、〇九、九八五	一、九六、三三八	四、〇七九、三三三	七九九、二二五	二六〇、六六四	一、九〇、六〇五	六九八、二二八	二九九、二五七	二六五、七〇四	一、四四二、九九一	二、〇四三、〇三三	九七〇、五三〇	三三六、〇七九	一、七四三、四五六	一、八三、九四四	五五七、八四二
六七、三	一九、三	一四、四	三三、六	一九、四	二二、七	一九、二	三二、八	九、五	一三六、二	一三四、〇	八五、九	一五、四	一一、四	一八四、一	二五四、二	一一三、二	一三五、六	二〇、九	一一、三	一五、〇
二五〇	九八	一〇八	一四	八七	五	八	五	五	二	二	一〇	九	九	九	四	三	三	三	三	三
一六	一四	二九	二九	一四	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

一〇六

染料顏料及塗料	藥品	磷寸類	鮮肉類	皮革類	獸毛類	牛毛類	馬毛類	其他	合計
五〇、〇八五	一四七、〇六〇	二七、二三八	一四、二九九	二〇、七〇一	三七、七三三	二八、九九〇	一〇、二〇九	八、九七二、六三三	六二、六六七、九六〇
三三、四九三	八四九、九四七	一五三、〇七六	一一、五五五	一六〇、五五五	一一、四〇六	一、〇六四、九五九	九六、六四四	四〇、〇四二、一〇三	一五、二八八、〇七八
一七〇、九	一八、一三	二六、一九	二五、六一	二〇、六七	八五、二	二〇、八、六	一七、〇	一、四三二	一〇、〇〇〇
二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九	二四、九
一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇

一〇八

〔備考〕本表數字ハ小口貸切扱ノ合算ヲ示ス。  
 之ニ依リテ見ルニ木炭ハ鐵道貨物トシテ重要ナル地位ヲ占ムルモノ、一ニシテ鐵道主要貨物七十一品目中數量ニ於テ第六位タル百四十七萬九千三百六十六噸ノ多量ニ上リ、運賃ニ於テハ第四位ノ上位ニアリテ四百九十六萬七千二百六十六圓ノ多額ニ達ス。從テ數量ニ於テ木炭ノ上位ナル第三位ノ砂利第五位ノ礦物ハ運賃額ニ於テハ其ノ地位木炭ヨリ遙カニ下位ニ在リ。又木炭ノ總貨物ニ對スル萬分比ハ二二・三六、運賃二・八三ナリ。次ニ其ノ一噸平均輸送哩ハ二二・六哩ニシテ疊表類ノ二八・五哩、生馬鈴薯ノ二八・二哩、燐寸類ノ二六・九哩、鮮肉ノ二五・六哩、清酒ノ二五・四哩ニ亞ギ主要貨物中輸送哩ノ大ナルモノノ一ナリ。  
 大正三年ヲ採リテ觀ルニ其ノ數量ハ五十七萬二千五百十六噸ニシテ總貨物中ノ第四位、運

賃額ニ於テハ第五位、百十萬八千六百二十四圓ナリ。其ノ總貨物ニ對スル千分比ヲ觀ルニ數量ニ於テ一六、運賃額ハ二二ニ相當シ、一噸平均輸送哩ハ一六四・七哩、大正十一年ハ三年ニ比シ何レモ増加シタルヲ知ル。參考ノタメ大正三年度ノ成績ヲ示セバ次ノ如シ。  
 大正三年度中輸送成績  
 (大正三年度)

品目	數量	運賃	一噸平均輸送哩	總貨物ニ對スル千分比	運賃
木炭	五七二、五一六	一、一〇八、六二四	一六四・七	一六	一一二
石炭	一四、四七二、七四二	一、二二九、一九四	四四・八	四一〇	二二・三九
木材	二、四六八、七一八	四、〇八六、五三八	一一四・〇	七〇	七・九
米	一、三九二、七八五	二、四六四、五七六	一一二・〇	四〇	四・九
肥料	一、二五二、二五九	一、八八六、四六三	一五二・〇	三六	三・七
礦石	五五五、一八六	九四七、七一九	一六九・九	一六	一・八
石	四九〇、九四五	五三一、五七〇	六三・九	一四	一・〇
麥	三九八、七八五	五三〇、八九二	九五・一	一四	一・〇
食鹽	三五、一四四	五一九、五五〇	一四七・五	一〇	一・〇
生魚	三二七、一一三	一、八二三、九四三	五五・九	一〇	一・〇
其他	一二、九九〇、三七九	二五、二〇四、一五一	二〇・六	三六八	四・九〇
合計	三五、二七二、八七五	五一、三九九、二二〇	八四・六	一、〇〇〇	一、〇〇〇

一〇九

備考 本表ノ數字ハ貸切扱ノミヲ示ス



第四節 鐵道發着別數量並用途

一、大正十一年中ノ鐵道局別木炭一千噸以上ノ發着  
東京鐵道局

發着線	發着驛	噸數	發着線	發着驛	噸數	發着線	發着驛	噸數
東海道本線	品川	一、〇七四噸	常磐線	寶積寺	二、五二二噸	信越本線	勿來	二、三三〇噸
山北	北	二、七二一噸	磐城棚倉(社)	家	二、六〇八噸	橫川	平	五、一一五噸
大仁(社)	津	三、八九六噸	白河	板	一、七一一噸	高崎線	父(社)	三、一一六噸
沼津	島	一、九三三噸	黒磯	野	四、九八四噸	秩父(社)	崎	五、五四五噸
高島	濱	二、三二七噸	黒磯	磯	六、一五八噸	高崎	崎	二、五五四噸
東横	松	四、三六九噸	磐城棚倉(社)	河	一一、四六八噸	足尾線	沼	二、七一九噸
蛇松	木	七、二三三噸	常磐線	秋	一一、六五四噸	水輪	沼	二、〇三五噸
中央本線	二俣	一、五二六噸	高萩	原	二、二九七噸	澤入	山	三、一〇七噸
東北本線	尾(社)		小川	郷	二、九三三噸	足尾	山	一、五九三噸

水戸線	發着驛	噸數	信越本線	發着驛	噸數
笠間		一、八八四噸	信越本線	輕井澤	二、二三三噸
眞岡線	木	三、二一〇噸	房總線	原	四、一〇五噸
日光線	小川	三、七六〇噸			一、一六四噸

名古屋鐵道局			
發着線	發着驛	噸數	發着線
東海道本線	武生	二、九八四噸	河原
內船南部(社)	勝山(社)	一、〇〇七噸	三宅
身延(社)	大野口(社)	二、五二四噸	新平
島田	大野	一、五六三噸	小濱
金谷	聖寺	一、三〇〇噸	若狹
豐橋	鶴來(社)	一、〇三七噸	本郷
船町(社)	笹津(社)	四、五七四噸	七尾線
名古屋	青泊	二、〇一六噸	七尾
北陸本線	糸魚川	一、九一一噸	中越線
中郷	敦賀	三、七二八噸	伏木
今庄	敦賀	二、九九二噸	城端
鯖波	小濱	二、九九二噸	

水見線	見	一、四九二	藪原	一、三五五	沓掛	一、〇九八
中央本線	王子	一、〇三三	三上	二、〇四二	羽黑	二、四九〇
八野	原	四、九六一	坂留	一、四〇四	小下	三、二六三
上野	橋	一、二七二	大井	一、一九五	丸子	一、四二七
大月	子	一、〇一七	篠ノ井線	四、八九四	丸下	
笹井	井	一、二〇三	信濃大町(社)	一、三五八	子町(社)	
奈良	良	二、一二五	信越本線	一、二九〇	田	

神戶鐵道局

東海道本線	神戶	三、一一二	新井	二、七八〇
福知山線	田	一、五九一	德島本線	一、六三五
古市	市	一、四一四	阿波池	一、六六〇
山陽本線	干	一、〇八八	山陰本線	二、三三三
			殿	三、一二七
			生長寺	一、九五八
			播但線	一、二六〇
			津井	三、三六二
			山(社)	四、二九六
			永郡	一、七〇四
			吉永	一、二三〇
			上郡	二、一三〇
			出雲	一、二〇一
			江雲	三、七九三
			石見	二、〇四八
			石見	二、六〇七
			濱田	二、七五五
			因美線	三、九八一
			郡家	五、七五五
			用瀬	三、九八一
			倉吉線	三、四四一
			倉吉	三、四四一

門司鐵道局

和山	知家	九、一二一	伯備北線	一、一二五
養父	鹿父	一、一五九	江尾	二、〇二〇
八津	津住	五、二六六	根雨	二、〇〇二
佐津	住津	三、二五〇	黒坂	一、一七四
香住	坂住	一、二〇四	關西本線	一、三三四
濱美	美坂	二、三三三	淡町	一、三三四
岩取	取美	一、六一七	參宮線	二、五五四
鳥子	子取	二、六〇九	山田	一、二九〇
米來	來子	一、七七一	松阪	二、五五四
安島	島來	六、四九九	山口	二、五八三
荒島	島來	六、三〇六	宮野	一、〇〇三
穴道	道島	一、二九〇	篠目	一、四二五
和山	知家	九、一二一	山口	一、五五〇
養父	鹿父	一、一五九	西郡	二、五八三
八津	津住	五、二六六	山口	一、五五〇
佐津	住津	三、二五〇	山口	一、五五〇
香住	坂住	一、二〇四	山口	一、五五〇
濱美	美坂	二、三三三	山口	一、五五〇
岩取	取美	一、六一七	山口	一、五五〇
鳥子	子取	二、六〇九	山口	一、五五〇
米來	來子	一、七七一	山口	一、五五〇
安島	島來	六、四九九	山口	一、五五〇
荒島	島來	六、三〇六	山口	一、五五〇
穴道	道島	一、二九〇	山口	一、五五〇

常磐線	青森	小野邊	千乙沼	古尻	劍三	金北	一福	小鳥	奧中	沼宮	川口	好摩	盛岡	仙北	白詰
	森	淡	地	曳	供	崎	木	內	吉	戸	一	岡	戸	谷	山
	二、〇二六	二、一七六	二、四三〇	二、七七〇	二、五九二	一、一五九	六、〇〇五	二、〇二七	一、九〇二	八、二八六	六、一五三	一〇、一五四	四、〇八八	四、〇八八	一、〇三八
	近有	大湊線	八戸線	八戸線	橋場線	和賀線	東横線	鹽竈線	鹽竈線	浪	長	大	夜	富	龍
	川	戸	戸	石	人	目	通	町	江	塚	野	森	岡	田	戸
	一、二一〇	二、四六二	二、四六八	三、五〇二	六、〇六九	一、三四一	一、四二九	一、五三九	三、〇七八	六、八九七	一、二〇九	四、〇八四	三、一七四	二、九〇九	二、〇二六
	釜	奥羽本線	津	日	德	野	山	喜	會	猪	川	上	盤越西線	盤越東線	田
	淵	川	谷	澤	澤	都	方	松	代	代	代	代	代	代	代
	一、八〇七	五、一九五	五、八七一	一、八五四	三、八八四	三、六一九	三、八三七	二、六〇六	五、五五一	一、四四三	二、六一六	四、二九三	二、六四一	二、二九三	四、〇四六

一一五

東北本線	矢	須	白	發	鹿	牧	大	栗	眞	矢	人	渡	那	一	鹿兒島本線	於	大	三	
石	川	吹	賀	驛	島	園	川	野	幸	嶽	吉	口	地	福	谷	山	薩	菱	
六、〇七四	三、五三九	三、五三九	三、五三九	噸	三	都	小	飯	宮崎本線	三	重	重	上	佐	豐州本線	山	薩	菱	
平	一	瀬	大	發	三	城	町	野	野	町	岡	岡	伯	野	野	口	野	大	
泉	關	峯	原	驛	四	九	六	五	一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一、六二八	五、八八〇	一、〇八五	二、九一四	噸	四	九	六	五	一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
石	花	水	前	發	川	武	川	細	島	杉	妻	延	富	宮	大	田	青	山	
鳥	卷	澤	澤	驛	川	武	川	細	島	杉	妻	延	富	宮	大	田	青	山	
谷	卷	澤	澤	噸	川	武	川	細	島	杉	妻	延	富	宮	大	田	青	山	
一、二五二	一、八三九	三、三九六	一、二四二	噸	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	

一一四

院 横堀内	湯澤	十文	羽後大森(社)	羽和	和	鹿	二	鷹	早	毛馬
四、〇八九	一、九二五	一、三六八	一、八九二	一、五六六	一、二五五	二、〇四六	一、一九四	一、〇五〇	七、六八一	三、五〇五
西横黒線	相野	黒澤	生保内線	角	能代線	陸羽東線	中	池	富	中
澤々	澤	館	代	代	田	月	平	澤	山	澤
一、六一二	二、七八九	六、一七六	一、六五六	二、九五三	一、五三二	一、七〇四	一、二五三	二、七四八	二、三七一	二、七四八
羽前	長	石巻線	鹿	上越北線	越後堀ノ内	村上線	坂	村	室蘭本線	江
向町	澤	又	又	内	町	上	上	上	南	小
四、八三四	一、五八五	一、〇六〇	一、一三八	二、九四一	四、三一七	二、四七五	一、五三六	三、六一九	一、三六〇	二、四七五

札幌鐵道局

函館本線	函	森	石	野
一、一三〇	二、一三四	一、九三〇	一、三八二	一、三八二
八	雲	雲	雲	雲
二、六九二	一、二四二	一、八四二	一、六七四	二、三七一
狩	南	江	室蘭本線	追
大	小	大	別	分
一、三六〇	二、四七五	一、五三六	三、六一九	三、六一九

安	早	遠	沼	沼	錦	社	白	知	敷	萬字線	夕張線	川	根室本線	新	池	十
平	來	淺	端	牧	峯	臺	老	床	生	渡	端	得	田	弗	弗	弗
六、六六八	三、〇八五	一九、一九八	七、五七二	三〇、四六五	三、三九一	三、九四四	三、四一四	一、九九六	五、一一八	三、三七四	一、九三九	一、五四六	二、六四七	四、五〇五	四、五〇五	四、五〇五
浦	直	尺	上	茶	厚	宗谷本線	和	和	和	小	上	中	下	淺	名	沼
内	内	別	別	尾	床	床	寒	寒	寒	別	別	別	別	別	野	上
三、四一九	一、四二九	一、三二九	一、七八八	二、一一六	一、〇四三	一、二四一	一、一六五	二、八一五	一、〇〇六	二、二九〇	一、〇〇六	二、七〇六	一、〇〇二	一、〇七八	一、九四九	一、九四九
高	本	足	大	大	川	小	置	調	野	美	湧別線	留	生	北	室	室
島	別	寄	地	地	上	別	別	府	牛	梶	梶	藥	藥	龍(社)	藥	藥
一、五三四	二、四八三	二、四二五	三、〇七七	六、五九七	二、四〇九	二、二二五	二、一六六	四、六四九	二、二五一	三、二〇七	一、四六四	二、一七八	二、一七八	四、四三八	四、四三八	四、四三八

以上ニ依レバ東京鐵道局管内ニ於テ發送數量ノ最モ多キハ東北本線黒磯驛ノ一萬二千四百噸、名古屋鐵道局管内ニテハ七尾線七尾港驛ノ六千六百噸、神戶鐵道局管内ニテハ山陰本線石見江津驛ノ二萬四百八噸、門司鐵道局管内ニテハ鹿兒島本線人吉驛ノ二萬二千六百噸、仙臺

鐵道局管内ニテハ八戸線八戸驛ノ三萬五千噸札幌鐵道局管内ニテハ室蘭本線早來驛ノ三萬一千噸ナリ。

一一八

數量順トシテ觀ルトキハ仙臺鐵道局管内八戸驛ノ三萬五千二十二噸ヲ第一トシ、札幌鐵道局管内早來驛ノ三萬一千八十五噸、門司鐵道局管内人吉驛ノ二萬二千六百四十二噸、神戶鐵道局管内石見江津驛ノ二萬四百噸、東鐵管内黒磯驛ノ一萬二千四百六十八噸、名古屋鐵道局管内七尾港驛ノ六千六百九十八噸ノ順トナル。尙數量一萬噸以上ノ發驛トシテハ東京鐵道局管内ノ黒田原、神戶鐵道局管内ノ上郡、木次、淡町、門司鐵道局管内ノ遠淺、苫小牧等ヲ舉グルヲ得。即チ名鐵管管内ノ花巻、沼宮内、北福岡、鹽竈、淡、札幌鐵道局管内ノ遠淺、苫小牧等ヲ舉グルヲ得。即チ名鐵管管内ニハ一萬噸以上ノ發驛ナク本邦ニ於ケル木炭ノ主要生産地ヲ包含スルハ仙臺、門司及札幌三鐵道局管内ナリ。

二、局別各驛到着木炭數量及用途

(一) 東京鐵道局管内

本管内ニ於ケル大正十一年中ニ於ケル各驛到着木炭數量及用途ハ左表ノ如シ。

品名	探暖用	炭團	鐵工業	菓子	冶金	養蠶用	干鹼	玩具	器具	製茶用	製藥	火藥	其他	計
品	七、二八三、三五		一、〇三九											二〇、三三三
沙														二四、四九六
川	三、四六九、五二		二、五九九											

大森	蒲田	川崎	鶴見	東神奈川	高島	東横濱	程谷	藤澤	平塚	鎌倉	逗子	田原	小田	大崎	惠比壽	新宿	目白	池袋	板橋
四、一〇〇、二七九	一、〇四八	三、二六六	八、九〇二	四、〇四二	五、〇〇〇	二、二六二	一、〇〇五	二、五二	一、六五一	一、七三四	九、九七九	三、九六六	七、四七九	四、六七一	九、一一九	六、一四九	三、六〇八	九、一〇一	三、二二四
六、九八	一、四〇八	五、九四	二、七九	五、〇四	二、四二	一、一〇一	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	一、〇七〇	六、五九	五、八五	七、九八	二、〇〇三	七、七四六	八、九七四	二、六〇〇	六、〇六七	二、六四三
合			三、六〇〇		一、〇七五		二、四九五						一、五八〇						
一、〇四八	一、七四六	四、六九四	一、八六六	八、五二七	一、九二七	七、七七六	一、六七五	二、三二八	三、二二五	三、四〇四	一、四九七	一、六三三	一、三三二	一、五五四	六、九五〇	一、六八五	三、九三三	六、四九九	一、六一八
五、八五七																			

一一九



伊勢崎	大間々	土浦	水戸	助川	平城	結城	下館
三〇六	一、三〇〇	五五五	二〇二	七五五	五九八	五〇〇	一八〇
四八五	四九九	四〇〇	五五六	一、四〇〇	三九八	九〇〇	七五五
二〇〇	二〇〇	二〇〇	一七〇	三〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
五五五	五五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五	二五五
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
一、四八〇	一、八四〇	一、三〇〇	一、二〇〇	二、四〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一、五五〇

〔備考〕 西那須野到着ハ驛前ニ本社ヲ有スル東北林産會社ニ於テ白河附近ノ山林製品ヲ一旦本社ニ於テ受入レ、手直シノ上更ニ東京附近ニ發送ノモノナリ。

右ノ表ニ依レバ東京鐵道局管内到着數量最モ多キハ秋葉原驛ニシテ十萬三千五百噸ヲ算シ、隅田川驛ノ六萬六千五百噸、錦糸町驛ノ四萬九百噸、新宿驛ノ三萬九千三百噸之ニ亞グ。秋葉原驛ノ到着數量中六割強ハ採暖用ニ、二割強ハ厨房用ニ、九分強ハ鐵工業用ニ、殘餘ノ五分ハ炭團製造用ニ供セラレ、隅田川驛ノ到着數量中三割強ハ採暖用ニ、二割ハ厨房用ニ、殘リ四割強ハ火藥製造用ニ供セララル。又用途ノ方面ヨリ觀レバ鐵工業用ニ供セララル、ハ東橫濱ノ三割強、秋葉原ノ九分強、錦糸町ノ一割餘、川口町ノ五割強、養蠶用ニ供セララル、ハ藤澤ノ八割強、國分寺ノ六割強、武藏境五割強、製茶用ニ供セララル、ハ古河ノ三割強、國分寺ノ二割強等ナリ。

本管内ニ於テ大正十一年中主要驛木炭到着數量並用途ヲ見ルニ次表ノ如シ。

各驛到着木炭ニ對スル主ナル用途

驛名	大正十一年中鐵道到着噸數	用途	驛名	大正十一年中鐵道到着噸數	用途
伊勢崎	三〇六	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	茅野	一、八六三	採暖用二割、厨房用二割、養蠶用六割
大間々	一、三〇〇	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	上諏訪	一、六二二	採暖用四割、厨房用三割、養蠶用二割、製茶用一分、其他三分
土浦	五五五	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	下諏訪	二、八八三	採暖用六割、厨房用一割、養蠶用二割、製茶用一分、其他三分
水戸	二〇二	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	岡谷	二、〇二八	採暖用三割、厨房用一割、養蠶用三割、其他一割
助川	七五五	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	多治見	一、〇三六	採暖用四割、厨房用二割、養蠶用三割、其他一割
平城	五九八	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	千種	五、〇六六	採暖用一割五分、厨房用四割五分、炭團製造用五分
結城	五〇〇	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	松本	一、八二四	採暖用四割、厨房用三割、金用一割、製茶用其ノ他二割
下館	一八〇	鐵工業用一割、採暖用一割、養蠶用一割	長野	二、五九四	採暖用三割三分、厨房用四割八分、製茶用三分、養蠶用一分五分、鐵工業用一分
			金澤	二、五七六	採暖用、厨房用

八王子	五、六七八	探暖用八割、養蠶用一割、炭團製造用三分、鐵工業用二分	高田	二、四〇八	厨房用七割、探暖用三割
甲府	二、九九一	厨房用五分、探暖用五分、製糸用五分	直江津	一、二二〇	探暖用七割、厨房用二割、其ノ他一割

一二四

上表ニ依ルニ名古屋鐵道局管内ニ於テ最モ到着數量ノ多キハ名古屋驛ノ一萬五百六十八噸ニシテ八王子驛ノ五千六百七十八噸千種驛ノ五千六十六噸甲府驛ノ二千九百九十一噸下諏訪驛ノ二千八百八十二噸等之ニ亞グ。用途ヲ見ルニ名古屋驛到着中四割ハ探暖用厨房用六割ハ冶金用、陶器製造用、養蠶用、鐵工業用、三分ハ炭團製造用ニ、二分ハ鐵工業、五分ハ製茶用ニ、千種驛到着數量ニ割五分ハ探暖用ニ、四割ハ厨房用ニ、二割五分ハ冶金用ニ、五分ハ鐵工業用及炭團製造用ニ、甲府驛到着數量中ニテハ五割ニ厨房用、三割ニ探暖用、一割ニ鐵工業用、一割ハ製糸用、其ノ他ニ、又下諏訪到着ノ分中六割ハ探暖用ニ、一割ハ厨房用ニ、二割ハ養蠶用ニ、一割ハ其ノ他ニ充當セラル。

以上ハ二千八百噸以上ノ到着驛ヲ舉ゲタルモノナルガ大體ニ於テ探暖用、厨房用、養蠶用、製茶用多ク特種ノモノトシテハ大垣驛到着ノ五割ガ「カーバイド」製造用ニ、長野驛到着中ノ九割ガ炭化石灰製造用ニ供セラル、モノヲ舉クヘク、其ノ他製糸用及冶金用ニモ多少使用セラルヲ見ル。

(ハ) 神戸鐵道局管内

本管内ニ於ケル狀況左表ノ如シ。  
主要驛到着木炭用途別概算數量

線別	驛名	十一年數量	探暖用	厨房用	工業用	備考
東海道本線	彦根	二、二九〇	一、三五五	八二二	五四〇	製茶用四〇
	能登川	一、二二九	一七五	三二九	三〇〇	炭團製造用五%
	近江八幡	一、三〇三	四五〇	四〇〇	三〇〇	炭團製造用五%
	草津	一、〇〇九	五〇〇	七九六	(五%)	炭團製造用六四
	梅小路	一、四三三	(八〇%)	(一〇%)		不明
	茨木	一、〇九一	四三一	九七二		
	吹田	一、〇二一	五九七	五八三		
	大阪	一一、一九一	四五四	一、〇六〇		
	西宮	一、七七〇	八六〇	一、二〇四		
	住吉	一、八二五	六五〇	一、八〇五	二五〇	炭團製造用二三〇
	東灘	三、五八九	六五〇	一、八〇五	二五〇	炭團製造用二五、冶金用三三
	神戶	三、八六〇	六、三八六	二、五〇七	六、八三六	養蠶用五〇、製茶用五三〇
	濱大津	二、六四八	三二八	一、六二四	四〇〇	冶金用一九〇
	野田	四、四九五	七七八	二、三三九		炭團製造用六九
	安治川口	一、五〇二	一〇九	一、三三九	一、一八五	冶金用三九五
	池田	一、〇八三	(二〇%)	(六〇%)		炭團製造用二〇% 製茶用一〇%
	福知山線	二、六一五	八二二	一、六四一	二七四	

一二五



山陽本線	兵取庫	五、一三三	一、三六〇	一、四五八	
鷹石	一、四四一	一、三六六			
明川	二、九〇一	二、六七二			
加古川	一、四八七				
新川	一〇、六二九	三、二二八	六、二〇〇	一、〇〇〇	冶金用 探暖廚房用一、三三九
京口	三、五〇二	二、三五八			
德島	三、九八〇	(八〇%)			鍛冶用三九四菓子製造七八八
二條	四八、二八九	(三五%)			菓子製造用二〇〇% 炭團製造用一〇〇% 冶金用五%
嵯峨	一、六八八	(四〇%)			不明
新鶴	二、三四〇	二〇〇	一五〇		
中舞	二、〇八九	八〇〇	五〇〇		
天王寺	七、九三一	五、四五〇	一、五三〇	五五〇	菓子製造用五〇〇
淡見	六、二二三	六、〇〇〇	六四		炭團製造用一〇八
伏見	六、六八五	二、〇一七	一、〇〇〇		炭團製造用五三 製茶用七五
片町	一、二六六	四七九	七二八		炭團製造用一六、製茶用三三三
櫻井	一、四八三	五六三	九九四		炭團製造用三三 冶金用五〇〇
東線	八、二五三	一、八一七	二、九一七	一、三〇八	

〔備考〕括弧内ノ數量中ニハ鐵道以外ノ輸送ニヨルモノヲ含ム

以上ニ依レバ神戸鐵道局管内ニ於テ其ノ到着數量ノ多キハ山陰本線二條驛ノ四萬八千二百八十九噸ニシテ神戸驛ノ三萬八千八百六十噸梅小路驛ノ一萬四千三百三十五噸大阪驛ノ

一萬二千百九十噸新川驛ノ一萬六百二十九噸ハ一萬噸ヲ超ユルノ數字ヲ示ス。用途ヲ見ルニ二條驛到着中四割ハ探暖用ニ三割五分ハ廚房用ニ一割ハ炭團製造用ニ他ノ一割ハ製茶用ニ残り五分ハ冶金用ニ神戸驛到着中一割八分ハ探暖用ニ六割ハ廚房用ニ残り二割餘ハ工業用ニ又梅小路驛ニテハ八割ハ探暖用ニ一割ハ廚房用ニ五分ハ工業用ニ残り五分ハ炭團製造用ニ供セラル。尙一萬噸以下ノ箇所ニ於テモ其ノ用途ハ略同一ニシテ探暖用、廚房用、工業用大部分ヲ占メ炭團製造用、製茶用、養蠶用之ニ亞グ。

(二) 門司鐵道局管内  
十一年中ニ於ケル本管内ニ於ケル狀況左表ノ如シ。  
主要驛到着木炭に對スル主ナル用途 (十一年調)

驛名	數量	用途
下關	二、八九八	探暖用、廚房用、冶金用、鐵工業用
吳司	一、〇五七	廚房用、探暖用
門司	四、〇六〇	探暖用、廚房用
小倉	二、五七六	探暖用、廚房用、炭團製造用、冶金用
八幡	一、六九四	鐵工業用、探暖用
博多	三、二七七	探暖用、廚房用、鐵工業用
久留米	一、四二三	探暖用、廚房用、冶金用、鐵工業用
留	一、一五六	探暖用、廚房用

大牟田	一、八八七	探暖用、厨房用、「カーバイド」製造用
上熊本	一、九二六	探暖用、厨房用
熊本	一〇、五三八	探暖用、厨房用、炭團製造用、製茶用、鐵工業用
川尻	二、七五〇	探暖用、厨房用、養蠶用
佐賀	一、九一九	探暖用、厨房用、冶金用、鐵工業用、製茶用

上表ニ依ルニ門司鐵道局管内ニ於テ到着數量ノ第一ハ熊本驛ノ一萬五百二十八噸ニシテ之ニ亞グハ門司驛ノ四千六十噸、八幡驛ノ三千二百七十七噸、下關驛ノ二千八百九十八噸ナリ、其ノ用途ハ大略探暖用、厨房用、鐵工業用等ナレドモ八幡、博多、大牟田等ノ工業地ニ於テハ此ノ外「カーバイド」製造用ニモ供セラル。其ノ割合ハ不明ナリ。

(ホ) 仙臺鐵道局管内

十二年中ニ於ケル本管内ノ狀況次ノ如シ

主要驛到着木炭用途割合 (大正十二年中)

驛別	到着量	用途	割合
郡山	二、三三三	探暖用、厨房用	四〇%
福島	三、五五〇	炭團、養蠶、製茶、冶金、鐵工業、釀造、石灰、灰用、製菓、其他	二〇%
仙臺	七、七三三	探暖用、厨房用	五五%
瀨川	八〇〇	探暖用、厨房用	五%
計	一〇、〇〇〇		一〇〇%

記事

驛別	到着量	用途	割合
盛岡	二、六二八	探暖用、厨房用	四〇%
青森	三、三三七	炭團、養蠶、製茶、冶金、鐵工業、釀造、石灰、灰用、製菓、其他	二〇%
會津	一、四三七	探暖用、厨房用	五五%
五井	一、二二二	探暖用、厨房用	五%
米山	七、〇〇〇	探暖用、厨房用	五%
山形	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
澤山	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
形手	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
曲手	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
田曲	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
大曲	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
秋大	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
土大	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
大土	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
弘大	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
新弘	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
酒新	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
柏新	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
長柏	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
三長	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
加三	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
新加	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
新新	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
新水	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
發新	一、五九二	探暖用、厨房用	五%
計	一〇、〇〇〇		一〇〇%

探暖用ノモノトハ地方生産品

〔備考〕 轉送品ハ含まズ

上表ヲ見ルニ仙臺鐵道局管内ニ於ケル到着數量最モ多キハ秋田驛ノ九千五百八十七噸ニシテ、仙臺驛ノ七千七百五十三噸、山形驛ノ七千十噸、弘前驛ノ六千六十噸、長岡驛ノ五千二百九十二噸之ニ次デ多シ。其ノ用途ヲ觀ルニ秋田驛到着中七割ハ探暖用、二割ハ厨房用、一割ハ冶金用ニ。仙臺驛到着中三割ハ探暖用ニ、同ジク三割ハ厨房用ニ、五分ハ炭團製造用ニ、他ノ五分ハ冶金用ニ、三割ハ製菓用ニ。又山形驛到着ノモノノ五分ハ探暖用ニ、三割ハ養蠶用ニ、二割ハ鐵工業用ニ。弘前驛到着數量中ノ七割ハ探暖用ニ、二割四分ハ厨房用ニ、残り六分ハ其ノ他ニ。又長岡驛到着ノ數量中四割ハ探暖用ニ、二割ハ厨房用ニ、五分ハ冶金用ニ、二割ハ鐵工業用ニ、一割五分ハ製茶用ニ供セラル。

〔ハ〕 札幌鐵道局管内

大正十一年中ニ於ケル本管内ノ狀況左ノ如シ。

木炭ノ主ナル用途 (大正十一年中)

驛名	數量	記	事
函館	三〇、三六〇	探暖用、厨房用、工業用、道外移送	
余市	四、四一三	探暖用、厨房用	
小樽	五、二二七	探暖用、厨房用、道外移送	
南小樽	四四、二八三	探暖用、厨房用、道外移送	

驛名	數量	記	事
小樽	二、九一一	道外移送	
札	三、二〇五	探暖用、厨房用	
苗	三、八四五	探暖用、厨房用、炭團製造用	
岩	一、〇八四	探暖用、厨房用	
瀧	一、〇〇四	探暖用、厨房用、冶金用、鐵工業用	
旭	二、〇三二	探暖用、厨房用、冶金用、鐵工業用、道外移送	
手	六、九〇六	探暖用、厨房用	
岩	三、七九〇	探暖用、厨房用、道外移送	
御	三、三〇五	探暖用、厨房用、道外移送	
室	二、八、一一一	探暖用、厨房用、道外移送	
夕	二、一七七	厨房用	
根	二、八四四	探暖用、厨房用、工業用	
瀧	五、八六七	探暖用、道外移送	

〔備考〕 木炭一俵ノ内容十貫貨車積込一噸當十五乃至十六俵

以上ニ依ルニ本管内ニ於テ到着數量ノ最モ多キハ南小樽驛ノ四萬四千二百八十三噸ニシテ、札幌驛ノ三萬一千二百五噸、函館驛ノ三萬三千六十噸、室蘭驛ノ三萬八千二百二十一噸、旭川驛ノ二萬一千三十二噸ハ何レモ一萬噸ヲ超ユ。用途ヲ見ルニ大部分探暖用、厨房用ニ使用セラレ、旭川、瀧川等ニ於テ多少冶金用、鐵工業用等ニ使用セラル、モ其ノ割合ハ何レモ不明ナリ。



# 木 炭

(數量單位)

府 縣	北 海 道		青 森 縣	岩 手 縣	秋 田 縣	山 形 縣	宮 城 縣	福 島 縣	茨 城 縣	栃 木 縣	群 馬 縣	埼 玉 縣	千 葉 縣	東京府		神奈川縣		新 潟 縣	富 山 縣	石 川 縣	福 井 縣	長 野 縣	岐 阜 縣	滋 賀 縣	山 梨 縣	靜 岡 縣	愛知縣		三 重 縣	京都府		大阪府		兵庫縣		奈 良 縣	和 歌 山 縣				
	道		縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	東京市	其 他	橫濱市	其 他	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	名古屋	其 他	京都市	其 他	大阪市	其 他	神戶市	其 他	縣	縣				
	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	別	
北 海 道	164,808	109	34	83	52	28	53	8	16	104	30	26	26	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
青 森 縣	2,334	600	349	101	276	406	947	321	1,742	1,423	5,939	67,630	2,050	3,881	1,431	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
岩 手 縣	2,660	5,751	898	794	1,224	455	1,325	1,585	760	4,497	2,287	64,458	2,054	4,407	600	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
秋 田 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
山 形 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
宮 城 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
福 島 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
茨 城 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
栃 木 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
群 馬 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
埼 玉 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
千 葉 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
東京府	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
神奈川縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
新 潟 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
富 山 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石 川 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
福 井 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
長 野 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
岐 阜 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
滋 賀 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
山 梨 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
靜 岡 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
愛知縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三 重 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
京都府	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大阪府	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
兵庫縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
奈 良 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
和 歌 山 縣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
總 計	164,860	2,821	3,463	6,350	9,537	11,959	20,519	210,222	22,797	13,248	44,012	27,145	337,503	33,239	50,721	33,033	15,465	5,607	4,635	2,768	24,425	4,689	5,508	4,364	8,998	13,054	9,184	3,427	47,773	10,032	36,627	6,065	52,589	23,768	5,145	1,234	2,500	—			



東京鐵道局管内ニ於ケル積卸其ノ他費用										
年	度	積卸料	運搬賃	手數料	積込賃	運搬賃	手數料	積込賃	運搬賃	手數料
三	年	一七	二〇	四〇	一五	七	二〇	一五	七	一五
四	年	一七	二〇	四〇	一五	七	二〇	一五	七	一五
五	年	一七	二〇	四〇	一五	八	二〇	一五	八	一五
六	年	一七	二五	四〇	一五	八	二〇	一五	八	一八
七	年	二〇	二五	五〇	一五	九	二〇	一五	七	二〇
八	年	二〇	三五	五〇	二〇	一〇	二五	二五	六	四〇
九	年	二〇	三五	五〇	二五	一二	三〇	三〇	六	五〇
十	年	二五	三五	五〇	三〇	一二	四〇	四〇	六	五〇
十	一	二五	三五	五〇	三〇	一五	四五	四五	六	五〇
十	二	二五	三五	六二	三〇	一五	四五	四五	六	五〇
十	三	二五	三五	六二	三〇	一六	四五	四五	六	七〇

第五節 木炭積卸其ノ他費用

木炭積卸其ノ他ノ費用ヲ各鐵道局報告ニヨリ見ルニ次ノ如シ。

一、東京鐵道局管内

東鐵管内ニ於ケル積卸其ノ他費用

(一噸當)

年	度	新		秋葉原		市		今		磯		黒		名
		手取	保倉	手取	保倉	手取	運搬	積込	手取	運搬	積込	手取	運搬	
三	年	一五				二〇	七	一五	四〇	二〇	一七			費目
四	年	一五				二〇	七	一五	四〇	二〇	一七			年度
五	年	一五				二〇	八	一五	四〇	二〇	一七			
六	年	一八				二〇	八	一五	四〇	二五	一七			
七	年	二〇	一	七〇		二〇	九	一五	五〇	二五	二〇			
八	年	四〇	六〇	七五		二五	一〇	二〇	五〇	三五	二〇			
九	年	五〇	六〇	八〇		三〇	一二	二五	五〇	三五	二〇			
十	年	五〇	六〇	八〇		四〇	一二	三〇	五〇	三五	二五			
十	一	五〇	六〇	八〇		四五	一五	三〇	五〇	三五	二五			
十	二	五〇	六〇	九〇		四五	一五	三〇	六二	三五	二五			
十	三	七〇	六〇	九〇		四五	一六	三〇	六二	三五	二五			

宿配達賃	二〇	二〇	二〇	二〇	二五	三〇	四五	七〇	七〇	七〇	七〇	九〇
------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

秋葉原驛配達料

里数	配達		名	年別									
	区別	区域		八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年				
半里以内	一區	秋葉原驛附近	〇・六五	〇・八〇	〇・七六	〇・七二	〇・六五	〇・八五	〇・八一	〇・七五	〇・八五	〇・八五	
	二區	神田、下谷ノ一部	〇・七五	〇・九〇	〇・八五	〇・八一	〇・七五	〇・九〇	〇・八一	〇・七五	〇・八五	〇・八五	
	三區	神田、下谷ノ一部	一・〇五	一・二〇	一・一四	一・〇八	一・〇〇	一・一四	一・〇八	一・〇〇	一・一四	一・〇〇	
	四區	神田、下谷、浅草、日本橋ノ一部	一・一五	一・三五	一・二八	一・二二	一・一五	一・二八	一・二二	一・一五	一・二八	一・二二	
一里以内	五區	神田、下谷、浅草、日本橋、本所、麴町ノ一部	一・四五	一・六五	一・五五	一・四七	一・四五	一・六五	一・五五	一・四七	一・四五	一・六五	
	六區	川ノ一部、本所、京橋、深川ノ一部	一・九〇	二・一〇	二・〇〇	一・九〇	一・七五	二・一〇	二・〇〇	一・七五	二・一〇	二・〇〇	
	七區	浅草、本所、京橋ノ一部	二・一五	二・四〇	二・二八	二・一七	二・〇〇	二・二八	二・一七	二・〇〇	二・二八	二・一七	
一里半以内	八區	谷下、浅草、本所、麴町、芝、赤坂ノ一部	二・四〇	二・七〇	二・五六	二・四三	二・三〇	二・七〇	二・四三	二・三〇	二・七〇	二・四三	
	九區	麻布及本所、赤坂ノ一部	二・七〇	三・〇〇	二・八五	二・七一	二・五五	三・〇〇	二・八五	二・七一	二・五五	三・〇〇	
二里以内	九區		二・七〇	三・〇〇	二・八五	二・七一	二・五五	三・〇〇	二・八五	二・七一	二・五五	三・〇〇	

三里以内	十區	本郷、深川、芝ノ一部	二・九〇	三・三〇	三・一四	二・九八	二・八〇	三・二四
------	----	------------	------	------	------	------	------	------

一、名古屋鐵道局管内  
管内ニ於ケル積卸其ノ他費用  
木炭積込費用（一噸當）

驛名	年別	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
七尾庄	五〇錢	五〇錢	五〇錢	五〇錢	五〇錢	七五	八五	八五	六〇	六〇	八五
今庄	五六	五五	五五	七〇	七五	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇

木炭貨車取卸費用（一噸當）

驛名	年別	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
名古屋	四〇錢	四〇錢	四〇錢	五〇錢	五五	六〇	六〇	六〇	六〇	五五	五〇
八王子	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇

上表ニ依ルニ發送數量多キ七尾庄今庄兩驛ニ於ケル積込費ハ大正三年ヨリ同六年迄ハ概シテ大ナル變化ナキモ同七年ヨリ漸騰シ財界ノ好況時タル大正八年ハ七年ヨリ七尾港驛ニ於テ十錢高ノ八十五錢、今庄驛ニ於テ五錢高ノ八十錢トナレリ。然ルニ大正十年ニ至リ七



尾港ニ於テハ經濟界ノ變動ニ依リ二十五錢安ノ六十錢トナリ、其後十二年ニ及ビテ再ビ八十  
 五錢ノ二十五錢高トナレルガ、今庄驛ハ大正八年以後十二年マデ變化ナキヲ觀ル。  
 次ニ到着數量ノ多キ名古屋、八王子兩驛ノ取卸費用ヲ觀ルニ名古屋驛ノ大正三年ハ四十錢、  
 同五年ハ四十錢高ノ五十錢、六年ハ五十五錢、七年ヨリ十年迄ハ五錢高ノ六十錢、十一年ハ財界ノ  
 變動ニ依ル五錢安ノ五十五錢トナリ、十二年ハ又更ニ五十錢ニ下レリ。然ルニ八王子驛ハ名  
 古屋驛ヨリモ低廉ニシテ大正三年ハ三十錢、以後六年迄ハ騰落ナク、大正七年ニ至リテ十錢高  
 ノ四十錢トナリ爾來十二年迄變化ナシ。  
 尙今庄驛ニ於ケル保管料及集荷料ヲ示セバ左ノ如シ。  
 木炭噸當集荷料並保管料（保管料ハ一ヶ月）

年別	驛名	
	集荷料	保管料
三年	一五〇錢	二五
四年	一五〇錢	二五
五年	一五〇錢	二五
六年	一五〇錢	二五
七年	一五〇錢	三五
八年	二五〇錢	三五
九年	二五〇錢	三五
十年	二五〇錢	三五
十一年	二五〇錢	三五
十二年	二五〇錢	三五

三、神戸鐵道局管内  
 神戸鐵道局管内積卸料其ノ他

自大正三年至最近、木炭積卸其ノ他費用（一）  
 積込價

驛名	年次												計	記	事		
	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	石見江津	上郡					
倉庫間運搬料	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	鐵道一噸ヲ單位トス
積込料	七	五	五	五	五	〇	七	五	五	五	五	五	五	五	五	五	鐵道一噸ヲ單位トス
取扱手数料	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	鐵道一噸ヲ單位トス
計	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	鐵道一噸ヲ單位トス
取卸價	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	鐵道一噸ヲ單位トス

自大正三年至最近、木炭積卸其ノ他費用（二）

取卸價





年次	費用		貨車取卸費	構外持出費	其ノ他	合計	記事
	名	額					
大正三年	仙	臺	〇〇〇八	三〇	二二	六〇	其ノ他費用ハ運送店ノ手 數料トス
大正四年	〇		〇〇	三〇	二二	七〇	
大正五年	〇		〇〇	四〇	二五	七五	
大正六年	一		〇〇	五〇	三五	八五	
大正七年	一		〇〇	六〇	四〇	一〇三	
大正八年	一		〇〇	七〇	四〇	一三三	
大正九年	一		〇〇	八〇	四〇	一三五	
大正十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正二十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正三十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正四十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正五十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正六十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正七十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正八十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十一年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十二年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十三年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十四年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十五年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十六年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十七年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十八年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正九十九年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	
大正一百年	一		〇〇	九〇	四四	一五〇	

十二年	一七	一〇〇	三三	一五〇
-----	----	-----	----	-----

六、札幌鐵道局管内  
札幌鐵道局管内積卸其ノ他費用  
木炭積卸賃（一俵當）  
積込賃（苦小牧驛）

自大正三年 至同六年	自大正七年 至同九年	自大正十年 至最近
一・二錢	二・〇錢	一・七錢

驛名	最近ニ於ケル 取卸賃
札幌	三・五錢
函館	一・五錢

〔備考〕 函館驛ニ於ケル年次別費用ハ調査材料ナキヲ以テ不明ナリ  
札幌驛ニ於ケル費用ハ大正三年以來變動ナシ

第二 船舶  
第一節 主要港灣別木炭發著數量

一、發送  
港灣別發送數量ヲ見ルニ次表ノ如シ。

主要港灣別木炭發送數量

港名	所在府縣	年次		
		大正八年	大正九年	大正十年
宮古	岩手	一五、四九八	五六、八七一	五七、二四〇
伯古	大分	三八、七七六	二五、〇〇〇	二五、九一五
島宮	高知	二五、九九四	一八、八八九	一五、八六〇
高宮	高知	一五、一八〇	一五、七三〇	一一、四〇〇
津高	高知	三一、六一九	一四、七八〇	一五、八六〇
崎重	高知	一六、八九〇	一一、四〇〇	一一、四〇〇
沼宮	高知	九、三〇〇	一〇、〇〇〇	三、六〇〇
田島	高知	八、三三四	七、八一六	九、六五四
奈長	高知	三、六六九	六、七二五	四、三六九
崎高	高知	六、三三〇	六、三二一	四、九二〇
津山	高知	二、三五〇	六、六八四	四、五二三
海宮	高知	六、〇四七	五、六三〇	四、〇二〇
島靜	高知	二、六二四	五、四八五	九、〇〇〇
浦和	高知	六、〇〇〇	五、〇二〇	四、〇二〇
江歌	高知	三、六七二	三、七六〇	三、六二〇
邊山	高知	一一、〇四六	二、五七八	四、六八八
須仙		二、五〇〇	二、五〇〇	四、六八八

神 社 三 重 三、〇〇八 一、三二六 一、二七〇

右表ハ内務省土木局ノ調査ニ基キ作製セルモノナルガ之ニヨレバ大正八年中其ノ發送最モ多キハ大分縣ノ佐伯港ニシテ三萬八千七百七十六噸次ハ宮崎縣油津港ノ三萬千六百十九噸同縣細島港ノ二萬五千九百九十四噸三重縣河崎港ノ一萬六千八百九十噸岩手縣宮古港ノ一萬五千四百九十八噸等ナルガ九年ヲ見ルニ八年ニ第五位ノ宮古港ハ第一位ニ上リテ五萬六千八百七十二噸トナリ八年ヨリ四萬千三百七十三噸ノ増加ヲ來セリ。第二位ハ佐伯港ニシテ二萬五千噸次ハ細島港ノ一萬八千八百八十九噸ニシテ共ニ減少ヲ示シ高知縣浦戶港ハ一萬五千七百三十噸ニテ八年ヨリ多少ノ増加ヲナシ油津、河崎兩港ノ上位ニアリ油津港ハ八年ヨリ一萬六千八百三十九噸減少シ、河崎港ニ於テハ五千四百九十噸ノ減少ヲ示セリ、更ニ同年ヲ見ルニ宮古港ハ三百五十七噸ノ増加ニアリ、細島港ニアリテモ二千二十六噸増加シ油津港モ多少増加セリ。

二、到 着

港灣別木炭到着數量ヲ見ルニ次表ノ如シ。

主要港灣別木炭到着數量

港名	所在府縣	大正八年	大正九年	大正十年
横濱	神奈川	三、四、五〇〇	四一、八九一	三〇、二八七
新潟	新潟	三一、九九〇	三三、二〇〇	二八、九六〇
小倉	福岡	四、五、二五〇	二八、九六〇	三一、〇二六
鹽竈	宮城	一九、八四四	二四、〇五四	二六、三〇四
堺	大阪	二一、二五四	一九、〇九三	二二、六七七
名古屋	愛知	一七、七〇〇	一四、五〇〇	一五、〇〇〇
吳	廣島	一〇、九五二	一〇、八六四	六、〇〇〇
岸和田	大阪	八、六五五	九、八二九	一四、五五〇
鹿兒島	鹿兒島	八、九九二	九、〇三二	一一、八〇六
若松	福岡	八、六四〇	八、九六四	八、七一五
大牟田	福岡	八、六四〇	六、九〇六	七、〇五〇
西宮	兵庫	六、三七五	六、一五〇	七、一五〇
佐世	香川	七、〇七二	五、九四二	六、七三〇
高松	香川	七、六〇〇	五、六〇二	七、一一三
和歌山	和歌山	三、八八〇	五、一〇〇	二、七二〇

上表ハ發送同様内務省土木局調査ニ依リ作製セルモノナルガ之レニ依レバ大正八年ハ宮城縣鹽竈港ノ四萬五千二百五十噸ヲ第一位トシ、新潟縣新潟港ノ三萬四千五百噸、龜岡縣小倉

港ノ三萬一千九百九十噸愛知縣名古屋港ノ二萬一千二百五十四噸大阪府堺港ノ一萬九千八百四十四噸等之レニ次グ。九年ヲ見ルニ一般ニ減少シ八年第二位ニアリシ新潟港ハ一千三百噸ノ減少ヲ示シ、小倉港ハ四千四十噸ノ減少ニテ第二位、鹽竈港ハ一萬七千二百二十四噸ノ大減少ニテ第三位ニ下ル。堺港ニ於テハ反對ニ四千二百十噸ノ増加ヲ爲シ二萬四千五百四十噸トナリ、名古屋港ノ一萬九千九百九十二噸ノ上位ニアリ。更ニ同十年ヲ觀ルニ第一位ハ鹽竈港ニシテ九年ヨリ二千九百噸ノ増加ヲナシ、第二位ハ新潟港ニシテ却テ二千九百十三噸ヲ減少シ三萬二百八十噸、小倉港ハ前年ト變リナク二萬八千九百六十噸ニシテ第三位ニアリ、第四位ノ堺港ハ二千二百五十噸ノ増加ニテ二萬六千三百四噸、次ハ名古屋港ニシテ三千五百八十噸ノ増加ヲ示シ二萬二千六百七十七噸ナリ。斯クテ十年度ハ前年ニ比シ一般ニ到着ノ増加シタルヲ觀ル。

第二節 主要港灣ニ於ケル木炭積卸諸費用

一、東京鐵道局管内  
東鐵管内主要港灣ニ於ケル積卸料其ノ他

港名	費目	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年
濱	陸揚	〇・八〇〇	一・二〇〇	一・六〇〇	二・八〇〇	四・八〇〇	四・八〇〇	四・四〇〇	三・六〇〇	二・四〇〇	六・〇〇〇	四・八〇〇
芝	船内人夫賃											
浦	船内人夫賃											
靈	沖取解賃			〇・七六		〇・二四	〇・三六	〇・四八	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	一・二〇
岸	配芝	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・五〇〇	〇・八〇〇	〇・八〇〇	一・六〇〇	一・六〇〇	一・六〇〇	二・〇〇
島	達京橋區	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・四〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・六〇〇
津	同松崎ヨリ	〇・九〇〇	〇・九〇〇	〇・九〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・八〇〇	一・八〇〇	一・八〇〇	二・四〇〇	二・八〇〇	二・八〇〇
子	解積及	〇・二〇〇	〇・二〇〇	〇・二〇〇	〇・三〇〇	〇・三〇〇	〇・二七	〇・二二〇	〇・三〇〇	〇・三〇〇	〇・二八	〇・二八
木更	陸揚	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八〇	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八

一、名古屋鐵道局管内  
木炭船卸費用（一噸當）

港名	種別	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年
名古屋	自紀州神宮至名古屋堀本船賃	一七五	一七五	一七五	一七五	一七五	二八〇	二八〇	三一五	三八五	三八五

本港移入木炭ハ主トシテ紀州沿岸發ノモノニシテ帆船ニテ直接名古屋堀川岸ノ荷主倉庫迄運送シ居レリ而シテ陸揚賃(倉入)ハ現在一噸五十二錢位ナリ

三、神戸鐵道局管内  
神鐵管内主要港灣ニ於ケル積卸料其ノ他  
大阪港（安治川口）

年次	貨車取卸及解積込賃	市内倉庫又ハ船ヨリ水揚及陸上小運搬	雜手数料及計	記事
大正三年	二〇〇	一七	一〇〇	五五
大正四年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正五年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正六年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正七年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正八年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正九年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正十年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正十一年	二〇〇	一七	一〇〇	五八
大正十二年	二〇〇	一七	一〇〇	五八

年次	大正三年	大正二年	大正一年	大正〇年	大正九年	大正八年	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年	大正三年	大正二年	大正一年	大正〇年
陸揚費	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
海岸ト倉庫又ハ店舗間運搬	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
計	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
諸掛	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七
計	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七
記	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
事	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇

一五一

年次	大正三年	大正二年	大正一年	大正〇年	大正九年	大正八年	大正七年	大正六年	大正五年	大正四年	大正三年	大正二年	大正一年	大正〇年
帆船ヨリ倉庫ニ至ル解賃	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五	五五五
水揚賃	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
倉出賃	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五
陸上搬賃小	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五	三五五
合計	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五
記	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇	一七〇
事	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇

(木津川尻)

小解ヨリ水揚後ノ陸上



年次	大正四年	大正三年	大正二年	大正一年	大正	年次	官津港		年次	大正二年	大正一年
							積込	陸揚			
本船積卸	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	九五〇	七〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇
解賃	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	八五〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇
運倉庫解間	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二四〇	二六〇	二四〇	二六〇	二六〇
間下倉庫											
手敷料	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇
計	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
記事											

一五三

年次	大正四年	大正三年	大正二年	大正一年	大正	年次	大津港		年次	大正二年	大正一年
							積込	陸揚			
津驛港間解	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九〇〇	七〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇
料本船積	七〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	八五〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇
卸積	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	二四〇	二六〇	二四〇	二六〇	二六〇
記事											
船積又ハ港ハ倉庫間運搬又	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇
計	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
記事											

一五二

年次	船積	陸揚	運驛 搬マ	倉庫 搬マ	船積 ト倉庫間	船積 ト驛間	陸揚 計	記事
大正三年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	手 數 料 ハ 感 搬 料 ヲ 包 含 ス
大正四年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	
大正五年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	
大正六年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	
大正七年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	
大正八年	一四〇〇	一九六	四四二	二二八	一六八	一八二	一三三	

一五五

高松港

年次	船積	手數料	計	船積 ト驛又ハ倉庫間	手數料	計	記事
大正三年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	兩 港 共 發 ノ ミ ニ シ テ 藩 ナ シ 小 松 島 ハ 構 内 ヨ リ 直 ニ 船 積 ス
大正四年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正五年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正六年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正七年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正八年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正九年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	
大正十年	一五五	一〇〇	二五五	二二五	三三五	八五	

境港

年次	本船積卸	舢賃	運驛 搬間	手數料	計	記事
大正三年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正四年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正五年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正六年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正七年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正八年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正九年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十一年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十二年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	

年次	本船積卸	舢賃	運驛 搬間	手數料	計	記事
大正三年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正四年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正五年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正六年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正七年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正八年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正九年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十一年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	
大正十二年	四四〇	一〇〇	一三三	三〇〇	八六	

一五四

大正七年  
正月  
開業  
止

年次	七	八	九	一〇	一一	一二
年	年	年	年	年	年	年
坂出港	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四
津港	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
計	五六	五六	五六	五六	五六	五六
丸龜港	五六	五六	五六	五六	五六	五六
多度津港	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
計	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六
水揚運搬マデ	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
倉庫マデ	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六	二六六
計	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇
計	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇	二二〇

年次	大正三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	一〇年	一一	一二
坂出港	五四	六二	六四	七〇	七三	八〇	七六	七〇	六二	六二
津港	四四	四八	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五
計	一一三	一一二	一一〇	一二五	一二〇	一二二	一二二	一二二	一一七	一一七
丸龜港	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
多度津港	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
計	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
水揚運搬マデ	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
倉庫マデ	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
計	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
計	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二

四、門司鐵道局管内

門鐵管内主要港灣ニ於ケル積卸料其ノ他

廣島、宇品港。(八貫入一俵ニ付)

發送ハ全部帆船積ニテ岸壁ニ横付ノ上積付ク。故ニ諸掛トシテハ左記ノミ。到着ナシ。

年次	自大正三年	自五年	自六年	自八年	自九年	自一二
陸上ヨリ	一・二	一・五	一・五	一・五	一・五	一・五
積込迄	一・二	一・五	一・五	一・五	一・五	一・五
倉入賃	一・〇	一・五	一・五	一・五	一・五	一・五
倉出賃	一・〇	一・五	一・五	一・五	一・五	一・五

柳井津港。(六貫入一俵ニ付)

發送ハ殆ト汽船積ニシテ満潮ノ際岸壁ニ横付ノ上積込ヲ爲ストキハ(イ)(ロ)ヲ要セズ  
到着ナシ。

年次	自三年至五年	自六年至七年	自八年至一〇年	自一二年至三年
本船積卸賃(解)	〇・八	一・〇	一・二	一・〇
本船積ノ場合(賃)	〇・五	一・〇	一・二	一・〇
解取又ハ横付(倉)	〇・八	一・〇	一・二	一・〇
入賃(ホ倉)	〇・五	一・〇	一・二	一・〇
出賃	〇・五	一・〇	一・二	一・〇

三田尻港。(五貫入一俵ニ付)

發送ハ全部帆船積ニテ岸壁ニ横付ノ上倉庫ヨリ直接船積ス。故ニ諸掛トシテハ左記ノミナリ。

年別	倉出ヨリ船積迄
三年—七年	一〇〇
八—一	一〇五
一二	一二二

下關港。(六貫入一俵ニ付)

發送ハ皆無到着ハ全部帆船積ニシテ岸壁ニ横付陸揚ヲナス。爲ニ水切賃トシテ左記ヲ要スル外諸掛ナシ。

自三年至七年	〇・四	自八年至十二年	一〇〇
--------	-----	---------	-----

門司港。(八貫入一俵ニ付)

發着共主トシテ帆船積ナリ。帆船積卸ハ全部岸壁ニテ爲シ又汽船積卸モ岸壁ニテ爲スコトアリ。此ノ場合ハ(イ)(ロ)ヲ要セズ。

年別	汽船積卸(イ)介スル場合	帆船積卸(ロ)積卸ノ場合	取切又ハ汽船積卸(ハ)岸壁横付	入賃(ホ)倉出賃(ヘ)
自六年	〇・五	四・〇	一・五	一・〇
自七年	〇・七	五・〇	一・八	一・一
自八年	〇・八	六・〇	二・〇	一・二
自九年	〇・八	六・〇	二・〇	一・二
自一〇年	〇・八	六・〇	二・〇	一・二
自一一年	〇・八	六・〇	二・〇	一・二
自一二年	〇・五	四・〇	一・五	一・〇

若松港。(八貫入一俵ニ付)

發着共殆ト帆船積ナリ。帆船積卸ノ場合ハ岸壁ニ横付スル爲ニ(イ)(ロ)ヲ要セズ。

年別	汽船積卸(イ)介スル場合	帆船積卸(ロ)積卸ノ場合	取切又ハ汽船積卸(ハ)岸壁横付	入賃(ホ)倉出賃(ヘ)
自三年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自六年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自七年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自九年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自一〇年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自一一年	一・二	一・三	〇・四	〇・四
自一二年	一・五	一・七	〇・七	〇・五

吉塚、博多港。(八貫入一俵ニ付)

發送ハ稀ニ汽船積アリ。到着ハ全部帆船積ニテ岸壁ニ横付ノ上取卸ヲ爲ス、此ノ場合(イ)

(ロ) ナ要セズ。十二年以前ノ分不明ナリ。

年別	(イ) 汽船積卸(解)ノ 介スル場合	(ロ) 積卸ノ場合	(ハ) 水船取切又 ハ(ニ)倉入賃 (ホ)倉出賃
十三年	六・〇	一・〇	一・五

長崎港。(八貫入一俵ニ付)

發送ナシ。到着ハ全部帆船積ニテ岸壁ニ横付ノ上船ヨリ直接倉入スル爲一俵ニ付金四錢ヲ要スル外掛費ナシ。

佐世保港。(八貫入一俵ニ付)

發送ナシ。到着ハ全部帆船積ニテ岸壁ニ横付スル爲諸掛トシテハ左記ノミナリ。

年別	水切賃(帆 船ヨリ陸揚賃)	倉入賃	倉出賃
三年	〇・五	一・〇	一・〇
五年	〇・七	一・五	一・五
六年	〇・七	一・五	一・五
七年	〇・七	一・五	一・五
八年	二・〇	二・〇	二・〇
十二年	二・〇	二・〇	二・〇

鹿兒島港。(八貫入一俵ニ付)

發着共主トシテ帆船積ナリ。帆船積ノ場合及ビ汽船ニテ岸壁横付ノ場合ハ(イ)(ロ)ヲ要

セズ。

年別	(イ) 汽船積卸(解)ノ 介スル場合	(ロ) 積卸ノ場合	(ハ) 水船取切又 ハ(ニ)倉入賃 (ホ)倉出賃	(ニ) 務稅倉入賃 倉出賃
三年	三・〇	一・三	三・七	一・〇
六年	三・〇	一・三	三・七	一・〇
七年	四・五	一・五	四・五	一・〇
九年	四・五	一・五	四・五	一・〇
十二年	三・〇	一・三	三・七	一・〇

大分港。(八貫入一俵ニ付)

發送ハ全部帆船積ニシテ岸壁ニ横付スル爲ニ倉庫又ハ陸上ヨリ直接船積ナス。故ニ諸掛トシテハ左記ノミナリ。

年別	陸上又ハ倉庫 ヨリ船積迄	倉入賃	倉出賃
三年	一・〇	〇・五	〇・五
四年	一・〇	〇・五	〇・五
五年	一・二	〇・五	〇・五
七年	一・三	〇・五	〇・五
八年	一・五	〇・五	〇・五
十二年	一・〇	〇・五	〇・五

佐伯港。(八貫入一俵ニ付)

全部帆船積ナリ。同港倉出ヨリ大阪港倉入迄一俵ニ付二十四五錢ニテ船主ニ於テ請負トナシタル爲メ費目別ニ調査不能ナルモ倉出船積迄凡ソ二錢ナルベシ。

細島港。(九貫入一俵ニ付)

主トシテ大阪行ニシテ汽船帆船兩便アリ。汽船積ノ場合ハ船側迄荷主側ニテ、本船積込賃ハ汽船側ニテ負擔ス、帆船積ハ岸壁ニ横付スル爲ニ倉庫ヨリ直接船積ヲ爲ス。最近ニ於ケル諸掛ヲ見ルニ次ノ如シ。十二年前ノ分ハ不明。

汽船積 (船積)	帆船積 (倉出ヨリ船積迄)	海上保險	使縣營岸壁倉入賃
四・〇錢	一・五錢	二・〇錢	〇・五錢

五、仙臺鐵道局管内

主要港灣ニ於ケル積卸料其ノ他 (一噸當)

港灣	年次	費用		別	合計	記	事
		船積	陸地間				
青	大正三年	一一二錢	四八錢	一一三錢	七三錢	船、本船間費用中ニハ船内人夫ノ費用ヲ含ム。	
青	大正四年	一一二錢	四八錢	一一三錢	七三錢		

新	湊											森										
	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年		
四五	四〇	四二	四〇	四〇	四〇	八〇	八〇	八〇	八〇	八〇	二四	二四	二二	二〇	一六	一六	一四	一四	一四	一四		
一三〇	一〇〇	一二〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九六	九六	八四	八〇	六四	六四	五八	五八	五八	五八		
五〇	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	四五	二六	二六	二三	二二	一八	一八	一六	一六	一六	一六		
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	三	三	二	二	二	二	二		
一一九	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一四六	一四六	一二八	一二二	九八	九八	八八	八八	八八	八八		

小型船積ニヨリ産地ヨリ直送セラル。陸地間費用ハ水揚及倉入費、其ノ他費用ハ倉庫ヨリ購ホル。込ノ持込費。

船積中ニハ水先案内費ヲ含ム。其ノ他費用ハ船内人夫ノ費用。



年次別	國		館		小		樽		室		蘭		劍		路	
	入賃	倉出	仕賃	沖仲	入賃	倉出	卸賃	陸揚	仕賃	沖仲	入賃	倉出	卸賃	陸揚	仕賃	沖仲
大正三年					一〇	二・五		二・五		八	一・五		三・〇		二・〇	三・〇
四年																
五年																
六年																
七年																
八年																
九年																
一〇年					二・〇	三・五	一・四	七・七	一七・〇	二・〇	五・〇	三・〇	二・五	五・五	三・〇	七・五
一一年					三・五	三・五	一・四	五・六	一七・〇	二・〇	五・〇	三・〇	三・〇	五・五	三・〇	七・五
一二年					三・五	三・五	一・四	五・六	一七・〇	二・〇	五・〇	三・〇	三・〇	五・五	三・〇	七・五
一三年	一・八	四・二	一・四													

〔備考〕 函館港ニ於ケル年次別費用ハ調査材料ナキタメ不明ナリ

### 第三節 三陸及紀州方面ノ木炭移出狀況

本邦木炭産地トシテ有名ナル東北ノ岩手及關西紀州ノ鐵道敷設ナキ海岸方面ヨリ各消費地ニ向ケ移出スル木炭輸送ノ經路ヲ調査スルニ次ノ如シ。

#### 一、岩手炭移出狀況

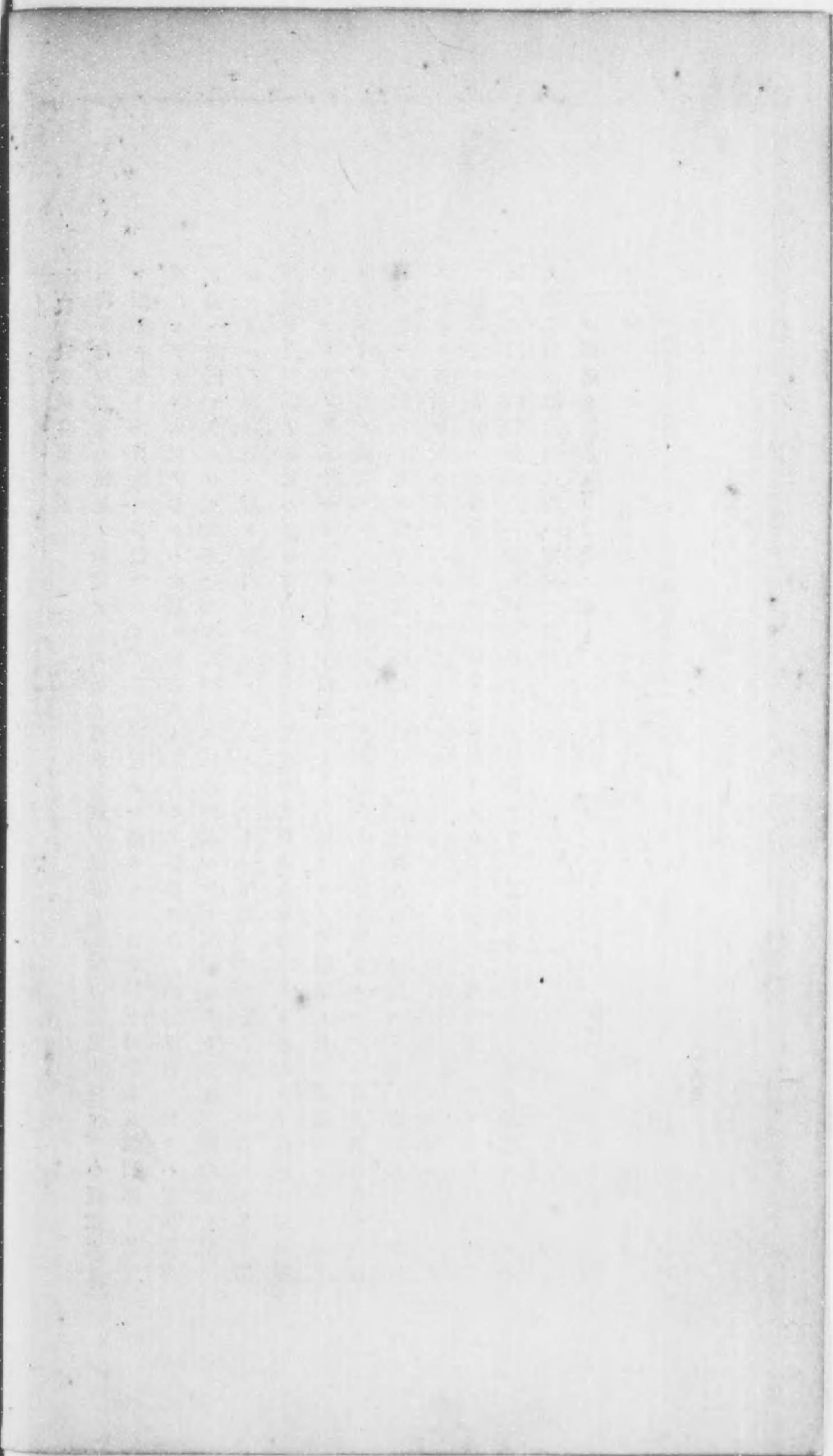
岩手海岸方面ハ鐵道ノ敷設ナキガ爲メ海岸ニ近キ地方ノ産炭ハ附近ノ港マデ小運送セラレ船舶ニ依リ消費地ニ移出セラル。其ノ狀況ヲ一瞥スルニ岩手縣上閉伊郡及氣仙郡ニ於テ産出セラル、木炭ノ多クハ山田、大槌、吉濱、大船渡等ノ諸港ヨリ（歐洲戰前ニ於テハ直接東京方面ヘ搬出セラレシモ大正七、八年當時ヨリ船腹拂底ニヨリ大體中止シ爾後三陸汽船會社ノ船ニヨル）鹽竈港ヘ向ケ搬出セラル、モノニシテ十一年調ニテ二十二萬三千俵アリ、又下閉伊郡及九戸郡ノ木炭ハ概ネ宮古、老田、小木、羅賀、普代、野田、久慈種市等ノ諸港ヨリ八戸ヘ向ケ搬出セラレ其ノ數量十一年ニ於テ八十萬俵ノ多キニ達セリ、之等鹽竈、八戸ニ到着セルモノ及ビ東北本線ニ近ク産炭セラレタル約百六十五萬俵ハ其ノ附近所在ノ一戸、小島谷、沼宮内、盛岡、日詰、花巻、一ノ關其ノ他ノ驛ヨリ直接鐵道ニ由リ東京、横濱方面ニ移出セラル。岩手縣十一年度ニ於ケル移出總數ハ八十六萬四百七十俵ノ多量ニ上レリ。尙宮古、老田、小木、羅賀各港ノモノモ鹽竈港ニ廻漕シ後鐵道ニヨルノ便ナルガ如ク推セララル、モ一般市場ニ於テハ八戸炭ノ名高キヲ以テ取引關係上一旦八戸ヘ集中スル狀態ナリ。當地方ニ於ケル輸送狀態ハ上述ノ如ク約二割ハ海送、約八割ハ陸送（鐵道）ナリ。

之ガ經路ヲ圖示スレバ次ノ如シ。

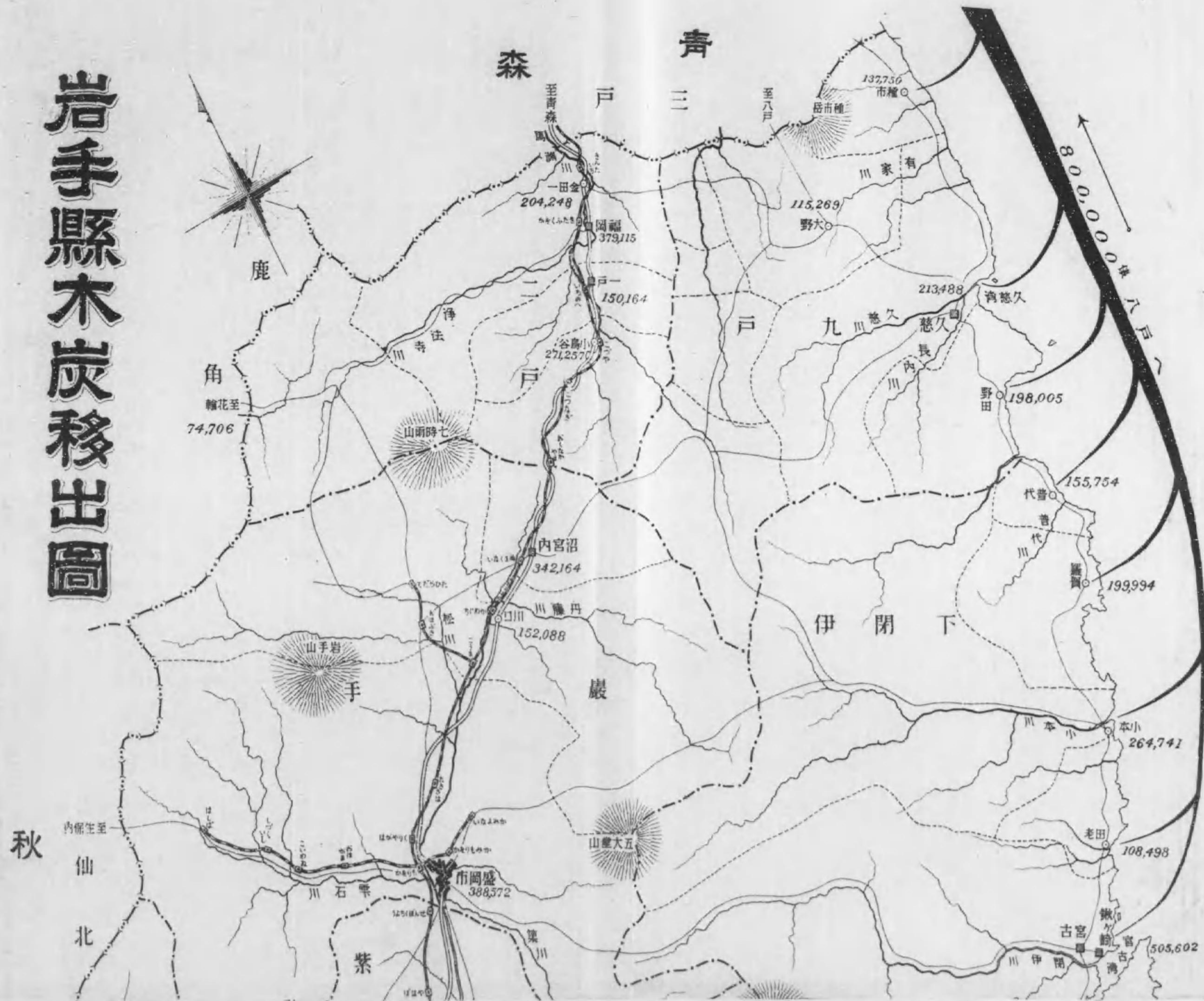




雲南鐵路圖



# 岩手縣木炭移出圖







## 二、紀州炭移出狀況

紀州ニ産スル熊野炭ハ既ニ述ベタルガ如ク備長炭ト稱シ、三大著名炭ノ一ニ數ヘラレ風クヨリ其ノ良質ヲ天下ニ謳ハレ、白炭中ノ最良品トシテ我木炭市場ニ重キヲ爲セリ。

其ノ主産地ハ和歌山縣下日高、西牟婁、東牟婁ノ所謂紀南ノ地ニシテ炭材タル樫ハ多ク郡ノ中部ヨリ北部ニ亘レル山地ニ繁生シ西牟婁ノ秋津川之ニ隣レル日高ノ清川、高城ノ各村ハ最も此ノ資材ニ富ミ製品産額ハヨク他ノ各村ヲ抜ケリ。備長炭トシテ最も優良ナルハ姥目樫ト呼バル、炭材ヨリ製シタルモノニシテ之ハ主ニ紀南ノ海濱山麓ニ育生ス。其ノ生産量ハ比較的僅少ナルモ備長炭今日ノ名ヲ成サシメタルモノハ製炭法ノ宜シキニ因ルト雖モ此ノ種獨特ノ資材ニ負フ所大ナリ。此ノ外之等三郡ヨリ出ヅル白炭ニ檜櫟、及雜木ヲ資材トスルモノ多ケレドモ茲ニ曰フ備長炭ニハ非ズ。黒炭ハ有田、伊都、那賀等紀北ノ各郡ニ多少ノ産出アレドモ其ノ量ハ到底白炭ニ及バズ。有田ノ湯淺、伊都ノ橋本、那賀ノ野上、岩出ハ黒炭ノ主ナル集散地ニシテ一部ハ鐵道ニヨリ大阪ニ出ヅルモ大半ハ縣内消費ニ充テラル。此ノ地方ハ陸上ニ於ケル交通機關ノ見ルベキモノナキヲ以テ縣外移出ハ大半海路ニ由ル。製品ハ初メ産地ヨリ相當ノ場所マデ人脊ニ頼リテ持出ダサレ、夫レヨリ或ハ河川ヲ利用シ或ハ牛車ニヨリテ海岸集散市場ニ搬出シ其處ヨリ遠キハ帆船近キハ發動汽船ニヨリ夫々消費地ニ送ラル。阪神地方ニ移出セラル、モノハ約六割餘ニ上リ、之等ハ西牟婁郡ノ中央ヲ貫流スル日置川ヲ界トシテ西ニ位スル日高ノ御坊、南部、西牟婁ノ田邊、新庄ノ諸港ヨリシ、名古屋、東京方面ニ向フ